
瑠璃とお菓子

くる ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瑠璃とお菓子

【Nコード】

N7254Y

【作者名】

くる ひなた

【あらすじ】

皇太后陛下付きの一番年若い侍女は、亡き母に習ったお菓子作りが得意だった。彼女と泣く子も黙ると恐れられる宰相閣下の、これから。

瑠璃と栗（前）

ルリの人生は、一度没落しかけた。

ルリの父は、大国グラディアトリアの名のある侯爵であった。

広大な領地を有し多くの領民を抱え、おかげで数ある貴族の中でも特別優雅を誇っていた。

母は正妻ではなく愛人の立場であったが、彼女は父を深く愛していたようだ。

しかし、やがて侯爵家は栄華に溺れ、領民に圧政を敷き始める。溢れある財力にものを言わせて、王宮での発言権を増した父は汚職に塗れ、そういう輩が私利私欲で国政を食い荒らし、大国の内部はだんだんと腐敗していった。

そんな危機的状况を開いたのが、皇帝フリードリヒ崩御に伴い即位した、彼の第一子ヴィオラントだ。

銀髪と紫の瞳の絶世の美貌を誇る新皇帝は、成人を迎えたばかりの傀儡皇帝だとなめてかかろうとした古狸共をもの見事に返り討ちにし、その全身を血塗れにして王宮の腐敗の中を突き進んだ。

国政を乱し、領民を苦しめた罪で、多くの貴族が彼の手により首を刎ねられた。

その中には、ルリの父も含まれていた。

父は、領民に重すぎる税を課し、男達を私用の労働にかり出し、女や子供を飢えさせた。

それを諫める部下や陳情に訪れる領民の代表達を処刑するなど、数々の私刑も繰り返していた。

それらの深い罪を、命をもって償うのは当然のことかもしれない。当主を処刑された侯爵家は財産の全てを没収され、ある者は路頭に迷い、ある者は復讐と称して皇帝に刃を向け、彼の臣下に返り討ちにされた。

その時、ルリは六歳になったばかりだった。

もともと、愛人の子であるルリは父の屋敷に住まわせてもらえるわけもなく、王城の近くに屋敷を与えられて母と二人で住んでいた。しかし、当然父名義のその屋敷も没収の対象となった。

住む所を無くし、父からの生活費も途絶え、今や罪人となった侯爵と関係したことで母方の実家からも干され、ルリと母も路頭に迷うしかないかと思われた。

しかし、そんな母子に救いの手を差し伸べた人がいる。

亡くなった皇帝フリードリヒの正妃であり、新皇帝ヴィオラントの義理の母、エリザベス皇太后陛下だ。

ルリの母は、もともとは彼女の侍女を務めていた。それがきっかけで父に見初められ、ルリを生んだのだ。

母子の窮状を聞きつけた皇太后は、再び母を自分の侍女にと召し上げ、王宮内に部屋を与えて二人を住まわせてくれた。

さらには、ルリに侍女見習いをさせる傍ら、一通りの教育まで受けさせてくれたのだ。

それから九年後、母が病を患ってルリの成人を待たずに亡くなると、皇太后陛下はルリの後見を買って出て、翌年の成人の儀を母に代わって心から祝ってくれた。

慈愛の溢れる皇太后陛下へのルリの感謝は計り知れず、好きな道に進んでいいと言ってくれた彼女に対し、一生侍女としてお側にお仕えさせて下さいと請うた。

彼女の側は心地よかった。侍女の先輩達も、姉のようにルリを氣遣ってくれる。

二の姫であるミリアニスは騎士となり、皇太后陛下の第一騎士としていつも側にいたが、侍女のルリにも優しく接してくれた。

そして、時々顔を出すのが、ルリとは同い年の末の御子であるルドヴィーク。

彼は、ルリの父を肅清し、歴史に残る大改革を成し遂げて退位したヴィオラントの跡を継いで、十六歳で新たな皇帝となった。

さらに皇太后陛下には、隣国コンラートの王妃となった一の姫ア

マリアスと、もう一人。

夫であるフリードリヒの側室で、リュネブルク公爵家の一人娘マジェンタが生んだヴィオラントと同腹の子——クロヴィス・オル・リュネブルク。

マジェンタは彼を産み落とすと引き換えに亡くなり、心優しい皇太后陛下は、いわゆる愛人の子であるクロヴィスまでも我が子と変わらず深い愛情を持って育てたのだ。

リュネブルク公爵家を祖父より受け継ぎ、グラデアトリアの宰相となった彼は、一見穏やかで優しい紳士であるが、その瞳は冷たく厳しいと恐れられている。

時々名のある美女と浮き名を流しながらも、特定の恋人を持たないことでも有名であった。

彼も、そして退位しレイスウェイク大公爵となって王宮を出たヴィオラントも、やはり成人を過ぎた男性だからか、あまり皇太后陛下の元を訪れることはなかった。

しかし、ある時を境に、そんな皇太后の息子達が頻繁に彼女の私室に集まるようになっていた。

そのきっかけとなったのが、少し前に先帝ヴィオラントに嫁いだシュタイアー公爵家の令嬢であり、そんな貴重な存在である彼女は、今、ルリの目の前の地面に踞っていた。

「——スマイレ様？」

その日、侍女頭から使いを頼まれたルリは、一人街に下りていた。街の小さな雑貨屋の一つに、腕がいいと評判の細工師がいて、彼に頼んでいた髪飾りが出来上がったのを受け取りに行ったのだ。

ついでに他の店を自由に見て回ってきてもいいですよ、と侍女頭はルリを送り出した。

年頃の娘らしく街にショッピングに繰り出すわけでもなく、休日も一人王城の図書館で過ごすようなルリを気づかってくれたのかも

しれない。

そんな侍女頭のおせっかいに苦笑しつつ、せっかくだからと少し街をぶらぶらしてきたルリは、王城に戻ると真っ直ぐに後宮を目指して歩いていった。

普段は回廊を通るのだが、実は裏の庭を通った方が、城門からは近道なのだ。

そうして、緑の芝生を踏みしめて歩いていたルリの前に、突然彼女は現れた。

「スマイレ様、如何なさいました？」

ふわふわくるくるの柔らかい髪は世にも珍しい漆黒の色。

瞳の色は、彼女の夫である先帝ヴィオラントと同じ、稀少な紫。

長い睫毛に大きな瞳、ちゃんと小さい鼻と口は、シンメトリーの絶妙なバランスで配置された、誰しもが認める美しさ。

そんな文句なしの美少女は、ルリが慌てたように声をかけると、踞って足元に向けていた視線を彼女に向けた。

「あっ、ルリさんだ。こんにちは」

「……」

ピンクの頬をしたとびきり可愛らしい笑顔が零れ、鈴のなるような声がルリの名を紡いだ。

ルリは思わず息を飲む。侍女頭ならまだしも、ルリのような裏方の仕事がメインの侍女の名など、大公爵夫人が憶えてくれているとは思ってもいなかったからだ。

その思いがそのまま顔に出ていたのか、少女はクスクスと笑って言った。

「何度も皇太后様のところにお邪魔してるんだから、美味しいお菓子

用意してくれる人の名前くらい知ってるよ。ルリさんは、焼き菓子が得意なんでしょ？ この前もらったくるみ入りのやつ、すっごく美味しかったー」

「あっ、ありがとうございます！」

焼き菓子が得意なのは母だった。母の作ったそれを皇太后陛下が喜んで食べて下さるので、ルリも習ったのだ。

城の料理長にも負けないわっと、こっそり耳打ちして下さる皇太后陛下は、大切な客人にのみルリの菓子を提供する。

初めて訪れた時からルリの菓子で持て成されたこの愛らしい公爵令嬢が、皇太后陛下にとってもグラディアトリアの皇族全員にとっても、特別に大切な存在であると、もう誰もが知る所だった。

「こんな所で、何を？ ……大公閣下とご一緒ではないのですか？」

ルリが側に近づくと、レイスウェイク大公爵夫人スマイレは、ぴよこんと立ち上がった。

ルリも大きい方ではないが、彼女はもっともっと小さくて、こちらをうかがう上目遣いは女であってもドキリとするほど可愛い。年は二つ下の十六歳で、夫である大公閣下とは十二も離れていて、かのお方の奥方への溺愛はそれはそれは凄まじいと聞く。

よく一人でこんな所をうろうろすることをお許しになったな、と思いつながら問うと、スマイレは「あのね」と上を指差した。

「その二階、クロちゃんの執務室なの。ヴィーは今そこで難しい話をしているから、退屈だから出てきちゃった」

「はあ……」

“クロちゃん”とは泣く子も黙る宰相閣下クロヴィス・オル・リユネブルク公爵、“ヴィー”は彼女の夫であるヴィオラント・オル・

レイスウエイク大公爵。

この可愛らしい少女にだけ呼ぶことが許された渾名を正しい名前に変換しつつ、ルリは上階を振り仰いだ。

「部屋から見える所にいるならいいって言われたから」

「そうでございますか」

「そしたら、ここに栗が落ちてたの」

「え？」

そういう彼女の掌を覗き込むと、なるほど大振りの木の実が握られている。

「この国では、栗は食べないんですよ？」

「そうでございますね。それは大抵、庭園に住まう動物の食糧や家畜の餌になりますね」

「ところがどっこい、これってば蒸したり焼いたりしたら美味しいんだよ？ 私の故郷では、秋の味覚として重宝されてたの」

「まあ……」

それはルリにとっては初耳だった。

とげとげのいがに包まれたその木の実は、確かにドングリなどと比べて大振りだが、人間の食用とはされていなかったのだ。

スマレはルリの見守る中、熟れて枝から落ちたいがを器用に木の棒で挟み開けて、中に二三個仲良く並んだそれを取り出すと、掌の上に載せてまじまじと眺めている。

「スマレ様、これの皮を剥いてから蒸したり焼いたりすればよろしいですか？」

「うーん、皮はとっても硬いからね。怪我しちゃうといけないから、まずは皮付きのまま茹でたらいいと思うよ。それでね、熱を入れて

から皮ごとナイフで半分に切って、中身をスプーンでくり抜くとい
い」

ルリはなるほどと頷きながら、少女の言葉に耳を傾けた。

大公爵夫人という立場ながら、スマレが料理に造詣が深いという
のは、特に後宮に仕える者の間では有名な話だ。

皇太后陛下の元を訪れる度に手作りのお菓子を差し入れ、それは
毎回彼女に仕える侍女達にも振る舞われる。

ルリも何度かご相伴にあずかり、その腕前が本物であることは疑
うべくもない。

しかも、元来甘いものが苦手で、子供の頃から菓子の類いを一切
口にできなかった先帝ヴィオラントが、彼女が作った菓子だけは躊躇
なく口に入れる。

そんな、様々な面において貴重で愛すべき大公爵夫人は、小さな
掌の上で木の実をころころ転がしていたが、突然自分のドレスの襟
元をちゃんと引っ張ると、慎ましい膨らみの中にそれをぽいぽいと
放り込み始めた。

「スッ、スマレ様！ 何をなさいますっ!？」

「持って帰って蒸そうかと思って。でも、この服ポケットないんだ
もん。手に持てるのなんて限られてるし……」

「いけませんっ！ そんな所に入れてはなりませんっ!」

驚いたルリは無礼も忘れ、彼女の小さな手を掴んでやめさせると、
慌てて懷から取り出したハンカチの四方を合わせて結びつけ、即席
の手提げ袋を作り上げた。

その中に、拾い上げた木の実を詰めてやると、スマレはルリを見
上げてにこりと笑う。

「ルリさん、ありがとう」

その笑顔を向けられると、何だか彼女が何をやってもを許してしまいそうな気がして、かの先帝陛下がこの小さな奥方を目に入れても痛くないほど溺愛しているのも、ルリはひどく納得がいった。

そうして、ひとしきり栗を拾い集めて袋がいっぱいになると、いがを棒で小突いていたスマレがひよいと上を見上げた。

彼女は、宰相の執務室であるという二階の窓を見つめ、しばしの間何やら考え込んでいたが、おもむろに実が詰まったままのいがを一つ掴み上げた。

それを見たルリは、柔らかな肌を棘が傷付けるのではないかと焦ったが、ふんわりと丸めた掌で器用にいがを包み込んだスマレは、「さすがに、いがはまずいか」とぼつりと独り言を漏らすと、その中から実を一つだけ摘み上げた。

そして、大きく腕を振りかぶったと思ったら、「えいやっ」と、それを件の二階の窓めがけて放り投げたのだ。

「――っ……!？」

「おー、入った入った」

絶句するルリを尻目に、狙い通りの場所に放り込むことに成功したらしいスマレは、得意げに胸を張った。

「――スマレか？」

それに対し、二階の窓から降ってきたのは、穏やかな低い美声だった。

思わず振り仰いだルリの目に飛び込んできたのは、陽の光に透ける絹糸のような白銀の髪を携えた美貌。

記憶の奥にこびり付いた畏怖に、ルリは知らずに息を呑み身を強張らせた。

先帝ヴィオラント——ルリの父の首を刎ねた張本人だ。

ルリ自身は、彼に対して恨みも憎しみも抱いてはいないが、母は皇太后陛下には深い恩義を感じつつも、死ぬまですっとヴィオラントを怨んでいたように思う。母は、確かに父を愛していたのだから、恐れ多い男を前にし、慌ててルリは頭を垂れる。

対して、無邪気な様子で彼に手を振ったスマレは、楽しそうな声で尋ねた。

「ヴィー。今の、クロちゃんにヒットした？」

「したぞ。煮詰まっていた頭が真っ白になっている」

無表情と名高い美貌が、愛する奥方の前ではかすかに綻ぶ。

それをちらりと盗み見たルリは、無意識にほっと息を吐き出した。

可笑しそうな声色で妻に答えたヴィオラントが室内を振り返ったと同時に、がばっと彼の傍らから顔を出したのは、今度はその部屋の主たる宰相クロヴィスだ。

どうやら先程スマレが投げ込んだ栗は、見事に彼の頭に命中したらしい。

いつもはどこまでも涼やかで冷静な宰相閣下が、その眦をつり上げて階下の少女を怒鳴りつけた。

「こらっ、この悪戯娘！ 窓にものを投げ込むんじゃないですよっ！」

自分が叱られたわけでもないのに、ルリは思わずビクリと竦み上がる。しかし、当の本人はというと、怒りのオーラを噴き出す宰相閣下に怯むことのなく、にこりと笑顔を返した。

「ちがうよー、私が投げたんじゃないよー。可愛い可愛いリスさん

が、そろそろお茶の時間だよって、仕事馬鹿な宰相様に教えてくれたんだよー」

「その堂々と嘘を吐き出す可愛い唇を摘んであげますから、さっさと上がってきなさい」

平気でデタラメを言う少女に対し、どこか諦めたようなため息をつきながら眉間の皺を手で揉んだクロヴィスは、ふと視線をスマイレの傍らにいた侍女に向けた。

「そのあなた」

「あっ、はっ、はいっ！」

突然声をかけられたルリは、慌てて背筋を伸ばして返事をする。

若い侍女の初々しい反応にこっそり苦笑したクロヴィスは、向かいの兄ヴィオラントを何ごとか問うように見た。心得たヴィオラントがそれに頷いて返すと、彼は再び窓の下ルリに向き直った。

「あなたの仕事を増やしてしまっただけですが、そこに私の義姉をここまで連れてきてはくれませんか」

「はい、私でよろしければ」

「すみませんね、よろしく願いますよールリ」

「――っ……！」

ルリは再び息を呑む。

まさか、若き皇帝を支えてグラディアトリアを統括する宰相閣下まで、ただの侍女の名を知っているとは思わなかった。

その傍らの紫の瞳も、何もかもを知っているかのように、静かにルリを見据えている。

おそらく、彼は――彼らは、ルリの生い立ちについても把握しているのだろう。

肅清された貴族の庶子であるルリが、今後不穩の種となるかどうか、きつと見定められているに違いない。

ルリ自身、父の一族の恨みを晴らそうとも、国家の転覆を狙おうとも思わないが、それをし得る動機のある人間として、マークはされているのかもしれない。

そう思うと、ルリの心はどんどん冷たく凍えるようだった。

――しかし

「ルリさん、一緒に行ってくれるの？」

そう言って、ルリの手に触れたのは柔らかな温もり。

あどけない大公爵夫人の、小さく壊れそうな掌が、ルリと手を繋ぐようにそつと絡まってきた。

その時ルリははつとして、再び階上を振り仰ぐ。

自分と少女に降り注ぐ二対の瞳は、ただただ温かく、疑念などかけらも混ざっていないように思えた。

大切な大切な少女を、ルリは託された――託してもらえた。

それは、彼らがルリを少しも疑っていないという証拠であり、そのことをルリに教えるための最適の手段とも思えた。

父の犯した罪から離れられなかったのは、ルリ自身だった。自ら柵の蔓に絡まりにいつて、人の目を恐れて疑心暗鬼になってしまっていたのだ。

それがどれほど愚かで無益なことかと、この時ようやく気づかされたような気がした。

胸が、じんと温かくなった。

ルリは、大切な少女の手を優しく握り返し、そつと引いて歩き始めた。

「一緒に参りましょうか、スマイレ様」

「
う
ん
」

瑠璃と栗（後）

「“ルリ”って、素敵な名前ね」

「まあ、ありがとうございます」

ルリという名は、母がつけてくれた名だ。

短く、特別に深い意味もない語句だが、皇太后陛下が「鈴の音のようで可愛いわ」と言ってくれるので、とても気に入っている。そんなルリの名を、ふわりと絡めた柔らかな手の主にも褒められて、また嬉しくなった。

「ルリってね、私の故郷では青色をした鉱物の名前で、宝物になるんだよ」

「まあ、そうなのですか？」

まだ王宮の建物に入る手前、スマレはそう言うと、拾い上げた小枝で土の地面に何やら書き始めた。

『瑠璃』

それは、ルリが今まで見たことのないような幾何学的な紋様で、もちろんさっぱり理解できなかったが、スマレはそれでもかまわないようだった。

「金・銀・瑠璃に瑪瑙に……あとは忘れたけど、とにかく七つの宝物・七宝の一つで、とっても綺麗な青色をしているの——ルリさんの瞳みたい」

金銀は、グラディアトリアでも装飾品にと重宝され、それらはたいてい高級なもので、それと並ぶ宝物に自分の名前を例えられたルリは何だか照れくさかった。

しかし、愛する母譲りの、そして慕わしい皇太后陛下とも似ていると言われる瞳を褒められたのは、とても嬉しく誇らしかった。

愛らしいレイスウェイク大公爵夫人の手を引いて王宮を歩けば、当然ながら多くの視線が集まってきた。

けれどそのどれもが好意的で、彼女がどれほどこの国の人々に歓迎されているのかがよく分かる。

いつもはツンと澄ました貴族のご令嬢様まで、「いいわね、その手を譲ってほしいわ」と、手を繋いだルリを羨ましがるほどだった。スミレはそんな人々に対して、とにかくにこにここと笑顔を返していたが、けてルリの手を離すことはなかった。

それは彼女が、大公爵夫人としての立場上愛想よく応対しながらも、実はそれほど社交の場が得意ではなくて、ルリの手に縋って早くその場を切り抜きたいと望んでいるようにも感じた。

そう思うと、ルリの中ではこの親しみ溢れる高貴な少女への庇護欲がむくむくと膨れ上がり、巧みに彼女を庇いながら目的地である宰相執務室を目指した。

そうして辿り着いたのは、見上げるほどの大きな扉。

ルリが仕える皇太后陛下の私室のそれと似ているが、宰相執務室の扉はさらに重厚な雰囲気があって、ノックをする手が思わず躊躇した。

それでも、片手に握った柔らかな掌に奮い立たされ、ルリは控えめにそれを叩いた。

「おかえり」

ノックに応える声よりも早く、内側から扉を開いてそう柔らかな声で出迎えたのは、この部屋の主ではなく、その兄である先帝ヴィオラントだった。

思わぬ近い距離で彼に相對してしまったルリは、何度見ても見慣れぬ至高の美貌にびくりと竦み上がる。

繋いだ手からそれを感じたのか、スマレはルリを見上げて小さく苦笑を漏らすと、今度は逆に彼女の手を引っ張って部屋の中へと連れ込んだ。

「ヴィー、ただいま」

「ああ。スマレ、何を持って帰ってきたのだ？」

「栗だよ」

スマレが自分で持つと言って、片手にぶらぶら下げてきた袋をヴィオラントに見せつつ、その入れ物をルリが工面したことが告げられる。

すると、怜悧な目元を優しく緩めて妻の話を聞いていた先帝陛下の視線が、すっとルリを捉えた。

思わず全身を緊張に強張らせた侍女に、彼もまた苦笑するように瞳を細めると、大切な少女を抱き寄せつつ言った。

「妻が世話になったな。礼を言う」

「――いつ、いえっ！」

「そなたも、義母上の使いの途中だったのではないか？ 手間を取らせてすまなかった」

「あ……いえ、急ぎの用ではありませんでしたし、帰りの時間も定められていましてので大丈夫です――それに」

ルリは相変わらず緊張が解けることはなかったが、ずっとどこか遠く恐ろしいばかりだった先帝陛下が、自分が手を引いてきた小さ

な少女を大事そうに腕に抱き、愛おしくて堪らない様子で頬を寄せる様を見ていると、何だか心の奥が柔らかく解れていくように思えた。

そして、そんな彼女を見ていると、自然とルリの唇から温かな想いがもれ出した。

「スマイレ様とご一緒できて嬉しゅうございました。思いがけずお会いできて、楽しい時間を過ごさせていただきました」

媚でも諂いでもない。本心からにじみ出た言葉というのは、相手の心に真っ直ぐ届くのだ。

ルリの言葉を聞いたスマイレは、ふっくらとした頬を薔薇色に染め、溢れんばかりの笑顔返してくれた。

その頬に、愛おしげに口付けしたヴィオラントは、無表情と有名な美貌をわずかに確かに綻ばせて、ルリに言った。

「そう言ってもらえると、ありがたい。そなたとスマイレは年も近い。また、相手をしてやってくれ」

「――はっ、はいっ！ 喜んでっ！！」

そんなやりとりを、執務机に凭れて微笑ましく見守っていたのは、この部屋の主である宰相クロヴィスだ。

対して彼をじっと見つめたスマイレは、おもむろに袋から栗を両手で掬って取り出すと、ヴィオラントの腕の中から伸び上がり、宰相の執務机の上にそれをごろごろんと転がした。

「こらっ。おもちゃを仕事机の上に散らかさないで下さいよ」

「おもちゃとは何だね、クロヴィス君。これはれっきとした食料だよ」

「そうですね。義姉上様のような小動物には、いい餌になるかもし

れませんね」

「いいえ、クロちゃんみたいな大型の動物の餌にもなるのですよ」
「……」

ルリは、かの宰相閣下が小さな少女に言い負かされたのを目の当たりにして、信じられない思いだった。

ふと見れば、そんな二人のやりとりを、先帝陛下が実に面白そうに眺めている。

ルリは実のところ、暇乞いをするタイミングを逃してしまっていたのだが、高貴な方々は誰も彼女に出て行けとは言わないので、黙って空気に徹することにした。

「あのね、今まで誰も食べなかったからって、食べられないものだと決めつけるのはつまらないよ。男の子なのに冒険心のない弟を持つて、おねえちゃまは非常に残念だ」

「木の実一つでえらい言われようですが……それはやはり家畜の餌ですよ」

「かたいっ！ もうっ、クロちゃんってば、ホント頭かたいっ！ そんなだから、いつも難しい顔して書類と睨めっこしなきゃなんないのよ。柔軟な考えができれば、ぱあっと名案が閃くこともあると思うんだよ」

「なるほど、一理あるな」

「兄上っ……！」

うむと頷いて先帝陛下が口を挟むと、冷厳と有名な宰相閣下が情けない声を上げた。

そんな、初めて目にする皇族方の微笑ましいやりとりに、ルリは恐れ多くも笑いを堪えるのに必死だった。

「硬い実だから食べられない」「誰も食べたことないんだから食

べられない”——でも、実は中身は意外に柔らかくって、しかも手を加えたら甘くて美味しいだなんて、食べてみなくちゃ一生分からないことだよ」

「——っ……」

それは、一見木の実のことを指しているように見えて、実は国政の事案に頭を悩ますクロヴィスを導く言葉だった。

もちろん、スマレは彼が何に悩んでいるのかも、それが国政にとってどれだけ重要な問題かも知りはしないが、頑に凝り固まった考えや価値観では、新たな答えは何も生まれて来ないと言いたいのだ。先帝陛下の言う通り、「確かに一理ある」と思ったのはルリだけではなかったようで、言われた本人であるクロヴィスもはっとそれに気づかされたのだろう。

彼は綺麗に整えてあった金髪をくしゃりとかき乱すと、ふっとため息をついて苦笑をもらした。

「なるほど、何ごともやってみなければ分からないとは、その通りですね。確かに、私は少々頭が固かったかもしれませんが」

「少々じゃなくて、めっちゃんくっちゃんに固いんです。かっちゃんこっちゃんです」

「スマレ、今日のところはそれくらいにしてやりなさい」

自らの不肖を認めたクロヴィスに、容赦なく畳み掛けるスマレと、それを呆れたように嗜めるヴィオラント。

そんな彼らのやりとりにも、笑いを堪えるルリもそろそろ苦しくなってきた。

しかし幸い、いたいけな侍女の腹筋に限界が訪れる前に、皇族方の喜劇の舞台はお開きとなった。

「この事案については、過去の例はこの際参考程度にとどめ、もう

一度一から考え直してみます」

そう言って、執務机の上に広げていた書類を束ねたクロヴィスに
対し、その兄ヴィオラントも「それがいいだろう」と頷いた。

退位した彼は、相談程度であれば話を聞かないことはないが、国
政の中枢に関わるようなことには意見も述べないようにしている。
それは、玉座を譲った末弟ルドヴィークの顔を立てるためである
とともに、彼らの手腕を信頼しているとの証なのだ。

憑き物がとれたような笑みを浮かべた弟に安心したのか、ヴィオ
ラントは栗の入った袋を持ち直した妻スマレを促すと、宰相執務室
をあとにした。

日が落ちない内に屋敷に戻るのが、レイスウェイク大公爵夫妻の
常だ。

最近では、王城訪問のついでに街に立ち寄り、のんびりと散策を
楽しんでから帰る場合もあるらしい。

そうしてヴィオラントは、扉の外まで見送って礼を言う弟の肩を
労るように叩き、小さな奥方の柔らかな手を、先ほどルリがしたよ
うに優しく握って去っていった。

その背中を今までにないほどの親しみと微笑ましさを感じながら
見送り、振り返って「ルリさん、またね」と微笑むスマレに深々と
頭を垂れながら、ルリはその時はたとあることに気づいた。

またしても、宰相閣下の執務室を去るタイミングを逃してしまっ
たのだ。

慌てて顔を上げたルリは、大公爵夫妻の後を追う形で部屋から出
ようとしたが、それよりも一歩早く、兄夫婦を見送り終わった宰相
閣下が、パタリと扉を閉めてしまった。

「……」

再び、ルリの表情は激しく強張った。

泣く子も黙る宰相閣下。

美しい笑顔で愚かな爺どもを扱下ろし、使えない人間は容赦なく切り捨てる鬼の宰相。

そして、数々の美女と浮き名を流しながらも、その誰にも心は与えない冷たい美貌。

そんな噂の宰相閣下と、思いがけず二人つきりになってしまったルリは、極度の緊張に襲われる。

引きつる喉から何とか声を絞り出して、暇の許しを得ようと口を開きかけたルリだったが、またしても相手に先を越されてしまった。

「――お茶にしましょうか」

「……は、え……？」

若い侍女が可哀想なほどがちがちに緊張しているのが分かったのか、クロヴィスは苦笑するように口元を緩めてそう言った。

それに、まともな返事も返せないルリに呆れるでもなく、彼は接客用のソファの脇に置いたワゴンへと歩いていく。

宰相閣下自ら、お茶の用意をしようというのだ。

それに気づき、ようやくはっと我に返ったルリは、慌ててワゴンへと駆け寄った。

「お待ち下さいっ！ お茶のご用意でしたら、わたくしが……！」

そう言い募るルリに対し、柔らかく瞳を細めたクロヴィスは「いえ」と返し、ポットに伸びた彼女の手を捕まえると、スマートな所作でソファへと導き座らせた。

「義母上の侍女であるあなたに、スマイルのお守りという余計な仕事を頼んでしまったのは私です。その礼をさせて下さい」

「クロヴィス様っ、ですが……」

「それでも、私のいれるお茶は美味いと、あの手厳しい義姉上のお墨付きなんですよ？」

「ですが、わたくしは……あの……あの……」

「使いの帰りの時間は定められていないと、先ほど言っていましたよね。急ぎの用ではなかったと。——それとも、私のお茶に付き合うのは嫌ですか？」

この宰相閣下に笑顔でそう言われて、断れる人間がいるというなら会ってみたいと、ルリは思った。

「い……いただきます……」

「よろしい」

背中に冷たい汗を感じながら返事をしたルリに、クロヴィスは満足げに頷くと、彼女の側で茶葉の箱を開いた。

そうして、思わず見蕩れるほどの手際の良さでお茶の用意を整えた彼は、ポットとカップに視線を落としたまま話を続けた。

「そういえば、あなたは焼き菓子を作るのが得意なのだそうですね？」

「……え？」

「義母上はもちろん、スマレがしきりに褒めていました。先日は“この絶品は食べなきゃ損”と言って、わざわざ私の口にまで放り込みにきましたよ。くるみの入ったマフィンでしたか。あれは確かにとても美味かった」

「あつ、ありがとうございますっ！」

宰相閣下が、お世辞を言うような方ではないことも、広く知れ渡っている。

一介の侍女ごときに胡麻をすって得することも当然何もないので、

それは本心からの褒め言葉だとルリは理解した。

緊張がなくなることはなかったが、ぱっと目の前が明るくなったように感じた。

嬉しくて嬉しくて、ついつい大きな声で礼を返してしまった。

そんな自分に恥じ入って、耳まで真っ赤にして俯いてしまったルリにクスクス笑うと、クロヴィスはちょうどいい塩梅になったお茶をポットからカップへと注ぎ、彼女の前にそっと置いてやった。

「あ、い、いただきます」

「どうぞ」

こぼして火傷をしないかと、見ている方が案じるほど緊張に震える侍女の手が、カップに伸びた。

そうして、きちんと教育を受けたと分かる上品な仕草で、それを口元に持っていく。

とたん、彼女の深い青色の瞳がぱちくりと瞬き、上品に弧を描いた口が「とてもおいしいです」と告げた。

そんな媚のない素直な様子に、クロヴィスの中でのルリへの好感度は増していく。

クロヴィスも、自分のいれた紅茶に口を付けつつ、ふと執務机の上に置き去りにされていたものを思い出した。

先ほど、スマレが庭で拾って半分置いていった、大振りの木の実だ。

「……クリって、言っていましたね」

「はい。スマレ様は、蒸しても焼いても美味しい木の実で、ご実家ではよくお召し上がりになられたと」

「……ふむ」

スマレが両手で掬ったそれらは、大人の男の掌ではたったのひと

掴みだ。

クロヴィスはそれを掌の上で転がしてまじまじと眺めていたが、突然懷から真っ白いハンカチを取り出したかと思うと、先ほどルリがスマイレに作ってやったように袋状にし、その中に栗を全て放り込んだ。

そして、それをルリの方にすいっと差し出して言った。

「ルリ、あなたにお願いがあります」

「あっ、はい。何でございましょう」

「この木の実で、菓子を作ってご馳走してください」

「……えっ!？」

ルリは、突然の申し出に戸惑った。

実は、料理人でもないルリが王宮で料理を作るというのは、かなり神経を使うものなのだ。

しかも、皇族の方々に振る舞うとなると、調理場の本職の人達にバレては何かと失礼と、いろいろ気を使う。一介の侍女が出しゃばっては、彼らも気分がよくないだろう。

それでも、敬愛する皇太后陛下に請われた時は、後宮の調理場を借りて作っていたのだったが、宰相付きの侍女ではない自分が彼のために菓子を作るなど、本当に許されることなのだろうか。

そう逡巡するルリの心を見透かしたクロヴィスは、穏やかな笑みを浮かべたまま続けた。

「もちろん、無理にとはいいませんよ。あなたも正規の仕事があるのですから、煩わせるつもりありません」

「……」

「けれど、できればお願いします」

「あの……」

「あなたに、作ってもらいたいです」

クロヴィスはそう言って、カップを持ったルリに手を添えてそれをソーサーに戻させる。

びくりと、可哀想なほどに震えた華奢な手に、カップのかわりに栗の入った包みをそつと握らせた。

受け取ってしまった以上、ルリにはもう断る術は残されていない。思わず半泣きになって声もでない侍女に対し、麗しい宰相閣下はにっこりと笑うと、とてもとても優しい声で告げた。

「その時は、また一緒にお茶を飲みましょうね」

「……」

「急ぎませんよ。でも、心待ちにしていますね——ルリ」

その後、何とか宰相執務室から脱出したルリは、その足で後宮の調理場に飛び込んだ。

彼女の尋常ならざる様子に心配した先輩侍女達に、混乱したままのルリが包み隠さず事情を話すと、彼女達もひどく驚いた。

——これは、一大事！

なんとたって、可愛い妹侍女が、冷厳と有名な宰相閣下の胃袋を掴んでしまったのだ。

侍女達が慌てて主たる皇太后陛下に相談に行くと、彼女は「あらあつ！」と嬉しそうに顔を輝かせた。

母は、いつまで経っても身を落ち着けない次男坊に、ついに春の兆しがやってきたのだと確信したのだ。

しかもその相手となる女性は、彼女が我が子のように慈しんで成長を見守ってきた秘蔵っ子。

この縁を逃してなるものかと、皇太后のやる気は俄然燃え上がった。

その炎は、彼女に仕えるルリの姉侍女達にも燃え移り、その日は

遅くまで、後宮の調理場は皇太后付きの侍女達によって占拠された。

そうして出来上がったのは、栗の入ったパウンドケーキ。

栗は一度茹でてから、姉侍女達に手伝われて四苦八苦して皮を剥き、内側についた渋い皮ごとシロップで甘く柔らかく煮た。それを、くるみを使う時のように食感が残るほどの大きさに砕き、あとは栗を煮詰めたシロップを加えていつものパウンドケーキを焼く要領。

ただし、大人の男性に振る舞うのだからと、甘さを抑える代わりにブランドーを少々加え、香りよい出来映えになった。

もちろん、誰よりも先に味見をしたのは、ルリの主人である皇太后陛下だ。

それを口にした皇太后は、「あなたは天才よっ！」と言ってルリを抱きしめ、直々に侍女頭に綺麗に切り分けてラッピングするよう命じると、翌日の午後のお茶の時間、ルリを宰相執務室へと追い立てた。

先触れは出しているので、遠慮なく扉をノックしなさいと言って送り出してくれた皇太后の言葉に、勇気を振り絞って扉を叩いたルリの訪問に、それはすぐに内側から開いた。

「いらっしやい。来て下さって嬉しいですよ、ルリ」

「お邪魔いたします、クロヴィス様」

ルリの緊張はまだ解れることはないが、出迎えたクロヴィスの穏やかな顔に、今日は何とか笑顔を返すことができた。

そうして、皇太后付きの一番若い侍女が、お菓子を持って宰相執務室に出入りすることが当たり前のこととなっていく。

彼女が、愛らしいレイスウェイク大公爵夫人を「お義姉さま」と呼ばされる日も、そう遠くない——かもしれない。

瑠璃とティータイム（前）

「ルリ、お茶の時間だけど……宰相執務室に行かなくていいの？」
「いいんです」

大国グラディアトリアの国母エリザベス皇太后陛下が住まう後宮では、ここ十日ほど、一番年若い侍女ルリと姉侍女達の間でこのような問答が繰り返されている。

レイスウェイク大公爵夫人が拾った庭の木の実をきっかけに、ルリがこの国の宰相クロヴィス・オル・リュネブルク公爵にお菓子を振る舞うようになったのは、今から半月ほど前のこと。

以来ルリは、ほぼ三日に一度の割合で、午後のお茶の時間に宰相執務室を訪れていた。

宰相クロヴィスは、ルリの深く敬愛する主人である皇太后陛下の義理の息子でもある。

冷厳な雰囲気からは想像もつかないが、彼は意外に甘いお菓子を好むようで、ルリが差し入れたケーキやクッキーをそれはそれは美味いそうに召し上がる。

そして、そのお礼と言っては、いつも彼女に手ずから紅茶を入れてくれるのだ。

先帝に肅清されて没落した侯爵家の庶子で、皇太后陛下に仕える数ある侍女の中でも一番下っ端なルリにとって、麗しき宰相閣下は雲の上のような方。

そんな彼と、たとえば半刻ほどの時間といえど、二人っきりで過ごすのは非常に緊張を強いられる。

ルリ自身口数が多い方ではないし、気の利いた話題を振れるほどの人生経験もまだない。

クロヴィスからお茶を受け取ると、決まって伏し目がちに黙り込んでしまうルリに対し、しかし彼は呆れることも失望することもなかった。

「ルリは、休日は何をして過ごしているのですか？」

「はい、あの……、と、図書館に行きます」

「図書館？ 城のですか？」

「はい。王城の図書館には、面白い本がたくさんあって、いくら読んでも読み切れません」

「おや。あなたは相当、本がお好きのようですね」

緊張に震える声で必死に答えるルリに対し、優雅に紅茶のカップに口をつけながら耳を傾けるクロヴィスの声は、どこまでも穏やかだ。

冷たく厳しく、大の男をも泣かせると有名な宰相閣下の噂とは、だいぶと違った印象を受ける。

（厳しいのは仕事に対してだけで、普段はとても優しく穏やかな方なんだわ）

そう心の中でこっそり認識を改めたルリに、「そうとも限らないよ……」と教えてくれる人は、今はまだいない。

少しずつクロヴィスへの畏怖と警戒を緩め始めたルリは、最近ではようやく彼の顔を見て会話ができるまでになっていた。ただし、時々視線が泳ぐのだけは致し方ない。

「クロヴィス様は、お休みの日は何をなさっているのですか？」
「ん？ 私ですか？」

社交に拙い自分に根気強く付き合ってくれる彼と、何とかスマー
トに会話をしたいと思いつつそう返したルリだったが、そこではた
とあることに気づいた。

いつも忙しくしている宰相閣下。

現在グラディアトリアは周辺諸国との関係も良好で、内政も非常
に落ち着いた状態であるが、若き皇帝陛下を支えるクロヴィスにか
かる政治的重圧というのは、ルリのような一介の侍女には想像もつ
かないほどのものだろう。

毎日朝早くから夜遅くまで執務室にこもっている彼に、休日など
あるのだろうか。

そう思うと、ルリは何だか胸がギュツと苦しくなった。

「わたくしのような者が申し上げるのは、とてもおこがましいこと
ですが……。お休みはきちんと取って下さいませね、クロヴィス様」
「ああ、心配して下さいいるのですか？」

「休日も返上して、執務室にこもっていらっしやると聞きました。
クロヴィス様のお忙しさは、わたくしのような一介の侍女には計り
知れませんが……」

「おや、私のことを噂して下さいたのですか？」

クロヴィスはそう言って首を傾げると、細いフレームの眼鏡の下
でふっと目を細めた。

一方、ついついいうわさ話などというはしたないこと暴露してしま
ったルリは、顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「しっ、失礼しましたっ……!!」

「いいえ、かまわないのですよ。むしろ、ルリが私のことを話題に
して下さったなんて、嬉しいですね」

「も、も、申し訳ありませんっ……!!」

「いいんですってば」

自分はなんてなんてはしたないんだろっ！——そう思って、真っ赤な顔で俯いて涙ぐむルリに、クロヴィスは苦笑をもらしつつ、ふむと顎に手を添えた。

「別に、休日返上して仕事をしているわけではないのですよ。ただ、私は元来仕事が好きなのと、あまりうまく休日を過ごす方法が思いつかないというか……」

「……」

普段は、いちいち遅い時間に帰るのが面倒だからと、王宮内に構えた私室で寝泊まりしているクロヴィスだが、休日には時々邸宅に帰る。

しかし、これといって趣味のない彼は、邸宅に戻ってもすることがない。

同腹の兄であるヴィオラントが、皇帝を退位した後は祖母方の実家であるレイスウェイク家を名乗ると言い出したので、母の実家であるリュネブルク公爵家はクロヴィスが継いだ。

幸い、先代公爵である祖父はまだまだ健在であるので、邸宅の方はほとんど彼に任せてしまっている。

祖父は穏やかで優しい人だが、競争心がなく政治事に関してもかたつきしなので、あまりクロヴィスとの間で話が弾むこともない。

とは言っても、彼は祖父のことは家族として愛しているし、邸宅に仕える使用人達のことにも大切に思っている。

当主であるクロヴィスが戻れば、邸宅の人々はそれはそれは彼を歓迎し、穏やかで満ち足りた時間を用意してくれる。しかし、それに浸かってほっこりしてしまうと、気持ちが緩んで仕事に戻った時の切り替えが難しいのではないかと、無意識の内に安らぎに対して構えてしまう。

そんな自分を、クロヴィスも自覚していた。

だからこそ、今日の前で萎縮してしまった慎ましい侍女が時々やってきて、一緒にお茶を楽しむそんなわずかな時間が、とても貴重で愛すべき瞬間に思えるのだ。

祖父と同じく、競争心や虚栄心の欠片もなく、穏やかで優しい侍女。

皇太后陛下に特別に目を掛けていただいているというのに少しも驕るところがなく、慎ましく大人しい少女。

割り切った女性としか関係を持たなかったクロヴィスにとっては、まだ子供っぽくて洗練されていないルリのような相手は対象外だったはずなのだ。

それなのに――

彼女がやってくるお茶の時間が待ち遠しく、そのことで義母である皇太后陛下にからかわれるのも苦にならない。

余裕のある風を装いながらも、大人しい彼女との会話を何とか成立させるために、必死に話題を探す自分も嫌いではなくなった。

クロヴィスは初めて、家族と仕事以外で大切な存在を見つけたのかもしれない。

「私は、休日を過ごすのが下手なんです。だから、仕事をしていると時間が潰せてほっとするんだと思います」

「……ですが、お仕事ばかりでは息が詰まってしまいませんか？ のんびり、何もしないでゆっくり過ごされる時間も、たまには必要ではありませんか？」

ルリは顔を真っ赤にして俯いたまま。

それでも小さく返す言葉には、クロヴィスを労る気持ちが溢れていた。

それは、彼の心をふわりと優しく包んで温め、心からの笑みを浮かばせた。

「そうですね。でも、一人で上手く過ごせる自信がないのです。誰かに隣に居てもらわないと、すぐに仕事のことばかり考えてしまいそうで」

「まあ……」

「ですから、ルリ。次の休みは――」

クロヴィスは紅茶のカップをソーサーに戻すと、流れるような仕草でそっとルリの手を取った。

まだ頬を赤らめた少女の、深い青い瞳が不思議そうに彼を見つめ返してきた。

兄ヴィオラントの愛妻スマレが、“綺麗な瑠璃色”と讃えた宝玉だ。

吸い込まれそうに美しいそれに目を奪われながら、クロヴィスは想いの続きを口にしかけた。

――しかし

「クロヴィス、この件についてだが……」

ガチャリ？？と、ノックもなしに宰相執務室の扉を開いた無礼者は、クロヴィスの弟ルドヴィーク。

長兄の跡を継いで玉座に就いた、グラディアトリアの若き皇帝陛下だ。

書類に視線を落しながら入ってきた彼は、ふと顔を上げて目の前の光景に固まった。

「……いらっしやいませ。？？とところで、扉を開く前にノックをす

るのは、最低限の礼儀ではないでしょうか？ 陛下」

ルドヴィークの視線の先では、応接用のソファにテーブルを挟んで向かい合わせに座った男女が、手と手を取り合って見つめ合っていたのだ。

男の方は、この宰相執務室の主である兄クロヴィス。

女の方は、ここ最近何度かこの部屋で見かけることのあった、生母エリザベス皇太后陛下付きの侍女である。

どう見ても、いい雰囲気になっていたところに乱入してしまったと気づいたルドヴィークは、すぐさま回れ右をして逃げ出したい気分だった。

しかし、彼がそれを行動に移すよりも早く、慌てて立ち上がった侍女が叫んだ。

「申し訳ありません！ ついつい長居をしてしまいましたっ！！」

「ルリ、待ちなさい」

「陛下、クロヴィス様、失礼いたします！」

顔を真っ赤にしたままぴよこんと頭を下げると、引き止めるクロヴィスの声も聞こえないのか、脱兎のごとく宰相執務室から逃げ出したのはルリだった。

「……」

「……」

ボタンッ！ と扉が勢いよく閉められ、密室になった宰相執務室に、とてつもなく重苦しい空気が流れた。

「……なんか、すごくごめん。クロヴィス」

「……」

この上なく申し訳なさそうな顔で謝る弟皇帝に、怒る気力もなくしたクロヴィスは、はあく……と深々とため息をついた。

そんなことがあった日から十日。

ルリは宰相執務室に赴いていない。

「どうしたの？ 何かあったの、ルリ？」

姉侍女達が心配するのも無理はない。

この十日の間、ルリには再三かの宰相閣下から招待の声がかかったというのに、彼女は体調不良を理由にそれら全てを断っていたのだ。

本来なら、一介の侍女が王族でもあるクロヴィスからの招待を断ることなど無礼にあたるのだが、ルリは彼の育ての母でもある皇太后陛下の侍女であるし、彼自身権力を振りかざして無理強いするつもりもないらしい。

忙しくて仕事から手が離せない彼は、今日もまた部下の文官にルリへの招待を託してきたが、彼女はつい先ほど丁寧になんて断ったところだった。

そんな様子をおろおろして見守っていた姉侍女達は、もしやと一つの懸念に思い至った。

「ルリ、あなた……もしかして、宰相閣下付きの侍女に、何か言われたんじゃないの？」

「……」

クロヴィス自身は他人に細々と世話を焼かれるのを嫌うので、個人的な侍女というのはつけていないが、宰相執務室として抱えている侍女はいる。

彼女達はたいてい、仕事の話でやってきた他の大臣や客人をもてなす用意や、部屋の中の整理整頓を請け負っているのだが、やはり大国の宰相に仕える侍女ともなれば、才色兼備のエリート揃い。

当然家柄もよくプライドも半端ないだろうと思われる彼女達にとって、突然目の前をちよろちよろし出したよそ者侍女など、うっとうしいに違いない。

そう思ってしまった姉侍女の言葉に、ルリはびくりと身体を強張らせた。

「——えっ、そうなのっ!？」

そんなルリに、突然後ろから掛かったのは、澄んだ高い声。

慌てて振り向くと、先日ルリと宰相閣下の縁を取り持ったレイスウェイク大公爵夫人が、大きなアメジストのような瞳をうるうるさせてこちらを見上げたいた。

「ルリさん、いじわるされたの？」

「いえ、あの……」

「トウシューズに画鋏入れられた？ ドレスをハサミでチョキチョキされた？ 箱入りのネズミやゴキブリ送りつけられたっ？」

「ス、スマイレ様？」

「ひどいひどいっ！ ちょっと行って、とっちめてくるっ！」

ルリがあわあわするほどぶんすかと憤ったスマイレが、その勢いそのまま部屋を飛び出して行こうとするのを、やはりいうか、当然止めた人物がいた。

「待ちなさい、スマレ」

「……大公閣下」

「すまないな。ここに来る前に、“ヒルドラ”なるものを観てきたので影響されたいらしい」

「はあ……」

スマレを軽々と抱き上げて止めたのは、彼女の夫であり先の皇帝ヴィオラント・オル・レイスウエイク大公爵。宰相クロヴィスの同腹の兄である。

彼の言う通り、実家であるニホンと通じている邸宅の自室で、兄嫁と一緒にお昼のワイドショーからドロドロの嫉妬渦巻く昼のドラマを鑑賞してきたらしいスマレは、ベタな嫌がらせを勝手に想像して怒りに震えた。

「だって、だって、ヴィー。こんな大人しそうな女子いじめるなんて、許せない。背中にカエルを入れてやるっ！」

「少し、待ちなさい。——ルリ、本当に、宰相付きの侍女がそなたに嫌がらせをしたのか？」

「い、いいえ……」

「では、何があってあの部屋から足が遠のいたのか、理由を教えてくださいませんか」

ぶんぶんする妻も可愛くてならないらしいヴィオラントは、腕に捕まえた彼女を宥めるようにキスを落としながら、そうルリに向かって穏やかな声で言った。

先に宰相執務室に寄ってきたらしい大公爵夫妻は、弟クロヴィスの様子は何やら思うところがあつたのだろう。

恐れ多くも先帝陛下からの問いかけに、ルリは言葉に詰まった。

さらには、彼の腕に抱え込まれた愛らしい大公爵夫人と、その場にいた姉侍女全員の視線が、ぐっとルリに迫る。

握りしめた掌に汗を滲ませ、困ったようにルリが視線を下げた瞬間――また新たな場所から声がかかった。

「それは、私も知りたいですね」

カツリ??と音を響かせて、後宮の調理場に足を踏み入れたのは、今まさに話題となっていた宰相執務室の主。

「……クロヴィス様……」

いつになく硬い顔をした宰相クロヴィス・オル・リュネブルク公爵は、カツカツと鋭い靴音を響かせてルリに近づくと、俯く彼女の正面に立った。

瑠璃とティータイム（後）

「ルリ」

「……」

床を見つめるルリの視線に、クロヴィスのよく磨かれた黒い靴の先端がうつる。

頭の上から降ってきた彼女を呼ぶ声は、いつもよりもどこか冷たく強張って聞こえた。

顔を上げるのが恐ろしく、ルリはぎゅっと唇を噛んだまま身体を縮こませる。

そんな彼女を庇うように、横から口を挟んだのはスマレだった。

「クロちゃんが女関係ちゃんとしなから、ルリさんがいじめられたんじゃないの？ 胸に手を当てて、よく思い出してみなっ」

「はあ、まあ、確かに。褒められるような付き合い方をしてきたかと聞かれれば、何とも答え辛いですが……少なくとも、後々悔恨が残るような別れ方はしていませんよ。執務室付きの侍女とは、絶対にそういう関係にならないようにしていますし、公私混同するような馬鹿を雇った気もないんですがね」

「クロちゃんにその気がなくても、侍女さんはクロちゃんにお熱だったかもしれないじゃない？ 女は怖いんだよ！」

くどいようだが、スマレは現在昼ドラの多大な影響を受けている。そんな彼女の言葉を聞いて、縮こまったルリの前に仁王立ちしたまま、クロヴィスは「ふむ」と顎に手をやった。

「嫉妬をして、年下の侍女に嫌がらせをするようなつまらない者なら、うちの執務室にはいません。本当にそんなことがあったのなら、その者を割り出して排除せねばなりません」

「……」

「でもね、あなたは理不尽な悪意を向けられたくらいで、へこたれたり引きこもりたりするような意気地なしじゃない。——そうでしょう、ルリ」

「……クロヴィス様」

そう言ったクロヴィスの声は穏やかで、ルリは思わず顔を上げて彼を見た。

ルリを真っ直ぐに見下ろす碧眼に責める色はなく、少しほつとする。

「あなたはその生い立ちゆえに、昔から心ない言葉ややかみにさらされてきたでしょう。それでも、いじけることも潰されることもなく、まっすぐに前を向いて歩いてきたではありませんか」

クロヴィスの言葉に、ルリはドキリとした。

先帝によって罪人として処刑された侯爵の庶子であるルリは、母とともに皇太后陛下に救われ後宮に住まう事を許されたが、やはり当時はそれを最辱であるとやっかむ輩も、父侯爵の罪を持ち出し糾弾したがる者たちもいた。

“ 罪人の子 ”

“ 没落貴族の妾 ”

様々な陰口が、皇太后陛下の目を盗んで母子に降り掛かった。母はぎゅっと唇を噛んでそれに耐え、必死でルリの耳を塞ごうと

したが、物心ついた娘には自分の置かれた立場がよく分かっていて。辛くなかったといえ、嘘になる。

けれど――

「だって、ルリさんが何か悪いことしたんじゃないもん。堂々としてなくちゃだよ。子供の罪は親にも責任があるかもだけど、親の罪は子供に何にも責任を押し付けちゃ駄目なんだよっ！」

「スマレ様っ……」

「もちろん子供も、親に罪を被らせないように、しっかりしなきゃいけないけどね」

――お父上の罪は、あなたの罪ではないのよ。堂々としてらっしゃい

かつて、噂を耳にしたらしい皇太后陛下がルリに言ってくれた言葉を、今度は鈴が鳴るような可愛らしい声が再び紡いだ。

ルリの生い立ちについて、スマレは夫であるヴィオラントから聞いたのだろう。

いつの間にかその夫の腕から抜け出していたスマレは、横からぎゅっとルリにしがみつくように抱きついて来た。

思わぬ温かな感触に、ルリはついつい頬を綻ばせ、対するクロヴイスは器用に片眉を上げた。

「そう、その通りです。己の生い立ちを恥じることも悔やむことも必要ない。ちゃんとそれを理解していたルリは、けして奴らの悪意に屈しなかった。だからこそ、今回ももしも私に関わる何者かが彼女をやっかんだとしても、それだけで私を見限るようなことはないと思っていました」

「みっ、見限るだなんてっ……!!」

「では、何故です。お茶の時間に呼んでも来て下さらない。仕事が

終わった時間に訪ねれば居留守を使う。何か、あなたの気に触るようなことがありましたか？」

「いえ……あの……そんな……」

次々と畳み掛けるクロヴィスの気迫に押されまくって、ルリはたじたじとして言葉も出ない。

そんな二人を見比べて、ルリに貼り付いていたスマレが再び口を挟んだ。

「ちょっと落ち着きなよ、クロちゃん。鼻息荒いよ、興奮し過ぎだよ。あと、そんな高い位置から見下ろされて詰め寄られたら、ルリさんの繊細な心臓によくないから、しゃがみなよ」

「……これで、いいですか」

「うわっ、ホントにしゃがんだ。素直なクロちゃんとか、気持ちわるう……」

「うるさいですよ、義姉上様。私もいろいろと必死なのですから、温かく見守ってくださいよ」

スマレに言われた通り長身を折ってしゃがみ込み、その場に片膝をついたクロヴィスの懇願に、彼の兄が応えた。

ヴィオラントは背後から手を伸ばし、ルリに貼り付いていた妻を抱き上げる。

スマレもクロヴィスとルリの仲を邪魔するつもりはないので、「よし、ガンバレ」と一言エールを送ると、夫の腕に身を任せた。

クロヴィスは戸惑うルリの両手を取ると、びくりと震えたそれを握りしめた。

「何故、私のところに来て下さらなくなったのですか？ それを聞かない限り、今日はこの手を離しません」

「あの……」

「正直に言って下さって結構です。私と、お茶をするのが嫌になったというのならば……」

「ちっ、違いますっ！ 嫌なんかじゃないですっ！！」

伏し目がちにそう言ったクロヴィスを見下ろす形になったルリは、自分の手を握りしめた彼の手が震えているような気がして、思わず大きな声で叫んでいた。

すると、わずかに赤味を帯びたルリのそれよりもずっと怜悧な青い瞳が、「では何故？」というふうに見上げてきた。

ルリはぐつと言葉に詰まりながらも、やはりどうしても理由を話さないわけにはいかなかった。

「あの……まず、クロヴィス様とのご縁で、誰かに嫌がらせを受けたというようなことはありません」

「それは、本当ですか」

「はい、本当です。あと……クロヴィス様とご一緒するのが嫌になったなんてことも、絶対にありません。とても、楽しい時間を過ごさせていただいております」

「そうですか」

「はい……」

クロヴィスとの時間を楽しいとルリが言ったとたん、彼が本当に嬉しそうに瞳を細めて笑ったので、ルリは胸がドキリとした。

二人の後ろで、何だかルリにつられたように頬を赤らめたスマレも、自分を抱くヴィオラントにしがみついてドキドキしている。

嫌がらせを受けたわけでも、クロヴィスと会うのが嫌になったわけでもない。

それでは何故、宰相執務室への出入りを一方的にやめてしまったのか。

そう、もう一度問われたルリは、言い辛そうな様子で口を開いた。

「先日……最後にお邪魔した日ですが、私……慌ててお暇しましたでしょう？」

「ええ、ルドヴィークに邪魔されたのでしたよね」

宰相と侍女がせっかくないい雰囲気になっていたというのに、ノックを忘れた皇帝陛下が打ち壊した。

「扉から飛び出したら、そこに宰相室付きの侍女の方がいらっしやうて……」

「確かに、あなたと入れ替わりに侍女が入ってきて、陛下にお茶をいれてくれましたが……彼女が何か？」

「あの……泣いて、いらっしやうたんです……」

「え……？」

扉を飛び出したルリは、その前にいた侍女に気づかずに打ち当たってしまった。

慌てて頭を下げるルリに対し、彼女は「いいのよ、でも気をつけてね」と優しい声で言ってくれた。

けれど、ルリが顔を上げた瞬間、彼女の長い睫毛の上に見つけてしまったのは、涙の痕跡。

ルリがそれを確かめる前に、彼女は顔を背けて扉の向こうに消えて行ってしまった。

「わたし……ずっと思ってたんです。クロヴィス様の侍女でもない自分が、午後のお茶の時間に出しゃばってきて、本来お仕事をなさる侍女の方々に嫌な思いをさせてしまっているのではないかと……」

「そんなこと……」

「……クロヴィス様とご一緒できるのが楽しくて、ずっと気づかないふりをしていたんです」

「……ルリ」

「でも、あの方の涙を見てしまって、自分の立場を思い出しました。わたしは、皇太后陛下エリザベス様の侍女です。就業時間中に他の方の元にお邪魔してお茶をいただくなど、陛下のお許しがあるとはいえ職務怠慢でした。これからは、身分を弁えて行動します」

「ルリ……」

硬い表情でそう宣言したルリに、クロヴィスは困ったような声を上げた。

そんな男に気づかないまま、彼女は「あ、ですが」と続ける。

「お菓子は、失礼でなければまた作らせて下さい。クロヴィス様に食べていただけると、嬉しいんです」

「……」

そう言って、にこりと笑ったルリを、その前に跪いていた男は感極まったように抱きしめた。

「クっ、クロヴィス様っ……!?!」

「クロちゃん、早まっちゃダメよっ。何ごとも、順序よ順序っ!」

抱きしめられたルリは顔を真っ赤にしてわたわたと慌て、一方背後でそれを目の当たりにしたスミレは、自分はヴィオラントと順序も何もかもすっ飛ばし、会った翌日にベッドインしたことを棚に上げて叫んだ。

「……分かりました。あなたに気を使わせないよう、お茶の時間の度に頻繁に呼びつけるのは控えます。ですが、私のためにお菓子は作ってくれるんですね?」

「は、はい」

「では、もう一つ。あなたにお願いがあります」
「……何でございましょう？」

いつか交わしたのと同じような会話だと思いつつ、クロヴィスに抱きしめられてドギマギしたまま答えたルリに、彼はにっこりと優しい笑みを浮かべて言った。

「ルリの、次の休みを私にください」

「……えっ？」

「あなたと同じ日に、私も一日休みを取ります。一緒に過ごしましょう」

「ええっ……!？」

「この前言ったでしょう？ 私は休日を過ごすのが下手なのです。時間を持て余すと、すぐに仕事のことを考えてしまう。きっちり休めるように、あなたが側で見張って下さい」

「……」

「嫌とは言いませんよね——ルリ？」

跪いてルリを抱きしめていたはずのクロヴィスはいつの間にか立ち上がり、両腕ですっぽりと彼女を包み込んだまま、そっとその耳元に囁いた。

こんな状態で、否と言える人間がいるなら会ってみたいと、恥ずかしさと緊張で半泣きのルリは心の中で叫ぶ。

「ヴィーさん。弟君の口説き文句について、一言どうぞ」

「強引すぎるのは如何かと思うが、よく頑張ったのではないかと」

一步後ろで仲良く寄り添って、彼らを見守っていたレイスウェイク大公爵夫妻はそう言葉を交わし、ルリの姉侍女達は麗しい宰相閣下と少女の恋物語に、乙女のように胸をときめかせていた。

「まあまあ、あなた達。こんなところに集まって、いったい何の騒ぎですか？」

そうして、柔らかい声とともに現れたのは、この後宮の主である皇太后陛下エリザベス・フィア・グラディアトリア。

今さらだが、一同が集まっていたのは、その後宮の一角にある調理場だったのだ。

そんな場所で、自分に仕える一番年若い侍女を抱き締めている次男坊を見つけた皇太后は、「まっ」と頬を両手で覆った。

「まあ、クロヴィス。こんな陽の高い内から、なあに？ その子はわたくしの可愛い侍女ですよ。その子に関する事は、親代わりのわたくしを介してからにしてちょうだいな」

「これは、申し訳ありません、義母上。実は今、次の彼女の休みに二人で過ごすことを約束したところなのです。お許しただけですか？」

「クっ、クロヴィス様っ……！」

にこりと爽やかな笑みを浮かべ、義母たる皇太后陛下にそう請うたクロヴィスに、本当は二人の仲を全力で応援しているエリザベスは心の中でニヤリと笑った。

「まあ、よろしくってよ。ですが、ルリを泣かせるようなことがないよう、しっかりエスコートなさいませ」

「もちろんですとも」

そうして、ルリの次の休日は、完璧に宰相閣下によって押さえられたのであった。

???後日、件の宰相執務室付きの侍女の涙について、詳細が判明した。

彼女はルリが心配したように、よそ者侍女の台頭を憂いていたわけではなかった。

「え……ご主人の浮気、ですか？」

「そうです。既婚者の彼女の名が出て不思議に思ったのですが、本人に確かめて真相が分かりました」

「き、聞いたのですか？ 直接？」

「ルリがあなたの涙を見たらしく、とても心配していましたと告げれば、ひどく恐縮して訳を話してくれましたよ」

ルリが涙を見た女性とは、宰相執務室付きの侍女の中でも一番の古株だった。

国政の中枢たる宰相の侍女ともなれば、その役目はただのお茶汲みには留まらず、秘書的な仕事も請け負っている。

件の侍女は生家の家格が低く、元々は他の者の侍女として仕えていたが、その手腕を買われて宰相室に引き抜かれた経歴の持ち主である。

クロヴィスに仕え始めた頃には既に結婚していたが、妻の突然の大出世を妬んだ夫とは段々そりが合わなくなり、つい先日はその夫の浮気が判明して、侍女は心を痛めていたのだという。

情緒不安定になっていて、ついつい誰もいないと思って涙を堪え切れなくなった時、たまたま扉を開けて飛び出してきたルリに目撃されてしまったのだ。

「今さら旦那に未練はないというので、とれる分だけがつぽり慰謝料をとれるように、上手く手配してやりましたよ」

「……そ、そうですか」

「彼女もようやくすっきりしたようで、今後ますます仕事に励んでくれるそうです。頼もしいですね」

「……」

ルリはかの侍女の元夫に、少しだけ申し訳ない気持ちになった。

「ところで、ルリ」

「はい」

「休みはどうでしょうかね？」

「あの……えっと……」

先日の宣言通り、三日に一度だったお茶の時間の呼び出しが、五日に一度になった宰相執務室に、ルリはこの日リンゴのパイを持参でお邪魔していた。

甘酸っぱいリングと、ほんのりスパイシーなシナモンが絶妙の逸品は、今日も泣く子も黙る宰相閣下を綻ばせる。

ルリに合わせてクロヴィスが捻り取った休日、もう二日後に迫っていた。

優秀な副官をはじめ、文官の部下一同はもちろんのこと、先日二人の仲を邪魔してしまったことを悔やんでいた皇帝陛下ルドヴィークも、彼らの休日に異議を唱えるはずもない。

また、はいつと元気な声を上げて挙手をし、「デバガメしたいと思えますっ!」と、堂々と宣言したスマレは、その夫であるヴィオラントが何とか説得して抑えてくれるだろう。

ルリの主人であり、身寄りのない彼女の親代わりを自負する皇太后陛下エリザベスは、王族であり公爵でもあるクロヴィスと並んで歩いてルリが肩身の狭い思いをしないようにと、既に何着も外出着

を用意してやったそうだ。

姉侍女達も、随分と前から我が事のようにそわそわしてる。

そんな周囲の異様な盛り上がり、正直まだついていけないルリの困惑を深めるように、上機嫌の宰相閣下は笑顔でさらにとんでもないことを言い出した。

「そうだ。我が家に来ますか」

「……えっ……」

「義母上に、二日お休みをいただけるように頼んで差し上げますから、泊まっていかれては？」

「ええっ……？」

クロヴィスが言う我が家とは、グラディアトリアの四公爵家の一つ、リュネブルク公爵家のことである。

当然、没落した侯爵家の庶子であるルリにとっては、気軽に邪魔しますと言えりような場所ではない。

しかし、あわあわと焦ってカップを取り落としそうになったルリの手を、さっと支えるように掌で包み込んだクロヴィスは、有無を言わさぬ笑顔で告げた。

「そうしましょう」

「……」

ルリが彼に「否」と答えられる日が、果たしてやってくるのだろうか。

それは、ルリ本人にも分からなかった。

瑠璃と算段

「クロちゃんはね、まずは乙女心とは何たるかから、勉強しないといけないと思うのよ」

「……はい、まあ。勉強は嫌いじゃないですが？」

今日も今日とて、グラディアトリアの宰相クロヴィス・オル・リユネブルクの執務机の上には、処理を待つ書類の山がいくつも出来上がっていた。

いや、失礼——処理の済んだ、書類の山だ。

非常に優秀な宰相閣下は、着々とその日のノルマをこなしていた。そんな処理済みの書類が積まれた机の上を、どんっ！と、ちっちゃな可愛い拳で叩いてクロヴィスを真正面から睨みつけるのは、彼の兄嫁スマレである。

泣く子も黙ると恐れられる冷徹な宰相閣下と、皇太后陛下付きの一番年若い侍女との仲を取り持った、まさに恋のキューピットともいえる少女は、この日も宰相執務室の扉を蹴破る勢いで入ってきたかと思うと、第一声が冒頭のセリフだった。

「クロちゃんってば、ルリさんをいきなり自宅デートに誘ったんだって？」

「……おや、それはルリ以外はほんの一部の者しか知らないはずですが、いったい誰がその話をレイスウェイク邸のあなたの耳に届けたのでしょうか？」

“壁に耳あり障子に目あり”という、ニホンのありがたいことわ

ざを、君に教えてあげよう」

「なるほど。内緒話というのはもれやすいものだ、注意を呼びかける言葉ですね」

「だいたいあってる」

実際に今回スマレの情報源となったのは、クロヴィスの祖父だった。

クロヴィスとヴィオラントの生母マジエンタの父親で、前リュネブルク公爵アルヴィース・ティル・リュネブルク。

彼の跡を継いだ孫のクロヴィスが、なんと突然次の休みに屋敷に女性を招待すると言い出した。

滅多に屋敷に帰らないクロヴィスは、実質屋敷を任せきっている祖父にはルリのことを打ち明け、きちんと筋を通しておくつもりだったのだろう。

それだけでも、如何に彼がルリに対して誠実であろうと努めているかがよく分かる。

当主が今までもそれなりに異性との交遊を楽しんでいたことは把握しているが、女性を屋敷に招待したいと言い出したのは初めてだったので、リュネブルク公爵家それはそれは騒然となった。

若い女性の客を迎えたことのないアルヴィースは、いったいどう持て成せばいいのかと頭を悩ませ、結局客人の女性と年の近いスマレに助けを求めてきたのだ。

「アルおじーちゃまってば、ほんと可愛い。何を聞くのかと思ったら、“女の子はいったい何を食べるのかね？”って」

「ああ……おじいさま……」

その時の光景が目には浮かぶようで、クロヴィスは思わず片手で顔を覆った。

スマレが「おじーちゃまとおんなじものを食べるよ」と答えると、

アルヴィースは冗談抜きで驚きをあらわにし、真顔で「それなのに、どうしてスミレはそんなに小さいんだい？」と聞いてきた。

さらにその後一緒に食事をして、スミレが骨付き肉に豪快に齧り付いた姿を見た時には、“そんなものを食べて大丈夫なのか”、“お腹を壊すのではないのか”、“ちゃんと消化できるのかと”、いちいち心配したものだ。

「本気で、女の子は野菜とフルーツとケーキでできてると思ったのね。夢見過ぎだよ。今はご隠居のおじーちゃんだから天然でも可愛いけど、あの調子で公爵とかいろいろと無理があったのよく分かる」

政治になどまったく興味のないスミレでもそう思ったように、大國グラディアトリアの四公爵家の一つであるリュネブルク公爵家は、アルヴィースの代で一度廃れかけた。

結局、一人娘のマジェンタを当時の皇帝フリードリヒに嫁がせ、その第一子ヴィオラントが玉座を継いだことで地位を保ったようなものだ。

その後、成人を済ませたクロヴィスに公爵の位を譲り、ようやく馴染めない政治の世界から脱出できたアルヴィースは、屋敷に引きこもって悠々自適の隠居生活を楽しんでいる。

「ヴィーやクロちゃんと血の繋がりがあるなんて信じられないくらい、ピュアなんだもん」

「それは暗に、我々に純粋さの欠片もないと言いたいのだな、スミレ」

「だいたいそんな感じ」

大國を御そうという者は、往々にして純粋でばかりはいられないということだ。

「なるほど、おじいさまから事情を聞いたことは分かりました。それで、ルリを心配して私に何ごとか忠告しに来たわけですか」

「違うよ。クロちゃんが心配だから来たんじゃない！　ねえ、ヴィー？」

「そうだな」

そう仲良く頷き合う兄夫婦に対し、クロヴィスは「はて？」と首を傾げた。

「でも普通、こういう場合は女性の方を心配するんじゃないんですか？」

「ルリさんには、皇太后様や侍女のおねーさん達がいっぱいいるから任せといたらいいし。でも、クロちゃんはさあ、私たちにとっては弟でしょ？　可愛くないけど」

「一言多いですよ」

「だって、百年に一度あるかないかっていうクロちゃんの春だよ？

もしもヘタこいて失敗しちゃったとか思うと、めちゃくちゃ心配じゃないっ！　ねえ、ヴィー？」

「そうだな。この度の相手は、クロヴィスの今までの相手とはだいぶ毛色が違うようだから、対応を誤れば取り返しのつかないことになるやもしれん。ここは一つ、彼女と年の近いスマレの意見を参考にした方がいいのではないか？」

「もう……兄上まで……」

クロヴィスは困ったようにため息をつきつつ、兄とその妻にお茶を入れるべくようやく椅子から腰を上げた。

二人にソファを勧め、彼らが座ったのを見届け背中を向けたクロヴィスに、いつもより少しだけ硬い少女の声がかかった。

「クロちゃんさあ、あわよくば今回のおデートで、ルリさんをものにしちゃおうとか思ってるでしょ」

それに対し、クロヴィスは手元は茶葉を扱いながら、笑みを浮かべた顔だけ振り向かせて答えた。

「ふふふ、お言葉ですが、ルリは既に私のものです。この私が、目を付けた相手を今さら誰かに譲ってやると思いますか？」

「思わない。クロちゃんに見初められた時点でもうルリさんにはご愁傷様としか言いようがないけど、今言いたいのはそういう事ではなくて……」

「ふむ、ではどういうこと？ はっきりとおっしゃい」

そんなクロヴィスの言葉にむっと口を尖らせたスマレは、隣に座ったヴィオラントにぎゅっとしがみつき、わざとらしく泣きまねをして彼に言いつけた。

「ヴィー、クロちゃんが私にヒワイなことを言わそうとするー」

「それはいけない」

相変わらず表情のない美貌を、けれどスマレにだけは柔らかく緩めて、ヴィオラントは彼女の髪をよしよしと撫でながら、クロヴィスに向かって口を開いた。

「これこそ、スマレがそなたに“乙女心の何たるかを勉強しろ”という理由だぞ、クロヴィス。乙女心というのは我々男には到底理解できぬほど複雑で、鋼のように見えて繊細なのだ」

「はあ、面倒くさいですね」

「だが、愛しい娘相手となれば、その面倒さえ愛おしいのだ。そなたに、それを受け止めるだけの器と覚悟はあるのか？」

「……」

ヴィオラントにそう言われ、クロヴィスは一瞬口を噤んだ。

自分も、そして兄ヴィオラントも、これまで女性に対して深い想いなど抱いたことがなかったように思う。

兄は皇帝という立場上、その権力と美貌にたかる女達に多くを望みはしなかったし、許しもしなかった。

同じく、皇族であり宰相という皇帝に次ぐ地位に就いたクロヴィスも然り。

けれど??兄は、スマレという存在を見つけて変わった。

彼女を全力で愛し、彼女のためには如何なる面倒ごとをも厭わず、その凝り固まっていたはずの無表情さえ動かして見せた。

兄にとってのスマレが唯一無二の存在であることは、クロヴィスから見ても疑いようもない。

では、自分にとってのルリが、兄にとってのスマレに匹敵するのかと問われれば、すぐには答えることはできない。

何故なら、クロヴィスにとっても、何もかもが初めてのことなのだ。

リュネブルク公爵として、彼女が己の相手にふさわしいかと問われれば、否と答えるだろう。

廃された侯爵家の庶子であり、今はただの侍女でしかないルリを迎えたところで、リュネブルク家を得るものは何もない。

あるいは、結婚を前提としない付き合いであるとしても、まだ少女ともいえる年齢の人生経験の浅い彼女との戯れに、クロヴィスが面白みを感じることはまあ無いだろう。

——それでも

「……受け止めてみせますよ。面倒などと思うなら、はじめから彼女に拘ったりしなかったでしょうしね」

そう答えたクロヴィスに、ヴィオラントは少しだけ厳しい目をし
て、さらに問うた。

「今までの、後腐れのない女達とはわけが違うぞ。屋敷に泊めて、
公爵の手付きと知れ渡ることになるルリの今後を、そなたは責任を
持って守れると言えるのか？」

「もちろんです。そうでなくば、屋敷に招待したりしません」

それに対し、クロヴィスがきっぱりと即座に答えると、ヴィオラ
ントは幾らかほっとしたように眦を緩め「そうか、ならばよい」と
穏やかに告げた。

「しかし、この年になって、女絡みで兄上に心配されることになる
とは思いませんでした……」

「許せ。幾つになろうと、そなたは私の弟に変わらない。余計な世
話と知りつつも、心配してしまうのはどうにもならん」

「はあ、まあ、嫌じゃないんです。ちよつと……照れくさいだけで」

「そうか」

「はい」

そんな兄弟のやりとりを、スマレは黙って夫の脇にペタリとくっ
付いて見守っていた。

ヴィオラントは、そんな彼女の肩を抱くようにして撫で言う。

「スマレも、これでいいな？」

「うん」

こくりと頷いたスマレからは、ヴィオラントに対する全面の信頼
がうかがえる。

ものの例えではなく、文字通り本当に生きる世界を越えて嫁いだ彼女には、今まで常人には計り知れないほどの戸惑いや不安があったのだろうが、それを全て受け止め包み込んで笑顔に変えたのはヴィオラントであろう。

クロヴィスは、そんな兄夫婦の仲睦まじい様子を穏やかな気持ちで眺めながら、では自分には何ができるだろうと考えた。

ルリとの関係は、まだ始まったばかりだ。

いや、よくよく思い返してみれば、クロヴィスは彼女に対する自分の想いを、言葉としてはまだ一言も告げてはいなかった。

それどころか、自分でもどうしてルリにこんなに拘ってしまうのか、正直なところ不思議で仕方がない。

皇太后陛下の侍女であり、先帝に肅清された一族の娘として、ルリという存在は以前から把握していた。

今から十二年前？？クロヴィスが師事していた当時の宰相シュタィアー公爵は皇太后エリザベスの実兄であり、彼がルリ達母子を側に召し抱えると告げた妹に反対したことを憶えている。

彼女達は、当時の皇帝ヴィオラントをはじめ、皇族に恨みや敵意を抱く可能性のある不穏分子として、警戒されても仕方のない身の上であった。

結局、皇太后陛下の必死の嘆願にシュタィアー公爵は折れ、めでたく後宮に居場所を与えられた母娘はその恩を忘れず、どれほど陰口を叩かれようと自暴自棄になることもなく、懸命に主に仕えた。皇太后とは血の繋がりがこそないものの、実の子と変わらぬ愛情を注いでもらえたと自覚しているクロヴィスにとって、彼女は紛れもなく大切な母である。

その母が面倒を見ている一番年若い侍女であり、また複雑な境遇にもめげずにいきいきと生きるルリには好感が持てた。

しかし、ただそれだけの存在だったはずのルリが、あの日たまたま王宮の庭でスマイレに出くわし、執務室の窓から顔を出したクロヴィスの目に映った。

そんな思わぬ偶然が二人を近い距離で引き合わせ、いつのまにかクロヴィスの中でルリは特別な存在へと押し上がって行ったのだ。けれど肝心のルリの方が、彼のことをどう思っているのか――自分の想いさえ伝えていないクロヴィスには知る由もない。

つまり、クロヴィスとルリの関係は、まだ何も始まってさえいないのだ。

そう思い至ったクロヴィスは、ふっとため息をついて「まいりましたね」と呟いた。

「どうしたの、クロちゃん？」

「はい。実を言うと、今までどなたかと真剣にお付き合いをしたことがないので、まず最初になんと言って告白すべきか分からないのですが」

「何を今さらっ！ 告白もなしに、いきなりルリさんを家に誘ったの？」

「順序を間違えましたでしたが、頷かせてしまえばこっちのものかと思って。けれどせっかくなので、参考までに教えていただきたいのですが、兄上は何と言ってスマレを口説いたのですか？」

おそらく兄ヴィオラントも、スマレに会うまで誰かを口説くなどという経験はなかっただろう。

美しく尊い彼には、黙っていても女の方から寄って来て、全てを差し出してきたのだから。

今のクロヴィスと同じように、初めての感情に突き動かされた兄は、いったい何と言ってこの不思議な少女の心を手に入れたのだろうか。非常に興味深いところであった。

ところが……

「……」

「……」

クロヴィスの言葉を聞いたヴィオラントとスマレは、「えっ？」と言葉に詰まったかと思うと、互いに顔を見合わせてしまった。

——そして

「ないよね、そんなの」

「そういえば、そうだな」

彼らはお揃いの紫の瞳を瞬いて、なんでもないことのようにそうのたまった。

「しいていうなら、シュタイアー公爵の前で結婚しようと言ったことが、最初の告白になるのだろうか」

「えー……それは、つまり。がつり身体の関係も済んだ後ってことじゃないですか。しかも、まず口にしたのが“結婚”って……いきなり飛躍しすぎじゃありません？ 誰ですか、私に順序を大切にしろとか説教を垂れたのは。ねえ、義姉上さま？」

「臨機応変っていう素敵な言葉も教えておいてあげるよ」

「都合のいい言葉ですね。もう……まったく参考にならないじゃないですか」

クロヴィスはそう言って、呆れたようにため息をついた。

瑠璃とケーキ1

「ルリ、そろそろ焼けそうよ」

「あ、はい。ありがとうございます」

自室にこもっていたルリにそう声をかけてくれたのは、後宮の調理場に入入りする侍女の一人だ。

未成年の見習いの者を除けば、皇太后付きの侍女ではルリが一番年下で、他の侍女達は全員先輩にあたる。

朝早く起き出したルリはこの日、特別に調理場のオーブンを一つ借り切ることを許された。

そうして作っていたのは、手みやげにするためのケーキである。焼き上がりまでの時間に、彼女はもう一度自分の荷物をまとめ直していたのだった。

ルリはまだ、本当は自分は夢でも見ているのではないかと思っている。

そうやってついつい現実逃避をしてしまいたくなるほど、ここ数週間でルリの生活はめまぐるしく変化した。

あの日――街への使いの帰り道、たまたま近道を思い立ったことで、彼女の運命の歯車は突然大きく回り始めたのだ。

――クロヴィス・オル・リュネブルク。

大国グラディアトリア宰相にして、四公爵の一人。

現皇帝ルドヴィークの兄であり、前皇帝ヴィオラントの弟。

そして、ルリが最も敬愛する主人、エリザベス皇太后陛下にとっても、血の繋がらない息子の一人。

そんな、ルリにとってはまさに雲の上のような存在であるクロヴィスの屋敷に、彼女は今日明日と招待されているのだ。

四角く頑丈なトランクには、ルリの意に反してたくさんの物が詰められた。

皇太后陛下からは、せっかくの機会だからと何着も衣服が贈られ、ルリが今着ている訪問着も彼女からいただいたものだ。

姉侍女達からも、それぞれお気に入り装飾品や化粧品など、たくさんのお別れ品が集まった。

そして、二日ほど前にひょっこりと顔を出した少女からは、何だかとても綺麗な紙の袋をいただいた。

彼女――スマレは、ルリとクロヴィスが親密になるきっかけを作った人物で、偉大な先帝陛下に溺愛される奥方ながら、実に親しみやすい愛らしいひとである。

彼女にもらった紙袋の中身は、「サプライズだから、直前に開けてね」との言葉に従って、まだ確かめてはいない。

ルリはこの後、執務室で用事を済ませてから迎えに行くと伝言をよくこしたクロヴィスに連れられ、リュネブルク邸に向かうことになっている。

彼を待っている今の状態が、スマレの言う“直前”にあたるのではないかと思い、ルリは少しワクワクしながらその封を解いた。

袋の中には、柔らかで上質な手触りの布が、綺麗に折り畳んで入っていた。

生地が透けているので、イブニングドレスを着た時などに肩に羽織るような、大判のストールではなからうかと検討をつけ、ルリはそつとそれを袋の中から取り出した。

その時、細い紐でできた輪っかが指に引っ掛かり、「あら、これは何かしら？」と、二つあったそれを両手に持って掲げ、生地を広げて見た。

――すると

「おや、それは何ですか？　ルリ」

「えっ……?」

いつの間に入ってきたのか、ルリのすぐ真後ろから聞き覚えのある声がかかった。

びっくりと驚いたルリが慌てて振り向くと、案の上宰相クロヴィスが背後に立っていた。

かっちりとした外出着を着込んだ彼は、実に洗練された立派な紳士で、子供っぽさの抜けきらない自分を自覚しているルリにとっては、ひどく遠い存在に思えた。

しかし、そんな思いを知って知らずか、クロヴィスは突然長身を折り曲げてルリの耳元に顔を近づけたかと思うと、甘く艶っぽい声で囁いた。

「驚きました。あなたは意外に大胆だ。今夜……私のためにそれを着て下さろうと?」

「あ、えっ? ——ひゃっ……!!」

耳にかかる吐息に顔を真っ赤にしたルリは、クロヴィスの言葉に不思議そうに首を傾げ、それから彼の視線を追って自分の手元を見ると、飛び上がった。

手触りのいい大判のストールだとばかり思い込んでいた物は、実は透けた白い生地の子ビードールだった。

つまり、相当色っぽい感じのランジェリーだったのだ。

それを認識したとたん、ただでさえ赤くなっていたルリは、湯気が出そうなほど耳まで真っ赤に染まった。

「ちっ、違いますっ! これは私のものではなくて! そのっ、あのっ……」

慌てて子ビードールを胸に抱きしめ、クロヴィスの視線からそれ

を隠したルリは、彼を見上げて言い訳しようと躍起になったが、上手く言葉が見つからずしどろもどろ。

ついには混乱して、その名のごとく瑠璃色の瞳をうるうるさせ始めた彼女に、クロヴィスは苦笑を返す。

「失礼しました、冗談ですよ」

「……クロヴィス様」

「どうせそれをよこしたのは、私のちっちゃな義姉上あたりでしょう？」

「あの……」

「あの方のやりそうなことだ」

クロヴィスはそう言うのと、優しい仕草でルリの手からベビードールを取り上げ、ささっとそれを器用に畳む。

そして……

「あっ、あのっ……？」

「はい？」

戸惑うルリに眩しいほどの笑顔を返しながら、当たり前のようにそれを彼女のトランクの中に詰め込んだ。

（も、持っていないかなくちゃいけないんだ……あれ……）

そうして、スケスケ下着の衝撃からいまだ立ち直れていないルリをよそに、中身がいっぱい詰まったトランクをひょいと持ち上げると、クロヴィスは彼女を振り返った。

「では、行きましょうか。ルリ」

そこでようやく我に返ったルリは、大切なことを思い出した。

扉に向かって歩き始めたクロヴィス呼び止めようと、思わず手を伸ばして彼の袖をきゅっと掴んだ。

しかし、すぐさま無礼に気づいて、慌ててその手を引っ込める。

「しっ、失礼しましたっ！」

「いいんですよ、あなたなら。それで、どうしましたか？」

「あの……」

「ああ——分かりました」

すると、緊張でいまだすらすらと言葉の出ないルリに何を思ったのか、勝手に一人で納得したように頷いたクロヴィスは、トランクを持っていない方の手で彼女の手を掴んだ。

「——っ!？」

「手を繋いでほしいのでしたら、遠慮せずにそうおっしゃい。まったく、可愛いですねえ」

「ちがっ！　ちがちがちがっ……」

「血なんて出てませんよ。大丈夫、柔らかくてすべすべとした、白魚のような手だ」

「ちがうんですっ！」

ルリと手を繋いだクロヴィスは、柔らかくて小さなそれを大事そうにそっと握ると、ひどく満足げに微笑んで歩き始めた。

その後、ケーキを焼いていることを何とか伝えたルリだったが、何故か繋いだ手を放してはもらえず、彼に手を引かれたまま自室から調理場まで移動した。

もちろん、通ってきた後宮の回廊には先輩侍女達の目もたくさんあって、自分達に集まる視線にルリはもう縮こまるしかない。

一方、鼻歌でも歌いそうなほど上機嫌な宰相閣下は、滅多に足を

踏み入れることのない後宮の調理場に到着すると、もの珍しそうに辺りを見回していたが、ようやく手を放してもらえたルリがオーブンに駆け寄ると、ゆっくりとその後を追った。

「おや、いいにおいですね。何のケーキですか？」

「ジンジャーと、キンカンという果実のマーマレードを入れたケーキです」

「キンカン？」

「あの……先日、スマイレ様にいただきました。お国の柑橘類の一種で、皮ごとマーマレードにして食べられると」

そう言って、スマイレがさっきのベビードールと一緒に渡したのは、小さな小さな可愛いオレンジの赤ちゃんのような果実だった。

金柑は生食もできるし、果皮のついたまま甘く煮ても美味しく食べられ、喉の痛みや咳に効果があるといわれる民間薬としても知られているらしい。

グラディアトリアでは見たことのない種類だが、植物に造詣の深いレイスウェイク大公爵が、奥方に請われて屋敷の庭園で栽培しているのだという。

「今日の義母上のお茶請けですか？」

「いえ、あの……、リュネブルク家の皆様に、お持ちしようかと思っ……」

「我が家に？」

「は、はい……」

焼き上がったばかりのケーキを型から抜くと、ルリは残してあった金柑のマーマレードをその表面に塗った。

すると、光沢が出て艶やかになり、実に美味しそうな姿に仕上がった。

「私、どんなものをお持ちしたらいいのか分からなくて……」

手慣れた様子でケーキをそっと箱に詰めながらそう言うルリに対し、そんなに気を使う必要はなかったのにとクロヴィスは思ったが、それではルリ自身が納得いかないようだった。

「私が唯一褒めていただけるのは、お菓子作りだけです。だから、お口に合うかどうかは分かりませんが、心を込めてお菓子を作ってお持ちするのが、一番私らしい手みやげになるのではないかと思います」

まだほかほか湯気を残すケーキは、湿気がこもらないように気を配りつつ、箱の上から薄い布で柔らかに包んだ。

そんな様子を黙って眺めていたクロヴィスに、ルリは少し不安になった。

「あの……失礼でしょうか？」

「うん？ 何がですか？」

「料理人でもない私が、お菓子を手作りしてお持ちするなんて……」

よくよく考えてみたら、突然屋敷を訪れたよその侍女の手作りしたものなど、口にするのは気持ちが悪いかもしれない。

皇太后陛下たちは喜んで食べてくれるが、それは彼女達が幼い頃からルリを知ってくれているからであって、クロヴィスやスマレのようにパクパク食べてくれる人の方が珍しいのではなからうか。

そう思うとひどく不安になって、つい足元に視線を落としそうになったルリだったが、大きな掌に包まれていた手がぎゅっと握られ、はっとなった。

ケーキの箱を持ったルリは、再びトランクを下げたクロヴィスに

手を引かれて後宮を出て、表に待たせてある馬車に向かっているところだった。

もちろん、その前には皇太后陛下の私室に顔を出して、二人仲良く暇の許しを得てきていた。

「失礼なことなんて何もないですよ。あなたのお菓子がおいしいのは、私もよく知っています。プロが作ったものにもまったく退けをとりません。自信を持ちなさい」

「あ、ありがとうございます……」

「それにね、どんな素晴らしい物を金を出して揃えたとしても、心を込めて手作された贈り物に敵うはずがないんですよ」

ルリの手を包む温もりは、たおやかだった母のそれとは違い力強く、それでいて母に負けないほど優しかった。

同じように優しい声が、顔を上げたルリの上にさらさらと降り注ぎ、その向こうには柔らかい笑みをたたえたクロヴィスの顔。

細いフレームの眼鏡の奥のいつもは怜悯な瞳を細め、愛おしげにルリを見下ろしていた。

ルリは、先ほどの恥ずかしさとはまた別の熱が、己の頬に集まるのを感じた。

「祖父も、あなたが来るのをとても楽しみにしているようです。その手作りのケーキを見たら、きっと喜びますよ。着いたらお茶にして、一緒にいただきますよう」

「はい、クロヴィス様」

そうして、待たせてあった馬車に乗り込んだ二人は、一路リュネブルク公爵邸に向かって出発した。

ルリの膝の上に大事に抱かれたケーキは、道中箱の蓋を少しだけ開けて湿気を逃がし、目的地に着く頃にはいい具合に冷めて、味も

馴染んで食べごろとなっていた。

瑠璃とケーキ2

からからと、石畳の街道の上を車輪の回転する音がする。

午後を過ぎた街の喧噪は、窓を閉めたリュネブルク家の馬車の中までは、わずかに届くのみ。

流れていく車窓の景色をぼんやりと眺めながら、ルリはかすかな既視感にとらわれていた。

ルリが馬車に最後に乗ったのは、いつのことだっただろうか。

父侯爵が処刑されたのは、彼女が六歳の頃だった。

それまでは、母とルリは城下街の一角に屋敷を与えられて住んでいたが、婚外の妻子である二人が侯爵の屋敷を訪ねられるはずもなく、時々彼が会いにやってくるのをただひたすら待つばかりの生活だった。

だから、裕福だった頃も母と馬車で出掛けた思い出など数えるほどしかない。

さらに、父が亡くなって財産を没収され、皇太后陛下のお側に寄せただいてからも、母は心労からか体調を崩すことが多くなって外出することがまったくなくなった。

ルリもまた、外に出て買い物や散策を楽しむよりも、部屋で静かに本を読んでいる方が好きだったので、私用で街に出たことなどなかった。

そうして考えてみれば、ルリが最後に馬車に乗ったのは、屋敷を引き払って王城に向かう時だったと思い至った。

哀れで無力な母子を助けるために、優しい皇太后陛下がよこして下さった馬車に、あの時のルリもこうして座って車窓の景色を目で追っていた。

ルリは幼かったから、その時のことを全部はつきりと憶えている

わけではない。

ただ、おぼろげな記憶しかない父は死に、それを知らされた日からずっと泣いている母が、その時もまだ向かいの席で涙を流していたことだけは、鮮明に憶えている。

あの時の母の涙は、やはりまだ父を想ってのものだったのだろうか。

それとも、お優しい皇太后陛下のお心遣いに対する感謝の涙だったのだろうか。

母が亡くなった今となっては、それを確かめる術は残されていないが、どちらにしろ、漠然とした不安がその時ルリの幼い心に深く根付いたことだけは確かだった。

本当は、ルリも怖くて泣きたかった。

それでもルリは、泣くばかりの母を笑顔で励まし、陰口に唇を噛んで耐え、自分がこれからどうなってしまうのかも分からぬ不安を胸に押し込めた。

やがて母は亡くなり、ルリは成人して正式に皇太后陛下の侍女になった。

その頃には、もう彼女の生い立ちを持ち出して貶めようという輩は消え、優しい主人と頼もしい姉侍女達との毎日は、ルリにとっては随分と心地よいものとなっていた。

しかし、そうして穏やかに過ごしている時に限って、かつて抱いた漠然とした不安が頭をもたげてくる。

母方の親族は健在だが、汚職で処刑された父侯爵と関わるのを嫌って、ずっと昔に縁を切られてしまっている。

母を亡くしたルリには、もう家族はどこにもいないのだ。

もちろん、親代わりに後見して下さる皇太后陛下の存在は大きい。が、国母ともいえる彼女を家族と思えるほどの度胸はルリにはない。そうして、こんなにいろいろと皆が良くしてくれるというのに申し訳ないと思いつつも、時々どうしても寂しくて仕方のない時がある。

遠慮なく身を委ね、甘えを許して包み込んでくれる“家族”が、恋しくて恋しくて堪らない時があるのだ。

「何を、考えているのですか？」

「え……？」

突然声をかけられて、ルリははっと我に返った。

向かいの席から、柔らかな瞳で彼女を見守ってくれていたのは、この馬車の持ち主であり、これからルリが訪問することになるリュネブルク公爵家の当主クロヴィスだ。

一介の侍女にとっては雲の上の存在ともいえる宰相閣下と二人きりで馬車に乗っているというのに、つつい物思いに耽ってしまった自分の無礼を、ルリは思いつきり恥じた。

「し、失礼いたしましたっ！」

「いいんですよ、楽にしています。ただ、最初は楽しそうに外を眺めていたのに、途中から急に表情がなくなったので、気になりましたね」

「えっ……？」

ルリは元々口数の多い方ではないし、クロヴィスも宰相という職業柄口は達者だがおしゃべり好きというわけではない。

まだそうそう碎けた仲でもない二人が馬車に乗り込んで、普通ならば沈黙が重苦しく感じたりするものだ。

しかし、クロヴィスとルリは波長が合うというか、意外にも言葉のない二人っきりの空間は心地よく、その安心感がルリを過去の記憶へと誘ったのだろう。

ただ、辿り着いた記憶は楽しいものではなく、ルリは己の心の奥に潜む寂しさと思い掛けず対峙することとなった。

それから自分を守るために、一瞬全ての感情に蓋をした。

それを、クロヴィスには見られていたようだ。

「あなたも、かつての私の兄と一緒にですね。己の思いを閉じ込めようとする時、表情を消してしまおう」

「私は……」

「いいんですよ。それを、今すぐ無理矢理暴こうとは思っていません。ただ、せっかく一緒にいる時間を手に入れたんですから、私の方を向いてみませんか？」

クロヴィスの言葉に、ルリは不思議そうな視線を返した。

そういう風に、彼を媚も打算も匂わせない無垢な視線で見つめる女は稀であって、そこがまたクロヴィスがルリを気に入る要因にもなったのだということは、彼女は知らないだろう。

そもそも自分が天下の宰相閣下の馬車に乗せられて、過去の恋人の誰ひとり立ち入ることを許されなかったリユネブルク家に招待されることの意味を、ルリは身に余る光栄と恐縮するばかりで深くは考えていないだろう。

まだそれほど多く互いのことを知っているわけではないのだから、それは仕方のないことなのかもしれない。

そう思ったクロヴィスは、向かいの席から手を伸ばして、ルリの膝の上に大事に抱かれていたケーキの箱を座席に移動させると、あっ、とそれを追おうとした彼女の小さな手を捕まえた。

「ねえ、ルリ。私はね、職業柄あなた自身のこと大体知っていますよ。変な意味ではなくてね」

「……」

「でも、あなたは私のことをあまり知らないでしょう？ 家族構成と職業以外に、何か知っていますか？」

そう問われると、ルリは黙り込むしかない。

彼はルリの敬愛する皇太后陛下の息子で、この国の宰相で、現皇帝の兄で前皇帝の弟で、それから……

瞳泳がせる彼女の心の内を読んだのか、クロヴィスは苦笑して「ほらね?」と言った。

「だから、これからたくさん知って下さい。私について何か質問はありませんか? ほくろの数とか、興味ありますか?」

「それは……ちよつと……」

冗談を織り交ぜつつ、ルリの緊張を解すように語りかけるクロヴィスの声は柔らかく、握られた両手はとても温かかった。

それにほつとどこか安堵したルリは、正面の彼の端正な顔を見上げ、そういえば……とあることを思った。

「あの……」

「はい?」

「実は、眼鏡を外した顔を、まだ拝見したことがありませんでした」

「おや、そうでしたか?」

クロヴィスは、いつも細いフレームのスマートな眼鏡をかけていて、それがとても似合っている。

しかし今言った通り、ルリはまだ彼の素顔を見たことがなかったのだ。

それに対して彼は、「いいですよ、ご覧ください」と答えたかと思ったら、何を思いついたのかにやりと笑った。

「にこり」ではなく「にやり」であったのは、よく物事に鈍いと言われるルリでも気づいた。

彼女が嫌な予感に思わずうっと仰け反ると、クロヴィスは握っていた両手に力を込めて逆に引き寄せてしまう。

そして、再び唇の端を引き上げて言った。

「その代わり、ルリが眼鏡を外すんですよ？」

「えっ……!？」

「ほら、どうしました？　あなたが見たいって言ったんですよ。早く外して下さい」

ん、と顔を突き出して瞳を閉じたクロヴィスに、ルリは何だかとてもなく恥ずかしい気分になった。

けれど、「ほら早くしなさい」と催促されて、結局ルリは言われた通りにおずおずと彼の眼鏡の縁に指を添える。

そうして、繊細なフレームを壊さないようにそっと震える指で摘んで引き抜くと、彼の艶やかな金髪をさらりと揺らしてそれが外れた。

「……」

ひどく近く顔を近づけ合っていることも忘れて、ルリは思わず目の前の美貌に見蕩れる。

やがてそっと開かれた瞳は、血の繋がりは無いというのに、ルリの敬愛する皇太后陛下とそっくりの澄み切った空のような美しい青であった。

けれど、綺麗——と呟きかけたルリよりも一拍早く、クロヴィスの薄い唇が動いた。

「綺麗な瞳ですね。汚れない宝石のようだ」

それが自分の瞳を指しているとは、すぐには気づけなかったルリがきょとんと首を傾げると、クロヴィスは瞳を細めて微笑んだ。

「どうですか？ 眼鏡の時とは印象が違います？」

「あ、はい、あの……、眼鏡をかけていらっしやらない方が、優しいお顔に感じます」

「ほう、そんなもんですか」

「あと……お兄様に、よく似ていらっしやいます」

そうルリが言ったとおり、髪や瞳の色こそ違うが、やはり母親が同じクロヴィスとヴィオラントの顔の造形はよく似ている。

それを聞いたクロヴィスは、一瞬虚を突かれたような顔をしたが、すぐに「そうですか」と言って破顔した。

今でも兄を深く敬愛する彼は、ルリの言葉が素直に嬉しかったのだろう。

そんなクロヴィスを見つめ、彼が兄ヴィオラントを含めた家族をとても愛しているのだと再確認する。

それはとても微笑ましいことである。なのに？？

(いやだっ……私……)

とたんに、ルリは天涯孤独の我が身に愕然とした。

兄も弟も姉も母も、そしてスマレのような新しい家族もいるクロヴィスが、その瞬間とてつもなく羨ましくなった。

しかもただ羨むだけでなく、それは嫉妬のように醜い感情に成り代わろうとし、そう気づいたルリはひどく自分が恐ろしくなって、それを封じ込めようとした。

クロヴィスに見蕩れていた瞳を伏せ、どす黒い感情が頭をもたげるのを阻止しようと、彼に包まれていた掌を引き抜き胸を抑えようとした。

しかし、それを許さぬ強い力で手を握りしめられたと思ったら、いつの間にか離れていたもう片方の彼の手が、ルリの顎を捕えた。

「? ? ルリ」

ぐっと顎を掴まれて、俯こうとした顔を無理矢理上に向かされた。それに驚いた声を上げる間もなく、開きかけたルリの唇は何者かによって塞がれてしまう。

もちろんそうしたのは、クロヴィス以外の何者でもない。

? ? ルリにとっては、生まれて初めてのキスであった。

そう彼女が認識する前に、優しく押し付けるだけの唇はそっと離れて行ってしまったが、おかげで呆然と見上げる形で固まったルリに、クロヴィスは不敵な笑いをたたえた顔で言った。

「私の前で、もう感情を押し込めるのはやめなさい。あなたが表情を消す度に、私はそれを阻止します」

「なっ……えっ……?」

「つまり、私の前でしけた面をするようならば、その度に唇を奪われると覚悟しなさいねってことですよ」

「――っ!!?」

「おぼえておきなさいね」

そうして、ようやくクロヴィスはルリの顎と両手を解放し、眼鏡をかけて何食わぬ顔で座席に座り直した。

もちろんルリは、その後時間差で恥ずかしさが爆発して真っ赤になり、彼はそれを見て「ふふふ」と実に楽しそう。

そんな相手の余裕すぎる態度を恨めしく思いながら、傍らに除けられていたケーキの箱を膝に抱え直し、耳まで真っ赤にしてそれをギューっと抱きしめていたルリは、そこではたとあることに気づいた。

そして突然、水を得た魚のようにぱあっと顔を輝かせると、頬を薔薇色に色付かせたまま声を上げた。

「あのっ、さっきのお話ですがっ！」

「うん？ 何ですか？」

「私がクロヴィス様の、家族構成と職業以外に知っていること、一つありました」

「おやおや、何でしょう？」

そんな少女の様子を、可愛らしいなあと思いながら眺め、クロヴィスは長い脚を組みながら先を促す。

するとルリは、膝に抱いたケーキの箱を少しだけ持ち上げて答えた。

「クロヴィス様は、お菓子に目がなくていらっしやいます！」

「おや、バレましたか」

その時の、ルリのいやに得意げな顔が面白かったのか、クロヴィスは思わず盛大に噴き出していた。

瑠璃とケーキ3

リユネブルク公爵家の屋敷は、王城を挟んでレイスウェイク家とちょうど対極の位置にある。

市街地を過ぎると小さな林に差しかかり、そこはもうかの家の領地である。

やがて、馬車は大きく立派な門をくぐり抜けた。

正面にそびえ立つ大きな屋敷は、先々代が建てたものらしいが、手入れが行き届いていて少しも傷んではない。

屋敷の背後には山が迫り、その昔はたくさんの銀が採れたらしいが、今はもう発掘はなされていない。

クロヴィスとルリを乗せた馬車は滑るように敷地を走り、玄関の前で緩やかに停車した。

御者が扉を開くと、クロヴィスはルリの膝のケーキの箱を彼に預け、自分はさっと馬車から降り立ったかと思うと、ルリに向かって片手を差し出した。

「おいで、ルリ」

「は、はい……」

屋敷に近づくにつれ、新たに緊張を募らせていたルリを馬車の中で見守っていたクロヴィスは、彼女を安心させるように柔らかく微笑みかけ、自分の掌に慎ましく載った震える手を力強く握ってやった。

そんなクロヴィスの優しさに気づき、ルリは少し安心したように強張っていた頬を緩めた。

と、その時――

パンツ！

パンパンパンツ！

パパンツー！！

「きゃっ……！？」

突然、何かが破裂するような大きな音が響いたかと思うと、色とりどりの紙紐と紙ふぶきがクロヴィスとルリの頭上に降り掛かった。とっさに自分の身を盾にして、それがルリに届くのを防いだクロヴィスの視線の先には、にこにことお揃いの笑みを浮かべた見知った顔が並んでいる。

クロヴィスの祖父であり、前リユネブルク公爵アルヴィースをはじめ、この家の住人が全員並んで玄関で出迎えてくれたらしい。

クロヴィスは髪に絡んだカラフルな紙くず達を振り落とすと、義姉スミレが「魔王だ魔王だ」と評する笑みを浮かべて、一番先頭にいた祖父に向かって口を開いた。

「ただ今戻りました、おじいさま。盛大な歓迎をありがとうございます」

「おかえり、クロヴィス」

しかし、いろいろ鈍いと有名なアルヴィースは相変わらずにこにこしたままで、後ろの使用人達の顔色が冴えなくなったことにも気がつかない。

クロヴィスはそんな一同を舐めるように見回してから、彼ら全員が手に持っている物体に首を傾げて言った。

「それで、これは一体何の真似です？」

大人の掌に収まるほどの大きさの円錐の物体で、周りにはカラフルな紙が貼られている。

こちらを向いた円錐の底がポツカリ開いていることから、先ほどの紙くずどもはそこから飛び出したものだろう。

クロヴィスの問いかけに、アルヴィースはよくぞ聞いてくれたとばかりに、笑みを深めて誇らしげに答えた。

「これこそが、スマレの国における最大の歓迎アイテムなのだそうだ」

「……まあ、あのちびっ子おねえちゃまの仕業ですか……」

「見てご覧、クロヴィス。この後ろの紐を持ってだな、こうして上向きにかまえて……この時の角度が重要らしいのだ。それでだな、あとは一気に紐を引っ張って——」

「分かりました分かりました。面白いおもちゃをもらえてよかったですね。でもそれ、中に微量の火薬が入っているようですから、取り扱いには注意して下さいね。あと、人に向かって打っては駄目です」

「ああ、しまった！ それはスマレにも注意されていたことだった。緊張のあまり、すっかり忘れていた！」

つまりそれは、スマレが実家のある世界から取り寄せた、典型的なパーティーグッズであるクラッカーだった。

もちろん、グラデアトリアには存在しない代物である。

わたたと慌てる祖父を眺めながら、先日スマレも言ったことだが、この人と自分や兄に血の繋がりがあるなんて時々信じられない……とクロヴィスは思った。

そんなドジッ子属性を見せた愛すべき祖父アルヴィースは、クロヴィスの後ろでおろおろとしていたルリを見つけると、困ったように眉を八の字に言った。

「びっくりさせてしまつてすまなかつたね、お嬢さん」

「あ、いえ、大丈夫です！」

「ではでは、皆の衆。整列！」

そうして、畏まるルリを前に、アルヴィースの号令でリュネブルク家の一同がずらりと並んだ。

ルリはその光景を見て、過去にたった一度だけ、父侯爵の屋敷に連れていかれた時のことを思い出した。

その時もこうやって、大勢の使用人が玄関で出迎えてくれたと思うが、彼らは人形のような無表情を顔に貼付けて、黙って頭を下げていた。

そして、父について通り過ぎたルリの背中に突き刺さるのは、“妾の子”という蔑みの視線ばかりで、幼い身でも自分が歓迎されていないことがよく分かったものだ。

けれど、今ルリを迎えるのは、過去の記憶とはまったく対照的な視線。

「——ようこそ、リュネブルク家へ！」

ずらりと並んだ全ての顔には柔らかな笑みがのっついていて、ルリは本当に自分が歓迎してもらえているのだと実感した。

「……ね？ 緊張して損したでしょう。まったく、どれだけあなたが来るのを楽しみにしていたんでしょうね、うちの連中は……」

クロヴィスはそう苦笑しながら、ルリの背に優しく手を添えて、屋敷の中へと促した。

ところがその時、ふとルリの視線の端に、物陰からこちらを見つめる小さな男の子の姿が映った。

ルリが思わず立ち止まると、クロヴィスは「どうしました？」と

彼女の顔を覗き込んだ。

「あ、あの、男の子が……」

「ああ、紹介しますよ。——ロイズ、こちらに来なさい」

「……」

ルリの視線を追って男の子を見つけたクロヴィスは、手招きをして彼を呼んだ。

すると、男の子は幼さに似合わぬ硬い表情をして、とことことやってきた。

柔らかそうな明るい茶色の髪とヘーゼルの瞳の可愛らしい子供に、ルリの頬も自然と緩んだ。

「お屋敷の、どなたかのお子さんですか？」

「ええ、私の息子」

「——ええっ……!？」

グラディアトリアの宰相閣下はいまだに未婚である。

まさかの隠し子発言っ!？ と、ルリはびっくり仰天目を見開いて、クロヴィスを振り仰いだ。

けれどそこにあったのは、人の悪い笑みを浮かべた美貌。

「——のように可愛がっている子供ですよ」

「……クロヴィス様」

「ふふふ、ルリは期待通りの反応をくれるから楽しいですねえ」

「……」

からかわれたと分かったルリは、頬をかっとならめて恨めしそうにクロヴィスを見上げたが、彼の笑みを深めただけだった。

「ロイズはね、うちで雇っていたメイドが生んだ子供なんですが、母親が去年病で亡くなりましてね。父親も分らず身寄りがいないものですから、リュネブルク家で面倒をみることになったんです」

「まあ……」

「しっかりした子で、おじいさまのお守りにちょうどいいんです。

——ロイズ、お客様にご挨拶しなさい」

「……こんにちは」

「こんにちは。はじめまして、ロイズ君。ルリといいます」

クロヴィスに促されて、いかにも不承という様子でロイズはルリに挨拶をした。

ルリが腰を落として目線を合わせ「おいくつですか？」と問いかけると、また仕方なしにという様子で「……五歳」と小さく答えた。しかし、彼は突如唇を噛んで顔をしかめたと思ったら、ギッとクロヴィスを睨みつけた。

「クロヴィスさまのうそつきっ。つぎにお帰りの時は、ぼくにチェスを教えてくださるお約束でしたっ！」

「うん？ もちろん、約束を違える気はありませんよ？」

「うそだっ！ だって、女の子とお帰りなものっ！ その子とばかり遊ぶ気なんだものっ！」

「ううむ、まあ確かに、ルリと遊ぶ気も満々ですが……」

「ク、クロヴィス様……」

「女の子なんか、女の子なんかっ、だいっきらいだっ……！！」

「あ——こら、ロイズ」

小さなロイズはそう吠えようと、クロヴィス達に背を向けて、たつとどこかに走り去ってしまった。

「やれやれ……おじいさま、ロイズに何かおっしやいました？」

「クロヴィスの大切な女性がいらっしゃるから、今回は遊んでもらえないよとは言ったよ。一世一代の勝負どころだからね」

「……何の勝負だって言うんですか」

「君がかわいい人を手に入れられるかどうかは、リュネブルク家としても大きな問題だからね。つんつんとプライドが高くて面倒くさい、綺麗なものだけの女主人はいらないよ」

そう答えたアルヴィースは、ばちりとルリに向かって片目を瞑ってみせる、お茶目な紳士。

彼の淡いブロンドは、光りの加減では先帝陛下の銀髪を彷彿とさせ、優しく細められた瞳の色は宰相閣下と同じ空の色。

年齢を重ねていても、確かな血の繋がりを感じさせる端正な顔立ち、彼の孫達ととてもよく似た雰囲気だった。

「さあ、こんなところで立ち話もなんだ。中に入ってお茶にしよう」

そう言ったアルヴィースの言葉に、ルリは手みやげに持ってきたケーキの箱を預けっぱなしであることを思い出した。

慌てて背後を振り向くと、馬車の脇でにこにこして見守っていた御者の手にそれはなく、いつの間にか隣に立つクロヴィスの片手に移っていた。

ルリの視線を追ってケーキの箱に辿り着いたアルヴィースは、またにこりと笑みを深める。

「スマレがね、君の作るお菓子はとても美味しいから楽しみにしておけて言ってたんだよ」

「そ、そのように、勿体ないお言葉をっ……」

「うちの義姉上は、ああ見えてもお世辞は言わないですよ。私も焼きたてを拝見したので、ご馳走になるのが楽しみです」

「ク、クロヴィス様までっ……」

ルリにとっては、菓子作りが唯一自信を持てること。

せっせとハードルを上げてくれたスマレとクロヴィスをこっそり恨みつつ、ルリは期待に胸を膨らませるアルヴィースに向かって言った。

「お会い出来て光栄です、アルヴィース様」

「こちらこそ、会えて嬉しいよ。よく来てくれたね。??ところで、クロヴィス」

「はい、何でしょう？」

「そろそろ……彼女に名前を聞いてもいいかな？」

アルヴィースにそう言われ、ルリは自己紹介どころかまだ名乗ってさえいなかった自分の失態に気づいた。

おそらく、クロヴィスやスマレとの話題に上ったルリの名は、彼はすでに知っているに違いない。

それでも、一介の侍女にわざわざ名乗る機会を与えてくれたのは、彼の気遣いに相違ない。

「し、し、失礼しましたっ！」

「いいんだよ、落ち着いて。では可愛らしいお嬢さん、この爺にも名前を教えてくださいるかな？」

爺だなんて……と思いつつも、ルリはスカートを摘んで淑女の礼をして、名乗った。

「ルリと申します」

皇太后陛下が用意して下さったのは、ルリの瞳を優しく薄めたような淡い色合いのワンピース。

光沢のある手触りのいい生地に、襟元や袖には繊細なレースが飾られて、一目で上等とわかる代物だ。

ルリ自身も、名のある侯爵に見初められたほどの美しい母譲りの、整った容姿をしている。

髪はありふれた栗毛だが、皇太后陛下は艶やかでとても綺麗だと撫で、深い青の瞳は宝石のようだとか大公爵夫人が褒めてくれた。

侍女のお仕着せから上質な訪問着に着替えたルリは、どこからどう見ても美しい貴族の令嬢に映った。

だが、彼女が名乗ったのは、家名も血名も何もない、ただの“ルリ”だった。

それは、罪人として処刑された父とも、母と自分を見捨てた母方の実家とも、完全に決別したのだという、ルリの頑な意思の表れである。

ルリは、愛する母にもらい、敬愛する皇太后陛下に親しまれ、可愛らしい大公爵夫人に素敵と褒められた“ルリ”という名ただ一つで生きていくつもりであった。

“ルリ”以外の何者にもならない??そう心に決めていた。

瑠璃とケーキ4

仕上に塗った金柑のマーマレードで、ケーキの表面は艶やかでいてしっとりとしている。

ずっとナイフを入れると、ほのかに香るのはジンジャーとラム酒。ケーキの生地には、ラム酒に砂糖と一緒に漬込んだみじん切りのジンジャーと、もちろんレイスウェイク大公爵家自家製の金柑マーマレードが混ぜ込まれている。

ケーキを切り分けるルリの横では、先ほど彼女とクロヴィスを使用人一同を従えて出迎えた、前リユネブルク公爵アルヴィースが、三つのカップに紅茶を注いでいた。

グラディアアトリア四公爵の一人でもあったアルヴィースだが、彼は昔からこうして自分で紅茶をいれることが多かった。

かつては妻――クロヴィスとヴィオラントの祖母にも、日常的に振る舞っていたらしい。

クロヴィスが自分でお茶をいれるようになったのも、彼の影響が大きい。

「おいしそうだねえ。それに、とてもいい香りがするね」

「ありがとうございます。お口に合えば光栄です」

皇太后陛下の侍女であるルリの職場は、基本女性ばかりで占められている。

何度かクロヴィスの執務室に出入りするうちに、彼の部下の文官たちとも挨拶程度は交わせるようになったが、ルリはまだどうにも男性と話すことには慣れない。

特に、アルヴィースのような年齢の男性とは、今まで接する機会がほとんどなかったので、ルリは最初はやはり緊張していた。

実を言うと、ルリの父はアルヴィースと同年代であった。

年をとってからルリの母を見初めたので、その頃にはすでに正妻との間の子が生んだ孫もいた。

ルリの父の記憶はひどくおぼろげだが、いつも厳しい顔をしていて、抱いてもらった憶えもないように思う。

一方で、彼女の隣で自分の入れた紅茶に満足そうな壮年の紳士は、端正な顔一面に優しい笑みを浮かべて、それを惜しげなくルリにも向けてくれる。

一瞬、それが父が笑いかけてくれたものと錯覚し、自分の中に亡き父への想いの名残が存在したことに、ルリ自身ひどく驚いた。

ルリが切り分けたケーキは、上等な皿の上に載せられて、ひどく立派になった気分だ。

それに、待ってましたとばかりにフォークを入れて、真っ先に口に放り込んだのは、ソファに座って寛いでいたクロヴィスだった。

「うん、やはり美味しいですね。甘すぎずとても上品でいい」

「ありがとうございます」

「どれどれ」

孫の絶賛に、彼とルリの前に紅茶を置いてやったアルヴィースもケーキを口を含む。

そうして、「これはうまい」と盛大に褒めたたえた。

「キンカンという果実は、私もヴィオラントに種を貰って庭に植えようと思っているんだ。実が生ったらルリにお菓子にしてみよう」
「気安く彼女を使わないで下さいよ、おじいさま。ルリは皇太后陛下の侍女なのですよ」

ケーキを頬張ってほくほく幸せそうな祖父の言葉に、ルリにお菓子を散々作らせてきた自分を棚に上げたクロヴィスが苦言を返すと、アルヴィースは「おや?」という風に首を傾げた。

「でも、クロヴィスの恋人なんだろう? いずれうちの子になるんだろう?」

「――っ……!?!?」

さらりと言ったのけたアルヴィースの言葉は、ルリを飛び上がらせるほど驚かせた。

しかし、今まで一度も懇意にしている女性を屋敷に連れてくることも、ましてや身内に紹介することもなかったクロヴィスが、二十四の歳にして初めてそれらをなした相手がルリなのだ。

アルヴィースが、彼女を孫の特別な女性――つまり結婚を約束した恋人と思うのも無理はないだろう。

家柄云々に頓着しない前リユネブルク公爵にとって、ルリは大歓迎の存在だった。

――そんな、滅相もない! とんでもない誤解ですっ!

ところが、そうルリが叫ぶよりも早く、かちやりと紅茶のカップをソーサーに戻した男が口を開いた。

「ああ、そうですね。まったくその通りです」

「――っ!?!? クロヴィス様っ!」

またクロヴィスにからかわれているのだと思ったルリは、それはあまりにもお戯れが過ぎると彼を見上げたが、しかし思いがけず真剣な眼差しとかち合うことになっておののいた。

眼鏡の奥の怜悯な瞳はまっすぐにルリを見据え、逸らすことを許さぬ強さであった。

「実はね、何度か義母上にはルリのことをかけあってみたんですがね、なかなか首を縦には振っては下さらないのですよ」

「……え？」

「ほら、ルリは宰相執務室付きの侍女達とも仲良くなったでしょう。だからもういっそ、うちの侍女としてあなたを譲っていただけないかとお願ひしてみたんですよ」

「ええっ？」

「誤解なきように言っておきますが、あなたを物のようにやりとりするつもりだったのではないですよ？ ルリは義母上の侍女である前に、彼女の養い子ですからね。保護者に先にお願ひするのが筋かと思って」

「そんなっ……恐れ多いことです！ 私のような者が皇太后様の……」

「ですが、義母上にはきっぱりと断られてしまいましたよ。ルリを、よそに働きに出す気はないんですって」

「本当ですか……？」

「ルリを手放すのは、これぞという相手に嫁にやる時だけだともおっしゃってましたよ」

皇太后陛下に母とともに救われ生かされたルリは、少しでも彼女に恩返しをしたいと思っている。

クロヴィスから聞かされた主人の言葉に、ルリは胸が熱くなるのを感じながら、「私も皇太后様以外の方にお仕えする気はありません！ 一生お側にお仕えます！」と心の中で返した。

そんなルリの決意を知ってか、クロヴィスは獲物を狙う猛禽類のように鋭く瞳を眇め、眼鏡のレンズ越しに彼女を見据えて言った。

「そういうわけだからね、ルリ。——うちにお嫁においで」
「——っ!？」

がちやりつと、ルリの手元でカップが大きく音を立てた。

危うく、せっかく先代リュネブルク公が入れて下さった紅茶を零してしまうところだった。

そのアルヴィースは、突然の孫のプロポーズに立ち会うことになって、「いきなりだね!」とさすがに驚きを隠せない様子。

「こういうことはね、勢いも大事なんですよ。ほら、変に畏まった方が警戒されるかもしれないじゃないですか。うまく話の流れにのせた方が、ルリもつついっし頷いてしまうかもしれないでしょう。頷かせてしまえばこっちのものです」

「これこれ、クロヴィス。腹の中から黒い物が漏れ出しているよ。ちよつとは自重しなさい」

その後、「こういうことはムードが大切なんだよ。せめて二人っきりの時に言うとかだなあ」などなど、アルヴィースはルリのケーキを頬張りながら、懇々とクロヴィスに対して説教を始めたが、もちろん彼に堪えた様子はない。

それどころか伶俐な美貌には不敵な笑みを浮かべ、長い脚を悠然と組み替えては、優雅に紅茶に口を付けつつルリを見据えた。

???うんと、おっしやい

クロヴィスの目は、間違いなくそう脅していた。

と、その時??

「――いやだっ! そんなの、だめだよ……!!」

あまりのことに混乱し、パニックに陥りそうになったルリをはっ

とさせたのは、そんな甲高い子供の叫び声だった。

驚いて扉の方を振り返った彼女の視界に、先ほど玄関から走り去った小さな男の子――ロイズの姿が飛び込んできた。

「こら、ロイズ。扉を開ける前にはノックをなさい」

「クロヴィス様、ひどいよっ！ お嫁さまがいらしたら、もう僕とは遊んでくだらないんでしょっ！」

ただでさえ忙しくて、滅多に屋敷に戻らないクロヴィスが“お嫁さま”を迎えれば、ますますロイズに付き合ってくれる時間が減ると言いたいのだろう。

ロイズはよほど屋敷の主人に懐いているようだ。
そんな彼に、クロヴィスは大真面目に返した。

「そんなことないですよ。昼間ならお相手しますよ、昼間ならね」
「どうして夜は駄目なのとか突っ込みたくなる言い方を、五歳の子相手にしちゃだめだよ、クロヴィス」

「おや、これは失敬」

「ちよつとここにおいで、ロイズ。せっかくだから、君も一緒にお菓子をいただきなさい」

扉の脇で泣きそうな顔をしていた幼い少年は、アルヴィースに呼ばれて逡巡するように視線を泳がせる。

けれど、ルリと目が合うと、とたんにぎゅっと眉をしかめて彼女を睨み付けた。

「その人の作ったお菓子なんて、いらないっ……！！！」

ロイズはそう叫ぶと、再びくると振り返って駆け出して行ってしまった。

「あ??待って……っ!」

先ほどは見送ってしまったその背中を、しかしルリは今度は追いかけた。

天涯孤独になってしまった幼い彼に、同じ境遇の自分の幼い頃が重なったのだろうか。

ルリにはそれでも母が一緒だったが、あの年齢でその母さえも亡くしてしまったロイズがひどく哀れに感じた。

同情したいわけではない。

ただ、彼の寂しい背中を見たら、ルリは居ても立ってもいられなくなったのだ。

「放っておきなさい??って……ああ……行ってしまったね」

そんなルリをとめようとしたクロヴィスだったが、躊躇なく部屋を飛び出して行った彼女の耳に、彼の声は届かなかった。

「うむ、メモメモ。“一日目、クロヴィス一世一代のプロポーズをロイズの乱入により有耶無耶にされる”、と」

「ちよっと、何書いてるんですか。一体何のためですか」

「スミレに依頼されたんだよ。クロヴィスのうきうきおうちデートをつぶさに観察して、レポートにまとめて提出するようになってね」

「彼女のデバガメに加担してどうするんです」

「許せクロヴィス。爺は小悪魔に魂を売り渡してしまったんだよ」

「ちよっと、うまいこと言ったみたいない得意げな顔するの、やめてくださいます?」

クロヴィスは、人の不幸を楽しむ祖父をたしなめながら、ルリが消えたドアを眺めて頬杖をつき、深くため息を吐き出した。

瑠璃とケーキ5

「待ってっ！——ロイズ君、待って……！！！」

小さなロイズは、実にすばしっこかった。

ルリもちょっとは足の早さに自信があったのだが、今日は皇太后陛下にいただいた慣れないハイヒールの靴のせいで、思いっきり走ることができず、ついにロイズの姿を見失ってしまった。

気がつけば、ルリはいつの間にかリュネブルク家の裏庭にまで出てしまっていた。

途中、先ほど玄関で出迎えてくれたこの家の使用人達ともすれ違ったが、夢中でロイズを追いかけていたルリは、彼らに碌に挨拶もできていなかったことを今さら思い出して、自分の無作法に恥じる。

しかも、初めて訪れた屋敷で右も左も分からないというのに、ロイズの背中だけ見て走ってきてしまい、今自分がどこにいるのかさえも知らない。

辺りを見回しても、どうやら裏庭の深くまで入ってきてしまったらしく、人の気配がまったくしない。

屋敷の裏手には、リュネブルク公爵家所有の元鉱山がそびえ立ち、裏庭はその山と大きな屋敷に挟まれた状態で、陽の光があまり届かずいささか薄暗い場所だった。

日当りの加減で、やはりあまり植物の栽培には向かないらしく、表の庭の華やかな印象とはだいぶとかけ離れている。

それでも当代の宰相閣下の邸宅らしく手入れは行き届いていて、足元には芝生の代わりに平らな石が敷き詰められており、慣れない

高いヒールの靴を履いたルリの足元も安定し、歩きやすくなっていた。

とにかく、ロイズを見失ってしまった以上、ルリは元来た道に戻るしか仕方がないのであるが、踵を返そうとした彼女の視線は、その時ふとある建物を捉えた。

それは日当りの悪い裏庭にありながら、ただ一カ所だけ陽の光がさんさんと降り注ぐ場所であった。

どうやら山の傾斜の角度と、屋敷の屋根の形の関係で、この場所だけは晴れた日ならば一日中日が当たるようになっていらしい。それほど大きくない建物だが、四方を囲むのは透き通ったガラスの壁であり、中には所狭しと大きな葉や太い茎のダイナミックな植物達が茂っているのが見えた。

「……温室、かしら？」

王城の庭にも、かつて高名な庭師ロバート・ウルセルが作った立派な温室が存在し、中では温かい地方原産の鮮やかな花々が育てられていて、ルリの敬愛する皇太后陛下の目を樂しませていた。

初めてお邪魔した邸宅の温室に、断りもなく足を踏み入れるのは少々憚られたが、しかしルリは意を決して入り口の扉を潜った。

何故なら、閉まっていなければ意味のない温室の扉が全開になっている、しかも中にかすかに人の気配を感じたような気がしたのだ。

「……ロイズ君、いるの？」

豪快に生い茂った亜熱帯の植物の葉をかき分け、ルリは恐る恐る奥へと進んで行った。

今度は足元にも植物が茂り、油断しているとヒールが埋もれて転びそうになる。

真上から降り注ぐ太陽の光が温室の中を容赦なく温め、じっとり

と汗ばむほどになっていた。

その時――

「――わっ……」

ハンモックになりそうなほど大きな葉の向こうで、小さく驚いたような声が聞こえた。

「ロイズ君っ!？」

ルリは慌ててうんしょっとそれを持ち上げると、身を屈めて葉の下を潜り抜ける。

それは彼女の行く手を阻むように幾重にも重なっていて、ルリは必死に葉を掻き分けて進んだ。

すると目の前に現れたのは、今度は大きくぽっかりと地面に開いた穴であった。

「えっ?　――わっ……」

不自然に開いた怪しい穴に、ルリは思わずうっと驚いて身を引かけたが、先ほど避けた大きな葉が手を放した反動で戻ってきて、背中を押すようにしてルリを穴の際まで弾き飛ばした。

あわやもう少して穴に落ちそうというところで何とか踏みとどまり、ほっと胸を撫で下ろしたルリを、しかしさらにびっくりさせる展開が待ち受けていた。

なんと、目の前にできた穴から、突如何者がぬっと現れたのである。

「――きゃあっ!？」

ルリは思わず悲鳴を上げて後ろに仰け反り、細いヒールがバランスを崩して尻餅をついた。

そして、果然と目の前に現れた人物を見つめた。

その人物とは、高年の女性であった。

透けるようなプラチナブロンドの髪を無造作に後ろで一つに束ね、赤味の強いブラウンの瞳の周りには年齢を感じさせる皺をこしらえてはいるが、その容貌は非常に整っていることが窺える。

細身の身体を包むのは土に汚れたシンプルなシャツだったが、それでも彼女の美しさと上品さが損なわれることはない。

それほど、穴からよきっと上半身を生やした女性は、ただものではないオーラを醸し出していた。

彼女は、目の前で腰を抜かしたように地面に尻餅をついたルリを見つけると、にっこりと優雅に微笑んでみせた。

たとえ頬に盛大に土をくっ付けていようと、それはまるで女神のごとく美しく神々しい微笑みであり、穴から生えた女神はルリに向かって凜と響く声で問う。

「そこな娘」

「はっ……はいっ！」

「そなたが落としたのは、この美しい鉱物かい。それともこの珍しい化石かな？」

「あ、あの……」

彼女はそう言って、右手にガラスのように透き通った鉱物の塊、左手に何やらぐるぐる模様の石の塊を掲げて、ルリに向かって首を傾げてみせた。

相手の戸惑った様子を眺めると、彼女は次に一度穴の中にしゃがんだかと思ったら、今度は石よりもずっと大きなものを持ち上げてルリの前に差し出した。

「――それとも、この元気の有り余った小僧かしら？」

「ロっ……ロイズ君っ!？」

穴から半身を出した女性に襟首を摘まれて、ばつの悪そうな顔をしていたのは、ルリが必死で追いかけて探していた小さな男の子、ロイズであった。

「私が探しているのはその子です、女神様っ!」

「よろしい。そなたは正直者だね。褒美に、三つともあげよう」

そうして、ルリはロイズとともに、水晶の塊とアンモナイトの化石を手に入れた。

ロイズも闇雲に走って温室に飛び込んだまではないものの、穴が開いているとは知らずに中に落ちてしまったらしい。

彼は穴から出されると、差し出されたルリの手から逃れて再び走り出そうとしたが、彼女の脇を通り過ぎたとたん、びたんとかかに打つかって止まった。

「――こら、ロイズ。温室の中では遊んではいけないと言ったでしょう」

「クロヴィス様っ!!」

大きな葉達を掻き分けて、ルリが来たのとは別の方向から顔を覗かせたのは、この屋敷の主であるクロヴィスだった。

彼は足元にぶつかったロイズが後ろに倒れる前に支えてやると、その衣服についていた土をぱんぱんと叩いてやる。

泣く子も黙ると恐れられる宰相閣下だが、意外に面倒見がいいようだ。

ロイズはそんな主人を慕わしげに見上げたが、先ほどルリに対して吐いた暴言をやりわりと諫められると、とたんにまた拗ねたような顔になった。

「あつ、こら、ロイズ」

そして、小柄な身体で生い茂る葉っぱの隙間を素早くぐり抜けると、またもどこかへ走り去ってしまった。

「ああ、やれやれ。難しい年頃ですねえ……。大丈夫ですか、ルリ。立てます？」

「あ、はい……。申し訳ありません……」

クロヴィスは大きくため息をつくとき、地面に座り込んだままになっていたルリの側にやってきて、彼女助け起した。

そうして、先ほどロイズにしてやったのと同じように、ぱんぱんと衣服の土を払ってやる。

恐縮するルリに苦笑しつつ、彼女の隣に並んで穴の方に向き直ったクロヴィスは、今度はその中からいまだ上半身を生やしている女性に声を掛けた。

「ハニーさんも。こんなところに穴を開けられては困ります」

「ああ、すまないねえ。本当なら、温室の裏に出るはずだったんだけど、どこかで計算を間違えたようだ」

クロヴィスに“ハニーさん”と呼ばれた女性は、彼に向かって快活な笑みを浮かべると、「うんしょ」とようやく穴から上がってきた。

下半身はだぼつとしたパンツ姿で、その裾は厳ついハーフブーツの中に突っ込まれていて、もちろん泥に塗れてはいたが、ルリの印

象は“何だかワイルドで素敵な女神様”として固まった。

その時、クロヴィスとルリの背後の茂みが、ガサガサと大きな音を立てた。

驚いて振り返ったルリの目の前で、大きく育った葉が激しく揺れたと思ったら、その間から何かが飛び出して来た。

「ハニー！ 帰っていたのかいっ！」

「ああ、ただいまアル。今帰ったよ」

満面の笑みを浮かべて両手を広げ、喜び勇んで駆け寄ってきたのはクロヴィスの祖父アルヴィースだった。

彼は、土に塗れた女性をひしと抱き締め、その頬に音を立ててキスをした。

その仲睦まじい姿に、このハニーと呼ばれた女性はアルヴィースの恋人で、二人を眺めるクロヴィスの様子からして家族にも認められた仲なのだろうとルリは思った。

「ハニーさん……女神様は、ハニー様とおっしゃるのですか？」

ところが、隣に佇むクロヴィスを見上げてそう尋ねたルリに対し、彼はふふと笑って思ってもみない答えを返して来た。

「女神って何ですか？ あの方……ハニマリア様は、前リユネブルク公爵夫人——つまり、私の祖母です」

「——ええええ！——っ！！？」

ハニマリア・オル・リユネブルク。

グラディアトリアの現宰相クロヴィスと、先帝ヴィオラントの生母マジエンタを生んだ女性であり、ヴィオラントが現在名乗っている旧公爵家レイスウェイク出身の女性である。

ここ数十年、一度も社交界に顔を出したことの無い彼女は、いつの間にかその存在を忘れ去られ、すでに亡くなったと噂されるほどの人物だった。

なんと言っても、少し前に国中を巻き込んで盛大に祝われた、孫であるヴィオラントとスマイレの結婚式にすら出席していなかったのだ。

ごっ、ご存命だったのですか……！？ と、ルリは思わず心の声を盛大に吐き出してしまった。

それを聞いたハニマリアは、

「はいはい。生きてましたとも」

と言って、豪快に笑った。

瑠璃とケーキ6

ハニーさんこと、ハニマリア・オル・リュネブルクは、貴婦人としてはいへん規格から外れた人物であった。

そもそも彼女の祖父の代には、すでにレイスウェイク家は公爵の位を皇帝陛下に返上していた。

その理由は今ではもう定かではないが、かの家は特に容姿に秀でた一族であって、当時の当主に時の皇帝の寵姫が惚れて不興を買ったとか、レイスウェイク家の娘に皇族のだれそれが誑かされただとか、説はいろいろ言われている。

とにかく、そうして国政の中央に居場所をなくした一族は、様々な事業へと手を伸ばして生計を立てることになる。

その一つが、鉱山の開発であった。

不慮の事故で亡くなった父から、一人娘だったハニマリアが鉱山の発掘事業を引き継いだのは、彼女がまだうら若き乙女だった頃だ。

そして縁あって、リュネブルク公爵家の背後に聳える鉱山の発掘を、彼女の会社が請け負った。

その関係で懇意になった若き頃のアルヴィースとハニマリアは、身分の差を溢れる愛でもって飛び越えて、夫婦となった。

しかしながら、公爵夫人となってもハニマリアは家業を続け国中の現場を飛び回り、結果アルヴィースとともに優雅な社交界に出席する機会もなかなか恵まれなかった。

それでも、二人の愛が冷めることはなく、マジエンタという絶世の美女を世に送り出し、彼女が生んだ孫二人は祖国を繁栄と平和へと導いたのだから、彼らの功績はある意味輝かしい。

「それで？　今さら裏山を掘り返して、何をしようというのです？」

「ああ、ちょっと探し物をね」

温室を出た一行は、最初にお茶をしていた応接室に戻り、新しい紅茶を入れ直して改めてルリの金柑ケーキを堪能していた。

泥まみれだったハニマリアも軽く湯を浴びて、今はシンプルながらも上品なドレスに着替えて、見事な貴婦人へと変身していた。

そんな彼女もルリのケーキを絶賛し、ぱくぱくと遠慮なく食べた。

「あの坑道は古いからいつ崩落するかも知れない。危ないからもう入っちゃだめだよ、ハニー」

「そうだね、探し物も見つかったし、あそこは閉鎖して埋めた方がいいかもしれない」

リネブルク家所有の鉱山では、過去には石英やその他の鉱物が出たらしいが、その含有量はそれほど多くはなく、もう数十年前前に発掘は中止されたきりだ。

そのままになっていた坑道を辿ったハニマリアは、今回その老朽化の激しさも確認してきたらしい。

中にいる時に崩れれば当然命に関わるので、心配そうな顔をしたアルヴィースを安心させるように、彼女はもう入らないと約束した。

「ハニーさん、探し物とは？」

「ほら、これだよ。ラピスラズリ」

「ラピスラズリ？」

孫であるクロヴィスの問いかけに、ハニマリアはおもむろに胸元に手をつっ込んだかと思うと、青い石の塊を取り出した。

そういう行動に見覚えがあると思ったクロヴィスとルリは、直後「ああ……」と同時に合点がいった。

先帝ヴィオラントの愛妻——スミレのそれだ。

思わず苦笑する若い二人に気づかぬまま、取り出した石をテーブルの上に転がしたハニマリアは、そこに少々行儀悪く肘をつく、ふうっとため息をついた。

「実は先日から、レイスウェイク家の脇の地層を掘ってただけだね」

「兄上、嫌がりませんでしたか？」

「スマレを味方に付けて、強引に口約を取り付けてやった。あのちびっこい娘のおかげで、ヴィオラントが御しやすくなってありがたい」

「……」

にやっと淑女にあるまじき笑いを浮かべた祖母から、クロヴィスは黙って目を逸らした。

「ところが、門の外を目指して掘っていた穴が、間違えてレイスウェイクの屋敷の庭に出てしまってたね。その穴に運悪くスマレが落ちて足を挫いたもんだから、ヴィオラントにめっちゃ怒られたよ」
「当たり前じゃないですか。スマレは兄上の宝物ですからね」

元々の無表情の上に、さらに氷を張ったような冷たい冷たい怒りを乗せた上の孫の顔を思い出し、ハニマリアは「おう、こわっ」と身震いした。

そんな彼女に、クロヴィスは呆れたようにため息をつき、ルリとアルヴィースはスマレの怪我を気遣った。

「スマレなら大丈夫だよ。本当に軽く足首を捻っただけなんだ。本人もさほど痛がってはいなかった」

「それは、よかった」

「でも、寝室に監禁されている」

「……軟禁でしょう？」

「いいや、監禁だね。ベッドにはりつけだからね」

ヴィオラントのスミレへの過保護っぷりには、いつものことながら驚かされる。

だがクロヴィスには、おかげで合点がいったことがひとつだけあった。

あれほど堂々とデバガメを宣言していた義姉が、いまだ姿を現さない理由――

「なるほど、兄上に監禁されてるから来れなかったんですね」

「なるほど、だから私に観察レポートを命じる手紙が来たのか」

リュネブルク公爵家の男二人は、揃ってうんうんと納得した。

「スミレには可哀想なことをしてしまったからね。お詫びに何か欲しいものがないかと聞いたら、あの子ったらラピスラズリが出てきたらくれて言うんだ」

「なぜ、ラピスラズリ？」

「なんでも、クロヴィスに磨かせて宝石にするとか」

「……なぜ、私が名指しされるんでしょうか？」

「ラピスラズリはルリだからって……、それを名に持つ女の子にプレゼントさせたいとか、何とか」

それを聞いて、クロヴィスははたとあることを思い出した。

「ああ、なるほど。聞いたことがありますね……スミレの国にはルリという名の宝石があると。それが、こちらでいうラピスラズリということですか」

ラピスラズリは青い色の鉱物で、その和名を瑠璃という。

いつぞや、スミレはルリに対してもその宝石の話をし、綺麗な青い瞳だと言って褒めてくれた。

可愛らしい大公爵夫人が、自分のことをそんなに気にかけてくれていたと知って、ルリはじんと胸が熱くなった。

「昔、水晶と一緒にラピスラズリも裏の山で採れたことを思い出してね。見つけたから、スミレの希望通りそなたにやるよ、クロヴィス」

「はあ、ではありがたく頂戴します」

「――それで、この娘がそのルリちゃんかい？」

クロヴィスに掘り出したばかりの鉱物を手渡すと、ハニマリアは小首を傾げるようにして、ルリに視線を向けた。

その言葉で、またしても自己紹介を忘れていたルリは、「し、失礼しましたっ！」と叫んで椅子から立ち上がり、彼女に向かい合った。

「ご挨拶が遅れて申し訳ありません。――ルリと申します。お会い出来て光栄です、奥様」

するとハニマリアは「ルリ……」と彼女の名前を口の中で転がしたと思ったら、美しい顔をいっばいの笑顔の変えて言った。

「可愛い名前だね、ルリ。よろしく」

差し出された手は、淑女のそれにしては節くれ立って荒れてはいたがとても温かく、ルリの手をそれはそれは優しく握った。

温かいリユネブルク家の人々は、己の身の丈に合わせぬ招待だと緊張を募らせていたルリを、ただ優しく穏やかに包み込んで解してく

れた。

そして、宰相として皇帝陛下とともに大国を背負うクロヴィスを、彼らがとても慈しみ愛していることが伝わってきて、ルリは何だかほっとした。

ルリが作った金柑のケーキは好評で、残すはあと一切れとなった。ルリにはそれを食べてもらい人がもう一人いて、その願いを口にすべきか迷っていたが、勇気を出して隣で紅茶のカップを傾けるクロヴィスに声をかけてみた。

「あのっ、クロヴィス様」

「はい、何でしょう？」

「あの……このケーキなんですけど……」

「はい」

クロヴィスに対する緊張がまだ拭いきれず、どうしてもしどろもどろになるルリの話を、彼は急かすことなく聞いてくれる。

これがもしも部下や弟皇帝相手なら、「さっさと用件をいいなさい。こっちは暇ではないんですよ」と冷たく一喝されているとも知らず、ルリは彼をなんて穏やかで聞き上手な方なんだろうと思った。

「ロイズ君にも……食べてもらえるでしょうか？」

「……ルリは優しい子ですね。ロイズは随分あなたに失礼をしたでしょうに」

「いいえ、失礼だなんて。……とても、クロヴィス様に懐いているのですね」

「ああ、本当に珍しいというか、物好きな子ですよ、ロイズは。元来子供に好かれるタイプじゃないんですがね、私は」

「あんな小さい子でも、クロヴィス様が大変なお仕事をなさっていると、ちゃんと分かっているのではないでしょう。きっと、とて

も尊敬しているのです、クロヴィス様のこと」

ルリが「私もとても尊敬しています」と、打算の欠片もない純真な笑顔を浮かべて告げると、クロヴィスは一瞬眩しそうに目を細めた。

そして、紅茶のカップをテーブルに戻したかと思うと、空いた手をさっと傍らのルリの肩に回して抱き寄せ、

「え……?」

彼を見上げた無防備な唇にキスをした。

ちゅっと一回、優しく触れるだけのキスを。

「~~~~~っ……!!?」

「おいおい、クロヴィス。爺と婆の前で何するの」

「私たち、席を外そうか?」

とたんぽんっと顔を真っ赤に染めたルリと、ニヤニヤ笑いながら眺めるハニマリア、こそこそ耳打ちしに来たアルヴィースに苦笑し、クロヴィスはルリの肩を抱いたまま告げた。

「いや、失礼。あまりに可愛らしかったものだから、つい。——と
ころで、この部屋にもう一人小さな客人をお迎えしましょうか」

クロヴィスはそう言うのと、長い脚を一度組み直してから、扉の方に視線をやった。

「そこにいるのでしょうか。入ってきなさい」

彼の言葉を間近で聞いて、えっと顔を上げて扉を向いたルリの視

線の先で、かちやりと音がして取手が静かに動いた。

そして、おずおずと扉が開かれて、その隙間から顔を出したのは、眉を八の字にしゅんと大人しくなったロイズだった。

部屋の中に入ったロイズはそっと扉を閉めると、意を決したようにソファに座る主人の側までやってきた。

そんな少年を見下ろすクロヴィスの瞳は、宰相執務室にいる時には想像出来ないほど、穏やかであった。

「君は賢い子だ。少し頭を冷やしたら、自分の言動を後悔してやって来ると信じていましたよ」

「……ごめんなさい、クロヴィス様……」

「それを言うのは、私にはないでしょう？」

そう優しく諭されて、ロイズは一瞬くつと唇を噛み締めると、恐る恐るといった風に上目遣いでルリの方を見て、いくらかの逡巡の末に小さく弱々しい声で「……ごめんなさい」と言った。

初対面で散々失礼なことをしてしまった自分に、彼女が怒っているのではないかと不安なのだろう。

それがひしひしと伝わってきて、もちろん少しも彼に腹など立てていないルリは、にっこりと笑ってロイズの小さな手を取って、握手をするように軽く握った。

「いいのよ。それより、お話できて嬉しいわ。私は、ルリっていうの」

「ルリ……さま？」

「いいえ、違うわ。ただの“ルリ”よ、ロイズ君」

「……じゃあ、僕もただの“ロイズ”だよ」

「ええ、ロイズ。仲良くしてくださいね」

ふっくらと子供らしい頬を赤らめて、ロイズがいとけない仕草で

こつくりと頷くと、ルリはそれはそれは嬉しそうな顔をした。

そんな小さな少年と純真な少女の微笑ましいやりとりを、クロヴィスとその祖父母は優しい目をして見守っていた。

その後、金柑ケーキ最後の一切れをご相伴あずかることになったロイズは、大きなソファに並んでいたルリとクロヴィスの間にちょこんと座らされた。

そんな三人が並んだ姿を向かいから眺めた前リュネブルク公爵夫妻は、ふふと微笑み合ってこう言った。

「そうしてると、そなた達は親子のようだな」

それに、ぴくりと秀麗な眉を動かしたのは、二杯目の紅茶に口を付けていたクロヴィスだった。

話が弾んでいてよく聞いていなかったルリとロイズは、揃ってきょとんと首を傾げた。

そんな傍らの二人に、泣く子も黙る宰相閣下は爽やかな笑み??弟皇帝に言わせれば逆に薄ら寒くなる??を浮かべて向き直った。

「いいですね、それ。ロイズ、ルリのことはママと呼びなさい」

「え?」

「私のことは、パパと呼びなさい」

「……」

それを聞いたルリとロイズは、ぎょっとしてお互いの顔を見合わせたが、リュネブルク家の当主はいつになく上機嫌で紅茶のカップを空にした。

瑠璃とケーキ7

ルリは急遽、リュネブルク家の厨房にお邪魔することになった。それは、かの家の先代当主の奥方ハニーさんことハニマリアのたっての願いによる。

「ヴィオラントの機嫌を直すには、あのちびっこい奥方を喜ばせるのが一番だからね」

思わぬ落とし穴を掘ってしまつて土地主の怒りを買つたハニマリアは、一時発掘を中断せざるを得なくなつていた。

元々は手付かずだった国有地を、十六年前に隣国から移り住んだロバート・ウルセルという男が開拓し、二年と少し前にハニマリアの孫が譲り受けたレイスウェイク家の領地には、お宝の気配がブンブンする。

グラディアトリア自体は元来資源の少ない国なので、鉱物の産出にはそれほど期待はしないが、太古の昔の珍しい化石やは埋っているかもしれないのだ。

発掘を再開するには、愛妻を怪我させられてヘソを曲げてしまつた土地主——レイスウェイク大公爵ヴィオラントの許しが必要。

そのためにハニマリアは、彼が目に入れても痛くないほど溺愛している少女に、貢ぎ物をするにしたのである。

ヴィオラントの機嫌を左右するのは、ただ一人の奥方スミレだけ。そうして、お菓子作りが評判のルリに、白羽の矢が立ったのだつた。

「どうしてハニーさんの尻拭いをルリがしなきゃいけないんですか。

ご自分でなんとかなさってくださいよ。そもそも、せっかく彼女を屋敷に招待したというのに、少しは遠慮してやろうとは思わないんですか？」

せっかく休日を捻出して、ルリとゆつくりするために家に連れてきたクロヴィスは、少しも二人つきりになれない状況に大いに不満げだ。

そんな彼の耳に、ニヤっと不敵な笑みを浮かべたハニマリアはこっそり耳打ちした。

「急いては事を仕損じるよ、坊や」

「……坊やは、やめてください」

「厨房というのは家にとって懐の中と同じ。そこに迎えられることの意味を、まだあのお嬢さんは気づいていないようだけどね。女主人となればいずれ取り仕切ることになる場所に、馴染みをもたせておくのもいいではないか？」

「……」

ハニマリアはそう言うと、かすかに口端を引き上げた孫の背中をポンポンと叩き、何食わぬ顔でルリを厨房へと急き立てた。

もちろん、慎ましい性格のルリは、よそ様の厨房に図々しく足を踏み入れることを躊躇したが、先ほどの出迎えにも参加していた料理人達は、諸手を挙げて彼女を歓迎した。

それに恐縮しながらもお邪魔したルリの目に、まず飛び込んできたのが赤く艶やかなリンゴの山だった。

リンゴはお菓子にも料理にも使えるが、それにしても用意されている量が半端ない。彼女の視線でそれに気づいたらしいハニマリアが、苦笑しながら疑問に答えてやった。

「うちの庭にね、大きなリンゴの木が一本あるんだよ。この時期に

なると一度にたくさん実を付けて、処分に困るほど」

「まあ……」

それを聞いたルリは、せっかくなのでそのリンゴを使ったお菓子を
作ることにした。

サクサクしたクッキーの部分と、しっとりとしたスフレの部分の
二層が組み合わさったリングケーキだ。

まずは、小麦粉・バター・砂糖に卵黄塩少々を混ぜ合わせ、クッ
キー生地を用意する。

それを一時間ほど冷たくして寝かせている間に、レモン汁と水の
中に四分の一の大きさに切ったリンゴを漬込む。

型にクッキー生地を均一に敷き詰めた上に、水気をよく切ったリ
ンゴをなるべく隙間なく並べ、その上にラム酒を含ませたレーズン
をのせた状態で一度オーブンで焼く。

その合間に今度はスフレ生地を用意。卵白は念入りに混ぜてふん
わりメレンゲにし、砂糖・卵黄・レモン汁を混ぜた中に加える。そ
れを焼き上がったクッキーとリングの上に流し込み、中の空気を抜
いてから再びオーブンで焼いて出来上がりである。

二度焼くことでクッキー部分はよりサクサクに仕上がりに、サクサ
クとしつとりの二つの食感が楽しめる美味しいケーキになった。

手際よく作るルリを観察してたりユネブルク家の料理長は、こり
ゃあ、わしもうかうかしてはいられませんなあ、と感心している様
子。ルリが、お菓子作りは亡き母に習ったことを話すと、白髪混じ
りの料理長は、それは何より素敵な形見をいただいたねと言って、
優しい顔をして笑った。

ルリが厨房に籠っている間、クロヴィスは約束通りロイズを自室
に招いてチェスを教えてやった。

ロイズの母はリュネブルク家で出産したので、クロヴィスも赤子
の頃から彼を知っていて、使用人の子とはいえもはや身内も同然だ。

排他的な雰囲気を持つ宰相閣下も、そんな子供を随分と可愛がっている。

ロイズは幼いながら賢く、頭の回転が早い。それを早くから見抜いていたクロヴィスとアルヴィースは、母を亡くして身寄りのなくなった彼を屋敷に住まわせる傍ら、貴族の子女にも匹敵する教育を受けさせるつもりである。

グラディアアトリアの王宮は広く一般にも門戸を開き、身分に関わらず才能のある者を迎え入れている。

だから、ロイズも勤勉に成長すれば将来城で職を得ることも可能であるし、宰相であるクロヴィスの執務室で働くことも夢ではないだろう。

小さくふっくらとした子供の手には、チェスの駒は随分と厳つく見える。

それを握りしめて真剣な目で盤を睨みつけるロイズの姿を、クロヴィスは紅茶を飲みながら満足げに眺めていた。

そうこうしていると、扉をノックする音が聞こえ、返事を待たずにそれを開いて部屋の中にならずかと入ってきたのは、ハニマリアだった。

いつの間にか訪問着に着替えており、さらにその後ろから同じく訪問着を身に着けたアルヴィースが続いた。

「おや、ハニーさんにおじいさま、揃ってお出かけですか？」

「ルリに焼いてもらったケーキを、さっさと届けてくる。ヴィオラントがまだカンカンだと恐ろしいから、アルを連れていくよ」

「爺はハニーの盾になってくるよ。無事帰れることを祈ってくれ」

ハニマリアの片手には、確かにケーキの箱が掲げられていて、ほんのり甘いいい匂いが漏れ出していた。

「はあ、健闘を祈りますよ」

クロヴィスの祖父母は見送りはいらないと言い置くと、仲良く腕を組んで出掛けて行った。

そんな彼らと入れ替わりに、ルリが部屋に戻ってきた。

「ご苦労様、ルリ。面倒をかけてすみませんね」

「いいえ、クロヴィス様。お役に立てて嬉しいです。それに、厨房の方達ともたくさん意見交換できました」

「そうですか、それはよかった」

ハニマリアの計画通り、ルリは女主人の縄張りたる厨房に見事に馴染んだようだ。

それを知ったクロヴィスは、秘かにほくそ笑む。

ロイズはまだ盤を眺めてうんうん唸っていた。

それを微笑ましく覗き込んだルリのために、クロヴィスは椅子を引いてやりポットに手を伸ばす。

ようやく彼にお茶を入れてもらうことに慣れてきたルリは、背後からスマートな仕草でテーブルに置かれたカップに礼を言い、早速香しいそれに口を付けた。

ところが、カップを置いてすぐに席に戻るものと思われたクロヴィスの気配が、何故かルリの背後から離れない。

不思議に思ったルリが後ろを振り仰ぐと同時に、なんと秀麗な顔が彼女の上に降ってきた。

「クッ、クロヴィス様っ？」

「……」

麗しき宰相閣下の高い鼻が、ちょうど振り返ったルリの前髪の生え際辺りに埋まる。

びくりと震える彼女をよそに、クロヴィスはすうっと肺一杯に息

を吸い込んだかと思うと、いやに色っぽいため息をついた。今日は下ろしているルリの栗色の髪が、その吐息でさらりと揺れる。

「甘い匂いがしますね、ルリ」

「えっと、あの……ケーキを焼いていたからでしょうか……」

「……実に美味しそうだ」

「——っ……!？」

クロヴィスはそのまま柔らかな髪に口付けるようにして、ルリの耳に囁いた。

とたん、ぱっと頬を赤らめたルリが身を引こうとしたが、それより早く動いた彼の腕がさっと背中に回り逃がさない。

「ああ、参りましたね……食べてしまいたい」

「ク、ク、クロヴィス様っ……!？」

突然のスキンシップ——クロヴィスのちっちゃな義姉に言わせれば立派なセクハラに、ルリはとにかくどぎまぎし、椅子に座ったままの彼女を腰を屈めて抱き寄せたクロヴィスは、さらさらの栗毛に尚も顔を押し付けた。

ロイズは、まだ彼らの向かいの椅子に座ってチェスの駒を握りしめている。

ルリは思わず彼に助けを求めて縋るような視線を送ったが、ロイズはちらっと一瞬二人を見るも、すぐに視線を逸らしてしまってノーコメント。

それに愕然としたルリに「ふふふ」と笑うと、クロヴィスは再び彼女の耳に囁いた。

「ロイズは本当に賢い。うちの弟なんかよりも、よっぽど空気が読めますね」

いつぞや、いい雰囲気になっていたところを弟皇帝に邪魔されたクロヴィスは、まだ根に持っていたらしい。

そんな彼につむじやこめかみにキスを落とされながら、先ほど自らがケーキに入れたリンゴのように真っ赤な顔をしたルリは、必死にその腕の中でもがく。

クロヴィスにそうされるのが嫌なわけでは決していないが、とにかく恥ずかしいのだ。

「ねえ、ルリ。……食べてしまってもいいですか？」

「あっ、あのっ、ケーキでしたら同じのをもう一つ作りました！料理長さんが、夕食のあとのデザートにしてくださいさるとっ！」

「ああ、それは楽しみだ。――夜になったらただけなんですネ、ルリ？」

「はっ、はい……！？」

それはケーキの話をしているようでありながら、何だか本能的に身の危険を感じたルリは、ぶるりと身震いした。

それに返ったクロヴィスの笑みは、実に艶やかであった。

瑠璃とケーキ8

その日は結局、夕食の時間になっても先代当主夫妻は帰って来なかった。

その代わりにやってきた、レイスウェイク家の伝令から手紙を受け取ったクロヴィスは、約束通りルリが作ったリングケーキを夕食後に啄んでいた。

しっとりとしたスフレ生地と、サクサクとした齒ざわりのクッキー生地の上に焼いたリングが挟まって、様々な食感は実に楽しい。間に散らしたレーズンが含んだ、ラム酒の風味も絶妙である。

「うん、これもまた美味しい。見事ルリのケーキは賄賂の役目を果たしたようですよ。二人は今夜はレイスウェイク家に泊まるそうです」
「スマイレ様に喜んでいただけましたでしょうか」

「スマイレもルリの作るものが好きですからね。そりゃあ、喜んでいてでしょうよ。彼女の笑顔を見せられては、兄上だっていつまでも不機嫌ではいられません」

「スマイレ様、寝室から解放されますか？」

「ああ、それはまた別の話ですね。捻った足が治るまで、監禁は続くでしょう」

「そんな……」

「大丈夫。ルリが心配しなくても、甘い甘い監禁生活ですよ、きっと」

「……」

「おや、頬が赤くなった。想像しました？」

クロヴィスと関わるようになって以来、レイスウェイク大公爵と

その奥方とも顔を合わせる機会が増えたルリは、周囲を憚らぬ彼らのいちゃいちゃっぷりにあてられることもしばしばだった。

特に、ヴィオラントの過保護と溺愛の凄まじさには、時には啞然とするほどだ。

子供の頃のルリの印象では恐ろしいばかりだった先帝陛下は、実に愛情深くて情熱的な方だった。

そして、奥方の方は、女のルリでも思わず抱き寄せて頬擦りしたくなるほど愛らしい。

そんな二人の甘い監禁生活なるものをついつい想像してしまい、それを指摘されて恥ずかしさも倍増だ。

さらに、その後に続いたクロヴィスの言葉に、ルリの胸はドキリとする。

「私も、あなたを閉じ込めてしまいたいもんです」

それは冗談めかした軽い口調でありながら、瞳はひどく真剣で、ルリは思わず呼吸も忘れてそれを凝視した。

気がつけば給仕係も下がって、食堂にはクロヴィスとルリの二人っきりになっていた。

ルリの鼓動は一気にリズムを早め、えも言われぬ緊張が彼女を覆う。

逸らすこともできず、瞬きさえ忘れた瑠璃色の瞳の奥を覗き込むように、クロヴィスはレンズの向こうで瞳を眇めて言った。

「この後、執事があなたを客室に案内します。部屋には浴室も……ベッドもあります」

「クロヴィス様……?」

「でも、あなたが今夜眠るのはそのベッドではありません。――私のベッドです」

「……っ!？」

もちろん「はい分かりました」と答えられるはずもないルリが絶句すると、クロヴィスはケーキの最後の一欠片をパクリと口に放り込み、優雅に紅茶を飲み干して立ち上がった。

そして、まだ何とも返事を用意できないルリに向かってにっこりと微笑むと、容赦なく宣言をした。

「あなたから来るもよし。来なければ、迎えに行きますから」
「――！！」

つまり、どちらにしろ、ルリが今夜クロヴィスの部屋で眠るのはすでに決定事項だと言うのだ。

ぴきりと固まったルリに笑みを深めると、「ではまた後ほど」と言い置いて、彼はさっさと食堂から出て行ってしまった。

その後、クロヴィスの言う通りリュネブルク家の白髪の執事がルリを客室に案内し、彼女はたぶんそのまま浴室に直行して張られていた湯で温まったのだろうが、ずっと上の空だったルリの記憶は定かではない。

皇太后陛下の侍女として、王宮内に与えられたルリの個室もなかなかの広さだが、今をときめくりユネブルク公爵邸の客室ともなれば、その広さと豪華さは到底比べ物にもならない。

広過ぎる客室にたった一人でそわそわと落ち着かないルリは、いつの間にか運び込まれていた自分の荷物を開き、中から出てきた姉侍女達からの餞別を手にとって、少しだけほっと息を吐いた。

けれど、レイスウェイク大公爵夫人からの贈り物――スケスケのベビードールが飛び出してくると、今夜それを自分のために着てくれるのかと言ったクロヴィスの甘く艶っぽい声を思い出し、ルリは再び鼓動を乱れさせた。

用意されていたポットからお茶を注ぎ、それを飲んで自分を落着かせようとしていたところに、トントンと部屋の扉をノックする音が響き、彼女はビクリと飛び上がった。

部屋に來ないなら迎えに行くといったクロヴィスが、もう業を煮やしてやってきてしまったのかと思い、ルリは一体自分はどうすればいいのか分からずあたふたと慌てた。

ところが、扉の向こうから控えめにかかった声は、この屋敷の主のものではなかった。

それに気づいたルリは慌てて扉に駆け寄り、それを開いた。

「まあ、ロイズ」

扉の向こうに立っていたのは、ロイズだった。

彼も湯を浴びてきたのか、子供らしいまあるい頬は薔薇色で、実に可愛らしい。

裸までのすとした夜着をまとい、両手に枕を抱えていた。

ルリがしゃがんで目線を合わせ「どうしたの？」と優しく尋ねると、彼はもじもじと少し恥ずかしそうにしながら「ルリと一緒に寝てもいい？」と聞いてきた。

「もちろんよ——あ、そうだ！」

そんな可愛いお願いに、即座に頷いたルリだったが、そこで彼女の脳裏にぱっと名案が閃いた。

ルリは「ちょっと待ってて」と言い置くと、客室に据えられたベッドからあるものを抱えて戻ってきた。

そして、不思議そうに首を傾げたロイズの手を取ると、にっこりと微笑んで言った。

「クロヴィス様も、お誘いしましょう」

そうして仲良く手を繋いで、それぞれ枕を抱えて部屋を訪ねてきたルリとロイズの、母子というより姉弟のような無邪気な顔を見て、扉を開けたクロヴィスは思わず顔を片手で覆って呻いた。

「……この展開は……予想していませんでした」

ロイズは、二人の間のクッションである。

ルリにとっては心強く、クロヴィスにとっては厄介だが邪険にはしたくない、そんな状況。

母親を亡くした幼いロイズが、ずっと悲しみや寂しさを我慢していたことを知っているクロヴィスには、ルリに心を開いて甘えを見せ始めた子供の姿は微笑ましく、彼だけを部屋から追い出すことなどできなかった。

それとともに、せっかく近づいてきたルリも離したくない。

結局、クロヴィスは二人を部屋の中に招き入れ、今夜は三人仲良く川の字になって寝ることになった。

緊張しつつも、ロイズというクッション、もとい抱き枕を得て、早々と眠りに就いたルリは意外に剛胆なのかもしれない。少なくとも、枕が変わると眠れないなんていう、繊細で面倒くさい人種ではないらしい。

あれだけクロヴィスに迫られてどぎまぎしておきながら、ロイズという第三者の存在があるとはいえ、こんなに容易く男のベッドで熟睡してしまうなんて、危機感が乏しすぎるのではないかと説教したくなる。

クロヴィスは三人寝転がっても余裕の広さのベッドの端で、ひとり悶々とした想いを抱えていたが、そんな彼に暗闇の中からかかったのは、幼い子供の声だった。

「……クロヴィス様」

「おやロイズ、まだ起きていたのですか？」

「あのね、僕、クロヴィス様がオオカミにならないように見張らなきゃいけないの」

「……は？」

思わず目を点にしたクロヴィスに対し、幼いロイズの顔は真剣そのものだ。

「ハニー様がね、昼間はクロヴィス様とルリが仲良くしてたら邪魔しちゃいけないって。でも、クロヴィス様は夜になるとオオカミになって、そうしたらルリを一口で食べてしまうから気をつけてって」

「……オオカミ、ね」

「知らないうちにオオカミになって、ルリを食べてしまったら、クロヴィス様悲しいでしょう？ だから、僕、今夜はずっと起きて見張るから、大丈夫だよ」

「……」

五歳の子供に何を言うのだ、あのばーさんは……と呆れつつ、クロヴィスは大きくため息をついた。

いろいろなものを、潔く諦めるために。

そして、閉じそうになる目を必死で開こうとしているロイズの頭を撫でてやった。

「ありがとう、ロイズはなんて頼りになるナイトだろう。大丈夫、君が隣にいてくれれば、私は今夜は狼にならないで済むでしょう」

「……ほんとうに？」

「ええ」

「……ほんとうに、クロヴィス様ルリを食べてしまわない？」

「本当です、約束します。ですから、もう寝なさい」

「……おやすみなさい、クロヴィス様」

「おやすみ、ロイズ。よい夢を」

クロヴィスの言葉に安心したように顔を綻ばせたロイズは、次の瞬間すっと眠りに落ちてしまった。

よほど眠いのを我慢していたのだろう。

ロイズがすっかり寝込んだら、こっそりルリを起して大人の時間を楽しもうかと企んでいたクロヴィスは、またやれやれとため息を吐いてごろんと仰向けに寝そべった。

彼の耳をかすかに打つのは、規則正しく穏やかな寝息の二重奏。

「……まったく、不本意な約束をしてしまったものだ」

クロヴィスはそう苦笑いを浮かべながらも、ロイズの髪をもう一度撫で、さらにその手をそっと伸ばして、彼の向こうで安らかな寝顔を見せるルリの髪を優しく撫でた。

そうして、彼もようやく瞳を閉じたのだった。

瑠璃とケーキ9

侍女の朝は早い。

日が昇り切る前に起き出して、部屋の掃除やら朝の支度の用意やら、主人が目覚める前にしなければならぬ仕事がたくさんある。

ルリの担当は、まず庭園に下りて皇太后陛下の朝の食卓を飾る花を摘むことだ。

稀代の庭師ロバート・ウルセルの後を継いで王城の広い庭を統括するのは、ルリの母と同年代の穏やかな女性だ。

彼女に会うと、いつもルリは母のことが少し恋しくなる。

母は皇太后陛下の厚意により侍女に復帰してからは、昼間はいつも気丈に明るく振る舞おうとしていたが、ベッドの中ではルリが眠った後によく涙を零していたのを知っている。

母は決まってルリと同じベッドで、彼女を抱き締めて眠った。

母の温もりは、ルリの中では温かさとともに悲しみの記憶となっていた。

――そしてまた、この朝もルリを人の温もりが包み込む。

けれど、ルリを抱き締める腕は母のそれよりもずっと逞しく、伝わる鼓動はずっと力強くて緩やか。

ルリは微睡みの中でそれを不思議に思いながらも、もぞりと身動きすれば大きな掌が優しく頭を撫でてくれて、とてもとても心地よい。

羽根のように柔らかな仕草で前髪がそつとどかされて、温かく柔らかなものが額に瞼にと降ってくる。

そうして、ルリの伏せられた睫毛を、ふうっと深いため息が揺らした。

それがどうにも切なく聞こえ、ルリは母がまた泣いてしまうので

はないかと思ってしまう。

「……おかあさま……っ」

——ルリはもう起きています。どうか泣かないで。笑って下さい

そう訴えたくて、まだ充分に覚醒し切れない意識の中から必死に彼女を呼んだ。

ところが……

「すまないね、ルリ。お母上の代わりはしてあげられそうにありません」

答えた声は、母とは似ても似つかぬ低く艶やかな男のもの。

はっと見開かれたルリの目に飛び込んできたのは、端正な顔にはまった空色の瞳、そして金色の髪。

なんとルリは、ベッドの本来の主であるリュネブルク公爵の腕の中にすっぽりと抱き込まれ、ぴたりと密着した形で横たわっていたのだ。

目と鼻の先では夜着がしどけなく開け、その隙間から意外にがっしりと筋肉質な宰相閣下の胸板がちらり。

インドアの印象が強いクロヴィスだが、実は幼い頃から兄ヴィオラントとともに鍛錬に励み、引き締まった肉体を持っている。そのギャップが、彼と浮き名を流した美女達にとってはまた堪らなかったらしいが、そんなことなどまったく知らないルリは、顔を真っ赤にしてとにかく目を逸らした。

頭の中は混乱してぐちゃぐちゃだ。わけも分らないまま「申し訳ございませんっ!!」ととにかく謝罪を口にして、慌てて彼の側から離れようと身を振ったが、すっかりルリの背中に回ったクロヴィスの腕が許さない。

それどころか、さらにぐっと引き寄せられて、片手で顎を掴んでいささか強引に顔を上げさせられた。

「ク、クロヴィス様っ、あの、あの……どうかお離してくださいっ……」

ベッドに横になるために眼鏡を外したクロヴィスの顔は、まだルリにとっては見慣れない。

そうでなくても、女の園で育って男性に免疫のない彼女には、朝の気怠さをまとった男の壮絶な色気に対抗する術はない。

とにかく極力彼を見ないようにと目を逸らし、離してくれと懇願するしかなかった。

しかし、返ってきたのはびしやりと厳しい一言。

「黙りなさい」

「……っ」

ルリはびくりと怯えて口を噤む。

とたんに、昨夜の自分の所業を振り返り、あまりの無礼さに震え上がった。

部屋に來いとは言われていたものの、ロイズという仲間を得たことで気が大きくなって、一介の侍女の分際で宰相閣下のベッドで熟睡してしまった自分は、何と図々しく恐れ知らずだったのだろうか。

しかし、顔面も蒼白にかたかたと身を震わせ始めたルリに気づくと、クロヴィスは「こらこら、何か誤解してますね？」と呆れたようなため息をつき、今にも泣き出しそうな顔をして見上げてきた彼女の唇に、「隙あり」と口付けた。

「――っ……!？」

「男のベッドであんなに気を許して、ルリはいけない子ですね」

「……？」

クロヴィスはルリを怯えさせないように、極力穏やかな声を装いながらも、彼女を片腕で抱き込んだまま半身を起こして覆いかぶさった。

彼の腕を枕に仰向けになり、どうしていいのかわからないと不安げに見上げてくる少女を、クロヴィスもじっと強い視線で見下ろす。朝の光は確かに二人も元まで届いているというのに、夜のようにしつとりと艶やかな空気が彼らを包もうとしていた。

ところが――

「クロヴィス様……？」

そんな空気を払拭させるように割り込んだのは、幼く拙い子供の声。

そちらに顔を向けてみれば、同じベッドで眠っていたロイズが体を起こし、ごしごしといとけない仕草で目を擦りながら、不思議そうに二人を眺めていた。

とたんにルリの中で張り詰めていた緊張が解れ、ほっとため息をつく。

クロヴィスも、爽やかな笑みを浮かべてロイズに「おはよう」と声をかけた。

それなのに、その後続いた会話は、ルリの安堵を容赦なく打ち碎いた。

「ああ、ロイズ。君のおかげで昨夜の私は狼にならずに済みましたよ」

「……うん……」

「朝日が出たからもう大丈夫――安心して、もう少し寝ていなさい」

そう告げながら、ルリの腕枕になっているクロヴィスの左手が、ぐっと彼女の肩を抱いた。

その力強さに、自分はまだ解放されるわけではないと悟ったルリは、思わず助けを求めるように、クロヴィスの身体の向こうで寝惚けているロイズに視線を向ける。

しかしその願いも虚しく、“朝になったからもうクロヴィスはオカミにならない”と思い込んだ素直な五歳児は、ほっとしたような笑顔を浮かべて、再びベッドの上にとろんと寝転がってしまった。ルリは愕然とし、クロヴィスはほくそ笑む。

「ロイズは本当にいい子だね」

クロヴィスが艶やかな笑みとともにそう呟く中、ロイズのヘーゼルの瞳は瞼の奥に。

彼は二度寝の幸せを噛み締め始めた。

そうして、取り残されたルリはというと、がっちり逃げられぬようにクロヴィスの腕に捕まり、彼の右手はルリの頬をすっぽりと包み込んだ。

そうまでしておきながら、次にルリの上に降ってきたのは、何だか悩ましいため息だった。

「ああ、口惜しいったら」

「クロヴィス様……？」

「私としたことが、なんて愚かな約束をしてしまったのでしょうか」

苦悩する宰相閣下は、きょとんと不思議そうに瑠璃色の瞳を瞬く少女に、昨夜ロイズと交わした「ルリを食べない」という約束を話して聞かせた。

恋愛ごとに疎いルリでも、その「食べる」が何を比喻しているかくらいは判断がつく。

とたんに彼女は頬を真っ赤に染め、クロヴィスは祖母ハニマリアが昨日口にした言葉を思い出していた。

「急いては事を仕損じるとは、こういうことを言うのですね」
「……」

「まあ、確かに。昨夜の自分はいささか性急に事を進めようとしすぎたと、反省はしていますよ。あなたに心の準備をする暇さえ与えませんでしたからね。ロイズに、助けられたのかもしれませんが」

「……」
「しかも、また順序を間違えるところでした。こんなことがあの義姉上に知れば、また何と扱下ろされることか。スパイ役のおじいさまがお留守でよかった」

クロヴィスはそう言うのと、まだ不安げに瞳を揺らめかせているルリの頬を優しく撫で、そっと顔を近づけた。

そうして、ふると震えた唇に触れるだけのキスをし、吐息も交わる近い位置から彼女に告げた。

「――あなたが好きです、ルリ」
「――っ……!!」

自分よりもいくつも年上の洗練された大人の男性が、ルリにそっと告げてよこしたのは、そんな飾らない言葉だった。

余計なものを纏わぬ想いは、まっすぐにルリの心の中へと届き、彼女の胸を熱くする。

「正式に、お付き合いを申し込みます」
「……あ、あの……」

「もちろん、お友達として、ではありませんよ？」

——なぜ、ルリのような侍女風情を？

——なぜ、巧みな話術も絶世の美貌も持たない小娘を？

そんな疑問が頭をもたげるが、彼の真摯な視線は卑屈になりそうなルリを叱咤する。

「先に、義母上にお伺いを立てねばなりませんか？」

「……いいえ……」

鈍いと言われるルリにだって本当は、クロヴィスが自分にそれなりの好意を抱いてくれていると気づいていた。

彼のルリに対するスキンシップは甚だしく、遊びや冗談でキスやハグをする人だとも思えなかったから。

彼に触れられるのは、恥ずかしいけれど嫌ではなかった。

優しい声で名を呼ばれると、嬉しくなった。

眼鏡の奥の穏やかな瞳で見つめられると、心が震えた。

今までもこれから、きつとずっと雲の上の人だけれど、それでもルリも彼を想ってもいいのだろうか？

心の中で育ち始めたこの想いを、口にしてもいいのだろうか？

そんなルリの思いに答えるように、クロヴィスは静かな声でそつと請うた。

「あなたの言葉で答えを聞きたい」

それを耳にしたルリは、覚悟を決めた。

今まで生きてきた中で一番勇気を振り絞って、自分の心に素直になってみる。

そうして自分が発した言葉が、後でどのような結果を生もうとも、

後悔などしないと思った。

「私も」

「うん？」

「私も——お慕いしております、クロヴィス様」

そのとたん、ルリの目の前の美しい男が破顔した。

「——ああ……嬉しいですね。こんなに、嬉しいものなのですね」

この人は、こんなに無邪気な顔をなさるのかと驚くほどに。

その時ルリは、クロヴィスと自分の間に、年齢も、身分も、何の壁も感じなかった。

窓辺から差し込んだ朝日が、ルリを上から覗き込む彼の横顔を照らし、輝かしい笑顔に見惚れずにはいられなかった。

だが、いつまでも惚けさせていてはくれないのが、クロヴィスだ。ぼうつとしたルリにすかさず覆いかぶさり、今度は少しだけ深く唇を塞いだ。

驚きとっさに上げそうになった悲鳴を、ルリは慌てて飲み込んだ。すぐ隣では、すうすうと寝息を立てるロイズがいる。

「ルリの心の準備ができるまで、関係を先に進めるのは待ちます」

「……は、は……い……」

「ですが、私も気が長い方ではない。早く、追いついて来て下さいね？」

「……」

「それまでは我慢します。その代わり、キスは存分にさせてもらいます」

「——えっ……」

「否は聞きません。これが妥協の限界です。それさえも我慢せよと

いうのなら、私は狂ってあなたを一口で食べてしまうかもしれません。――それこそ、オオカミのようにね？」

クロヴィスはそう言って、ルリの返事を待たずにもう一度キスをした。

瑠璃とクリスマス

常春の国グラディアトリアでは、一年中温かく過ごしやすい。

午後のお茶の時間に、今やお馴染みとなった宰相閣下の執務室を訪れたルリは、この日も手作りしたお菓子を持参した。

少し横長の箱の中身は、ケーキである。

執務机を丁寧に片付けてやってきて、テーブルの上の箱を覗き込んだクロヴィスは、「おや」と眼鏡の奥の瞳を瞬かせた。

「今日のケーキはやけに飾りに凝ってますね。これは……木の幹ですか？」

「はい、クロヴィス様。今夜はスマレ様のお国では“くりすますい？”と言うそうで、こういうケーキを食べてお祝いするんだそうです」

この日もレイスウエイク大公爵にくっついて王城へやってきたスマレが、彼が皇帝と宰相の相談役を務めている間に皇太后陛下の元を訪れ、彼女や侍女達と遊ぶ傍らルリと一緒にケーキを焼いたのだ。それは、スマレの生まれた世界でクリスマスに定番の、ブッシュ・ド・ノエル。

フランスという国の言葉で、“クリスマスの薪”という意味なのだそう。

「まあ、あの義姉上様が絡んでますか。スマレの国には、いろいろとわけの分からない風習があるようです。兄上もいちいちお付き合いなさって、ご苦労なことです。けれど、ルリまであのちびっ子に付き合うことはないんですよ？」

「でもでも、クロヴィス様。ご一緒させていただけてとても楽しかったのです」

「……まあ、あなたが楽しいと言うなら、かまいませんけどね」

そもそもクリスマスというのが何の行事なのかは分からないが、とにかくうきうきしているスマレが可愛かったので、ルリも喜んで付き合った。

チョコレートベースのロールケーキにチョコレートクリームを塗り、フォークの先で木の幹の表面のように筋を描き、その上に果物やナッツをトッピング。

スマレが実家から持ってきてくれた“イチゴ”という、トンガリ帽子のような形の小さな赤い果物が特に可愛らしい。味見に一足先にいただいたそれは、甘酸っぱくてほっぺが落ちそうなほど美味しかった。

ホールケーキともロールケーキとも違い、どこから切ろうかルリは悩む。

そんな彼女を微笑ましく見守りながら、クロヴィスは紅茶をカップに注いだ。

「それでクリスマスイヴ」というのは、そのケーキを食べる以外に何をするとか、スマレは言っていましたか？」

「あとは、シチメンチョウという鳥の丸焼きを食べるんだそうです」

「聞いたことのない鳥ですね」

「七つの面の鳥と書くのだそうです。七つも顔があるなんて、すごい鳥ですね」

「そんな不気味なものを食べるのはごめんですね。真似るなら、普通のチキンにしましょう。それから、何をするのです？」

ようやくナイフを入れる場所を決意して、ケーキを切り分け始めたルリの前に紅茶のカップを置き、その向かいのソファに腰を下ろ

したクロヴィスは、断面を見せ始めた切り株を眺めながらさらに問いかける。

ルリは慎重にナイフを進めながら、スマレに聞いた話を彼に教えた。

「とにかく飲んで騒いで、酔い潰れて寝るんだそうです。そうしたら、眠っている間に白いお髭のおじいさんがいらっしゃって、お願い事を聞いてくれるのだそうです。素敵ですね」

「こらこら、待ちなさい。そもそもその白い髭のおじいさんというのは何者ですか？ どこからいらっしゃるのですか？」

「ソリに乗って空からいらっしゃって、煙突を通して来られるのだそうです」

「煙突からこそこそ入ってくるのは泥棒です。何故泥棒が願いを叶えてくれるのですか？ おかしいでしょう」

クロヴィスが眉を顰めてそう返すも、何故かルリはぱあぁと顔を輝かせ、弾んだ声を上げた。

「まあ、クロヴィス様ったら！ スマレ様が仰った通りの答えをなさいました！」

スマレは、ルリへのサンタクロースの説明の後にこう付け加えていた。

『クロちゃんにこの話をしたらね、“煙突から入ってくるのは泥棒だ”って言って、胡散臭いって顔するよ、絶対。あんな夢のない大人になっちゃ駄目だよね』

「……夢がなくて悪かったですね」

「大丈夫です！ きっとクロヴィス様の所にも、さんたくろーす様

は来て下さいます！ ルリはちゃんとクロヴィス様の分の靴下も用意しておきました！」

「は？」

「さあ、今からでも間に合います。お願い事を紙に書いて、この中に入れて下さいね！」

そう言って、ルリが得意げに取り出したのは、巨大な巨大な靴下が二つ。

赤と白の大きなシマシマは、つい先ほどまで膨大な書類と睨めっこしていたクロヴィスの疲れ目に、あまり優しくない。

彼は眼鏡を外して目頭を揉みながら、おそらくちっちゃな義姉と同じレベルでうきうきしているルリに向かい、ため息混じりに問いかけた。

「……ルリはもう、願い事を書いたんですか？」

「はい！ もちろんです！」

それに、元気よく答えた彼女に向かい、眼鏡をかけ直したクロヴィスは、すっと片手を差し出した。

「――見せないさい」

「――っ！？ だ、だめですっ！ これはさんたくろーす様にしか見せてはいけないのです。そうしないと叶えてをいただけないのですっ！」

「あのね、そんな得体の知れないじーさんに頼まずに、私に頼みなさい。あなたの願いくらい、いくらでも叶えてあげます」

「だめです、だめですっ！ ああっ……だめっ……！！！」

「そういう色っぽい声は、ベッドの中だけになさい」

「――っ！！！」

顔を真っ赤にして怯んだルリの際をつき、彼女の靴下を奪い取ったクロヴィスは、中に綺麗に折り畳まれて入っていた紙を取り出して広げた。

慌てたルリが取り返そうと手を伸ばすも、身長之差は歴然としていて、クロヴィスがそれを高く掲げてしまうと到底届かない。

それでも一生懸命ぴよんぴよん跳ねて、必死で取り返そうとするルリの姿が可愛くて、クロヴィスはにやにやしながら紙に書かれていた文字を読んだ。

「……」

「返してくださいませっ、クロヴィス様っ!!」

「……」

「ああもう、読んではだめですっ!!」

「……ルリ」

「……っ」

そのメモには、ルリらしい几帳面で慎ましい字でこう記されていた。

『クロヴィス様が、ゆっくりお休みがとれますように』

「まあ、確かに、ここ数日は忙しくて休めてませんでした……」

「もう……十日も夜遅くまでお仕事をなさってます」

この数日、周辺諸国の要人が来賓したり、新しい外交条約を制定したりと忙しく、その上宰相閣下の右腕たる副官が、田舎の母上のぎっくり腰の看病のために休暇をとっていたのだ。

そんな中でも彼の癒しとして相変わらずお茶の時間に招かれていたルリは、当然彼がリュネブルク邸にもずっと帰れていないのを知っていた。

それに……

「……ルリ？」

「はい」

「ここ数日は、あなたともお茶の間の一時しか、ゆっくり話せませんでしたね？」

「……はい」

「……もしかして、寂しかった？」

「……」

そんな言葉が凶星だったらしいルリの顔は、一瞬にして真っ赤に染まり、クロヴィスは破顔して愛おしげにそれを見つめた。

「ほらみなさい、こんな願い、得体の知れぬ爺さんになど叶えられるはずがないでしょう」

「……すみません」

クロヴィスはソファから立ち上がると、テーブルを回って向かいのルリの側に行き、そっと彼女の肩に腕を回して抱き寄せた。

ルリはまだ赤いままの頬を両手で隠すように抑え、恥ずかしそうにしている。

それがまたどうにも可愛くて、クロヴィスは彼女の柔らかな栗毛にそっと唇を落とした。

そして後続くのは、彼らしい言葉。

「ここ数日の案件は、昨日で大体片がついたのですよ。実はもう明日からのルリの休みも抑えています」

「——えっ？ ……いつのまに？」

「侍女頭に、ルリの休みは先に知らせるように頼んでありますので」「ええっ……？」

「ついでに、三日の連休を確保しました。当家の別荘で過ごすよう、もう手配も済んでいます」

「そんなの、初耳ですっ!!」

「ええ、今初めて言いました。でも大丈夫、義母上には既にお許しをいただいています」

「皇太后様までっ……?」

自分の与り知らぬ所で着々と外堀が埋められていることを聞かされたルリは、驚いて身体を引き離そうとしたが、もちろんそんなことを許すはずもないクロヴィスは逆に深く抱き込んで、にやりと人の悪い笑みを浮かべて彼女に告げた。

「そういうわけですから。煙突から来るじいさんなどに期待していないで、今日は旅の支度が済んだら早く寝なさいね? 明日の朝早く、迎えに行きますから」

「……」

その夜、ルリの元にはもちろんサンタクロースは訪れては来なかった。

しかし彼女の願いは見事に叶い、翌朝約束通りルリを迎えに来たクロヴィスは、仕事から解放された晴れやかな笑顔を浮かべていた。

メリークリスマス!

瑠璃とマカロン

「クロちゃんってば、オオカミさんっ!」

「ううむ……また新たなスパイの気配……」

クロヴィスとルリの自宅デートが無事終了して十日あまりが過ぎた頃、またも宰相執務室の扉を蹴破る勢いで飛び込んできたのは、クロヴィスのちっちゃな義姉上だ。

ちようど、最後の書類にサインをし終わったクロヴィスは、「あ、お茶の時間ですね」と立ち上がって、彼女を応接用のソファへと誘導した。

いや、彼が誘導したのは、その義姉スマレの足代わりとなって彼女を抱き上げていた、兄ヴィオラントだ。

よくよく見れば、ワンピースドレスの裾から覗くスマレの細い足首には、何重にも白い包帯が巻かれていて痛々しい。

「足はまだ痛みますか? とんだ災難でしたね」

それは幾日か前、クロヴィスとヴィオラントの祖母ハニマリアが掘った穴に、運悪く落ちて捻ったという患部に違いない。いつも憎まれ口を叩き合う仲ながらも、クロヴィスにとってはスマレは小さな妹のようで可愛く、大した怪我でなかったことにほっとしていた。スマレの方も、彼が本気で心配してくれたことが分かったのか、ソファに座ってぶらぶらさせた足を「全然問題ないよ。平気」と言っただけで振ってみせては、傍らに寄り添ったヴィオラントに「まだ足首を動かしてはいけない」と嗜められた。

ちなみに、祖母ハニマリアはルリのケーキを賄賂にスマレに取り

入り、何とかヴィオラントの機嫌を快復することに成功し、現在彼の領地で意気揚々と穴を掘っているらしい。

何でも、思った通りに珍しい化石が出てきたとかで、夢中になって全然家に帰って来てくれないと、祖父アルヴィースが嘆いていた。

「そんなことよりっ！ クロちゃんってば、いきなりルリさんをベツドに誘ったってどういうこと！？ 早まっちゃだめって、おねえちゃまはちゃんと忠告したよね！？」

「……レポート役のおじいさまは、その頃ハニーさんと一緒にそちらのお屋敷にお邪魔していたはずですが、一体誰があなたにそれを報告したんでしょうか？」

「スミレの情報網をなめてはいけないぞ、クロヴィス。翌日、そなたの屋敷から可愛い字の字の密書が届いた」

「……可愛い字の、密書？」

「じゃあん、これだー」

そう言って、董がいつものように胸元から取り出した紙切れを受け取り、目を通したクロヴィスは思わず天を仰いだ。

そこには、拙く可愛い字で、紙面を目一杯使ってこう書かれていた。

『よるは　くろ？いすさまとるとぼくと　さんにんでならんでねました　ぼくがまんなかでした　くろ？いすさまが　おおかみにはならないと　おっしゃったので　ぼくはねました　あさおきたら　くろ？いすさまとるりが　くつついてなかよしでした　ぼくは　もうすこしねました』

「……ロイズですか」

アルヴィースの後を継いでスミレのデバガメの片棒を担いだのは、

リュネブルク家の養子ロイズだったようだ。

「川の字で寝ちゃうとか、クロちゃんてば何ソレどっからつつこめばいいのって感じだけど、ロイズは喜んでたみたいだから褒めてつかわす」

「はあ、そりやどうも……」

「でも、起き抜けの乙女に対するセクハラ行為は反則なので、やっぱり褒めてあげない」

「ああもう、どっちですか」

「あと、五歳児の前での痴漢行為も許し難いので、お兄様からのありがたなお説教を頂戴しなさい。——はい、ヴィーさん、どうぞっ」

慎ましい胸を張ってふんぞり返り、眉間に皺を寄せた可愛い顔で、懸命に「怒ってるんだからね!」とアピールしつつ、スマレは「ほら、言ってやりなさい」とヴィオラントをけしかけた。

「……クロヴィス」

「はい、兄上。何だか、面倒をおかけして申し訳ありません……」

「……うむ、まあ……ほどほどにしなさい」

そんな歯切れの悪いヴィオラントの苦言は不満だったらしく、「ヴィーってば、もっとビシッと!」とスマレは容赦なく駄目だしした。

「それで、今日はわざわざ私に説教しにいらしたんですか?」

そう問いかけながら、紅茶のカップを目の前に置いたクロヴィスを見上げ、スマレは稚い仕草で「ううん」と首を横に振った。

「違うよー。クロちゃんはついだよ、ついで。この前ルリさんがくれたリンゴケーキのお礼に、こっちにはないお菓子作ってきたんだよ。クロちゃんにもあげるね、ついでに」

「ついでついでと、うるさいですね。では、もう先にルリの所には寄ってきたのですか？」

「ううん、それがね、ルリさん留守だったの。皇太后様のおつかいに行ってるんだって」

「ああ、そうでしたか」

「だから、しかたないから、クロちゃんに先にあげるね」

「しかたないからは余計ですが……ありがとうございます」

「うむ、苦しゅうない」

「……」

泣く子も黙る宰相閣下に平気で偉そうな口をききながらも、彼のいれた紅茶を口に含んだスマイレは「うん、クロちゃんの紅茶おいしい」と微笑む。そういう素直なところは可愛らしいのにと苦笑しつつ、クロヴィスは彼女が取り出した紙の箱を覗き込んだ。

そこには、少女の掌に載るほどの大きさの、淡い黄色やら黄緑やら薄紅色のまあるい物体が入っていた。

甘い匂いがするし、スマイレはお菓子を作ってきたと言ったのだから、それもお菓子の一種なのだろうが、何とも不思議で可愛らしいおもちゃのようだ。

「どうぞ」と促されて、クロヴィスはそれを中指と親指で挟んでつまみ上げたが、感触がまたどうにも頼りない。

表面はさくつとした歯ごたえで、中はしっとりとした食感。

彼が選んだ淡い黄色の生地挟まれていたのは、甘酸っぱいレモンのクリームだった。

「へえ……これは確かに、初めて食べます」

「マカロンって言うんだよ」

「うん、何だか面白い食感ですね。ルリも喜びそうです」

「でしょ？ でもね、こんなおもちやみたいに可愛いけど、卵白を鬼のように泡立ててメレンゲにしなきゃいけないから、結構大変なんだよ？ クロちゃんも、いつもお菓子作ってくれるルリさんへの感謝を忘れちゃだめだからね？」

「はあ、そうですね。ありがたいご忠告、肝に命じておきます」
「うむうむ」

素直な返事をしたクロヴィスに満足したように頷くと、スミレもマカロンを一つ自分の口に放り込んだ。薄紅色のそれには、ベリーのジャムが挟んであって、こちらも甘酸っぱい。それから彼女は薄緑色のマカロンを摘んで、今度は隣のヴィオラントの口にも放り込んだ。

薄緑色は“マツチャ”という、スミレの故国で作られる風味豊かな苦味のあるお茶がベースで、一番甘くない。

甘いものが苦手な夫のために、お菓子作りにもぬかりがない彼女には感心する。

そして、妻の作った甘味だけは唯一口にして、愛おしげに目を細める兄ヴィオラントの様子に、クロヴィスは「ああもう、あてられちゃいますね」と笑った。

その頃、ルリは敬愛する主人である皇太后陛下より、とある用事を仰せつかつて王宮の外に出ていた。

なんでも、今日は皇太后エリザベスがこの王城に嫁ぐ前より門番として仕える、勤続五十年の老兵ジャームスの誕生日なのだという。あまり大門を出入りしないルリは知らなかったのだが、皇族の方々にとっては馴染みの深い老人なのだそうだ。

皇太后陛下は、そのジャームスの誕生日祝いにルリにケーキを作らせ、完成したそれを届けるようにも命じた。

そうしてルリが門番の詰め所を訪れると、すでに非番の連中が大勢集まって、なかなか盛大な誕生日パーティが始まっており、可愛らしい侍女の飛び入り参加に一同は大いに盛り上がった。

皇太后陛下の心遣いとルリの手作りのケーキにジャームスは感涙し、ルリも温かい気持ちになった。

テーブルの上にはもう一つケーキの箱があって、聞けば何かとご縁のあるレイスウェイク大公爵夫妻も、わざわざ祝いに顔を出して下さったのだという。

「今日は、皇太后陛下の侍女に会いに来たともおっしゃったんじやが、それはお前さんのことじゃあないかい？」

そんなジャームスの言葉に、にこにこして自分に駆け寄ってくる可愛らしい大公爵夫人の姿を思い浮かべたルリは頬を緩め、もう一度彼に祝いの言葉を重ねてから詰め所を後にした。

スマレと会えるという喜びと、何度も礼を言っで見送ってくれたジャームスに、帰路を急ぐルリの表情は明るかったが、その心の片隅には少しだけちくりと痛む部分があった。それは、先ほど門番の詰め所に顔を出した時、ルリを見た年若い連中がこそそと耳打ちし合っていることに気づいたからだ。

ルリが先日、宰相閣下の邸宅に招待されたことは、王城内で大きな話題となった。

それまで、多くの美女と浮き名を流しながらも、その誰にも懐深くを許さなかった宰相閣下が、皇太后陛下付きの年若い侍女を見初めて頻繁に執務室に呼び寄せているということも、自然と噂として広がっていた。

しかも、リュネブルク邸滞在二日目の朝に正式に恋人同士となっ

てからは、クロヴィスのルリに対する愛情表現には一切の遠慮がなくなつた。

一緒に廊下を歩く際には腕を組ませ、人に紹介する時にはルリの腰を抱いて「私の大切な人です」と憚らずに告げた。

何より、泣く子も黙ると恐れられる宰相閣下の伶俐な瞳が、あれほどまでに甘く蕩ける様を、今までいったい誰が想像出来ただろうか。

二人の仲が報じられた当初は、宰相閣下に想いを寄せる貴族の令嬢や、他の大臣に仕える比較的身分の高い侍女達から、やっかみによる嫌がらせも少なからずあった。

しかし、それを見越した皇太后陛下付きの侍女達が、極力ルリを一人きりにしないように務め、心ない言葉や物理的攻撃からも可愛い妹侍女を守った。

さらには一度、たまたま一人きりになってしまったルリが、とある侯爵家の令嬢に捕まって「身分を弁えなさい」と罵られた時には、颯爽と現れたクロヴィスが相手の前に立ち塞がり、絶対零度の笑顔で「私のルリを苛めないください」と告げたことまであったのだ。後ほどその令嬢は、親に自宅謹慎を食らったのだとか。

何より、現在王城の女主人の立場にある皇太后陛下が、二人の仲を認めると公言している手前、ルリを貶めることは皇太后陛下を貶めることだと忠告されて、ルリへの表立った嫌がらせは段々と収束していった。

おかげで、ルリはまた以前のように一人きりで王城を歩けるようになったが、時々「ほら、あの子が例の……」とこそこそ噂される場面に出くわすようになった。

それはそれで仕方がないことであるし、ルリもいくらか覚悟をした上でクロヴィスの想いに応えたので、極力気にしないよう務めていた。

門番の詰め所を出たルリは、皇太后陛下の午後のお茶の時間に間

に合うようにと、急いだ。

もしかしたら、自分に会いに来てくれたスマレが、首を長くして待っているかもしれない。

穴に落ちて捻ったという足首は、もう大丈夫なのだろうか？

あの、ふわふわの砂糖菓子のような可愛らしい笑顔に早く会いたい。

ルリの足は、自然と早まった。

こういう時は、近道を使う。

それは――そう、何ヶ月か前。

スマレと出会い、そうしてクロヴィスと密接に関わるきっかけとなった道だ。

宰相執務室のある建物の、すぐ脇を通る。

そこには、スマレが“クリ”と称した大振りの実のなる木があるのだ。

いがに包まれたそれは熟れて弾けて、大方は地面に落ちてすでに拾われてしまっていたが、どうやら遅付きの実が再び木の上で育っているようで、まだ緑色のいががたくさん見えた。

それがまた熟れ落ちたら、拾って焼き菓子にしようと思いつながら、上ばかり見上げていたルリは前からやってくる人影に気づくのが遅れた。

――トンツ……

「――あっ……」

気がついた時には肩が触れ合い、ルリはわずかにふらついていた。

「すっ、すみませんっ……！」

ぼーっと上を見上げていた自分に非があると思ったルリが慌てて

と謝ると、相手は一瞬立ち止まった。

相手は、騎士服を纏った背の高い男だった。

少しくすんだ金色の前髪は長く、目元ははっきりとルリからは見えなかったが、彼は肩越しにゆっくりと振り返った。

それを見て、もう一度「ぼおっとしていました。すみません!」

と頭を下げるルリをじっと見据えたかと思うと、小さな声で「いや」と答えた。

そして――

「こちらこそ、失礼――ルリ・エリュツセ」

「――っ!!」

不気味なほど静かな声でそう告げると、目を見張るルリを残して立ち去ってしまった。

「……どうして……」

エリュツセ

それは、ルリが捨てた名の一つ。

母の実家である裕福な商家の名であり、罪人として処刑された父との関わりを嫌ってルリと母を捨てた家の名だった。

久しく忘れていた名で呼ばれたルリは、ただ呆然その場に立ち尽くし、小さくなる男の背中を見送っていた。

瑠璃とフィナンシェ1

ルリはここのところ、毎晩決まって夢を見る。

その夢の中では、ルリはまだ随分と幼い。

ドレスを着ているのは、母だろうか。

では、その隣に寄り添っているように見える、濃い色の服を着た大きな人は誰だろう。

全てにもやがかかったように、何もかも輪郭がはっきりとせず、それが一体どんな場所でどんな状況なのか、皆目見当がつかない。

ただ、——たぶん幸せなのだ。

静かで穏やかで、たぶん泣きたいくらい幸せだったのだ。

けれど、そう気づいたとたん——いつも突然、夢は終わる。

お前に幸せなど掴めるものかと、冷たい何かがルリを嘲笑うように、彼女の意識を真っ暗闇へと突き落とすのだ。

そうして目覚めたルリは、決まって枕を涙で濡らしていた。

「顔色がよくないですね」

「……え？」

五日に一度の約束の、宰相執務室で迎える午後のティータイム。

この日、ルリがクロヴィスのために持参したのは、フィナンシェだ。

マドレーヌとよく似ているが、フィナンシェは小麦粉とほぼ同量のアーモンドプードルというナッツの粉を使う。

それがない場合は小麦粉と少しの油分を加えることで代用は可能だが、ルリは以前スミレに分けてもらったアーモンドの香ばしい風味に惚れ込んでいた。

そして、フィナンシェを作る上で重要なのは、必ずバターを火にかけて焦がしバターにすること。

バターが褐色になるまで焦がし、熱いうちに茶こしなどで漉す。沈殿したものには苦味があるので、この一手間を惜しんではいけない。

そうして出来上がった焦がしバターを、卵白・砂糖・アーモンドプードル・小麦粉を合わせた生地混ぜ、後は型に流して焼くだけだ。表面に焼き色が付いてカリッとする、とても美味しい。

しっとりといっていてじゅわっと広がる焦がしバターの風味は絶品。ストレートティにも、とてもよく合う。

紅茶をいれるのは、いつもクロヴィスの役目だ。

それを待つ間、持ってきたフィナンシェを皿の上に移していたルリは、ふいに声を掛けられて彼を見上げた。

ちょうど、紅茶が注がれたカップが彼女の方に差し出されたところで、芳しい香りを載せた湯気がふわりとルリの頬を掠めた。

それにほっと心が落ち着くように感じながら、自分の前のテーブルに置かれたカップに礼を言った。

「それを飲んだら、この部屋で少し横になっていきなさい、ルリ」
「クロヴィス様？」

自分の分のカップをテーブルに据え、ルリの向かいのソファに腰

を下ろしたクロヴィスは、心配そうな表情で彼女の顔を覗き込んだ。

「ソファで申し訳ないですが、寝心地はなかなかですよ。私もよく仮眠に使うので、保証します」

「そ、そんなっ……大丈夫です。眠くないです」

「勤務時間内だと気にするならば、いらぬ心配です。あなたの主たる皇太后陛下直々に、ルリを休ませよと仰せつかってますから」

「え……？」

「義母上は、ちゃんと見ていらっしゃいますよ」

「……」

そう言われてルリは、昨日テーブルに花をいけている時、側にいた皇太后エリザベスが「顔色が優れないようだけれど、少し横になつては？」と、労るように髪を撫でてくれたことを思い出した。

その時は「大丈夫です」と笑顔を返したが、彼女はずっとルリのことを気づかってくれていたようだ。

「ここのところよく眠れていないようだ、侍女頭も心配していますよ。それに、あなたの姉上のような侍女の方々もね。彼女達ときたら私の顔を見るなり、ルリが変なのはお前のせいかと詰め寄ってくるようになりました」

「ええっ……！？」

侍女頭には冴えない顔色を見咎められて、体調管理をしっかりとないさいと嗜められたばかりだったし、姉侍女達がまさか自分のことで宰相閣下に噛み付いているとは思わなかったので、ルリはひどく驚いた。

そんな彼女に苦笑してみせると、クロヴィスは優しい目をして続けた。

「ルリは、愛されていますね。まあ私も、あなたへの愛情では彼女達に負けないつもりですけどね」

「……っ……！」

「とにかく、皆あなたのことを心配しているんですよ。彼女達を安心させるためと思って、大人しく横になりなさい」

「でもっ……でも……」

「ううむ……なかなか強情ですねえ。口で言ってもきかないようでしたら、力尽くで横にならせることになりますが……」

「え……?」

「その場合は、私の膝枕がきます」

「――!!」

それを聞いたルリは、紅茶のカップを持ったままピキリと固まった。

対するクロヴィスはにっこりと微笑むと、ソファから立ち上がってテーブルを回り、彼女の側までやってきた。

そうして、飲みかけのカップをそっと取り上げてソーサーに戻すと、呪縛が解ける前にさっとルリの膝裏と背中 hands を添えて、ふわりと彼女を抱き上げた。

「――っ!？」

「こら、じっとしなさい」

そして、突然の浮遊感にわたたと慌てたルリを宥めつつ身体の向きを変えると、彼女をソファに横向きに下ろした。

宰相執務室のソファは大きく、ルリが仰向けに寝て足を伸ばしてもはみ出さない。

はっと我に返ったルリが慌てて脱ごうとした靴は、一足先にクロヴィスに取り上げられて、脇にきちんと並べて置かれた。

「私は、まだ少しサインしなければいけない書類があるんですよ。それが終わるまで部下達はこの部屋には入れませんから、安心して眠っていなさい」

「でも……文官の皆様、お邪魔にはなりたくありません」

自分が寝ているせいで、クロヴィスの部下達がこの部屋から閉め出されるようになれば、彼らの仕事が滞ってしまうかもしれない。そう思ったルリが、ソファから身を起そうとすると、素早くクロヴィスの手が彼女の肩を掴んで押しとどめた。

そうして彼は内緒話でもするように、ルリの耳元にそっと口を近づけて囁いた。

「あのね、実はあなたがくれたお菓子を食べながら仕事してやろうと企んでいるんですよ」

「は、はい……」

「でも、いい年した男がそんなところ、人に見せられないでしょう？　だから誰も入れないんですよ。私の都合ですから、ルリは気にしないでいいのです」

ルリがこの日用意したフィナンシェは、中はしっとりふわふわだが外はカリッと堅めなので、摘んでも食べカスや油分が指に付きにくい。しかも形を棒状にしてあるので、ながらで食べるのにちょうどよかった。

小腹が空いた時に摘んでもらえればと意図して作った形だったので、クロヴィスがそれを活用してくれるならルリとしても嬉しいことだ。

それでもまだ戸惑いを隠せない様子のルリをソファに残し、クロヴィスが一度傍から離れたかと思うと、すぐに毛布を持って戻ってきてルリの上にふわりと掛けた。

「……本当はね、今日はこのまま自室に上がらせるのが一番だと、分かっているんですよ」

そうして、ふっと小さく彼が零したのは、自嘲の笑みだった。

「でも、あなたをまだ帰したくないばかりに、この部屋で横にさせようとしている。つまり、私の我が侘なんです」

「クロヴィス様……」

「あなたの眠りを、一時でもいい。どうか、私に守らせてください」
「……」

ルリの頭の横しゃがみ込んだクロヴィスは、そう言って彼女の髪をそっと撫でた。

大きいのに繊細な掌はどこまでも優しく、ルリの心の強張りをゆっくりと解いて眠りへと誘う。

「……クロヴィス様」

「眠りなさい、ルリ。傍にいます」

縫るように彼の名を呟いたルリに、応えた声は低く優しく鼓膜を揺らした。

自然に閉じた瞼の上に、そっと押し付けられた温かな感触に、ルリは自分は今なんて幸せなのだろうと思った。

??その幸せを失いたくない、奪われたくない

そう思いながら、ルリはついに意識を手放した。

その時のルリは、何の夢も見ずにぐっすりと眠れた。

静かで穏やかで幸せなのに、とてつもなく悲しいあの夢も、何も。

それなのに

優しい眠りが救ったルリの心を、暗闇のどん底に突き落とすような冷たい声が、ある日彼女の上に容赦なく降り掛かった。

「――エリュツセの女狐」

その言葉は侮蔑と憎しみに満ち、鋭く尖った刃のようにルリの胸を深く切り裂き、その身に流れる全ての血を踏みにじる。

振り返ったルリの目に映ったのは、背の高い男の姿だった。

グラディアトリア騎士団の制服を身にまとい、少しくすんだ金色の前髪の奥で揺らめく瞳の強さに、ルリは怯えた。

それは先日、栗の木の下で肩が触れ合った騎士。

ルリ・エリュツセ――と、絶縁した母方の名でルリを呼んで男だった。

足元にできた自分の影が、地獄に引きずり込もうと足首に絡み付き、闇がじわじわと這い上がってくるような恐怖がルリを支配した。

瑠璃とフィナンシェ2

クロヴィスと関わるようになってから、ルリの世界は大きく広がった。

ただ皇太后陛下のいち侍女として控え、彼女や侍女仲間以外とはほとんど口もきかなかった毎日が嘘のように、王宮の中にも知り合が増えた。

その中には、ルリと宰相閣下の仲を知って取り入ろうとするような、下心のある人間も少なくはなかったが、ルリももう子供ではないので、それに騙されることや傷つくこともなかった。

甘味好きの副官をはじめ、クロヴィスの部下の文官連中は、時々自分達の分まで差し入れをくれる可愛らしい侍女の来訪を毎回諸手を挙げて大歓迎。

宰相執務室に仕える侍女達は、文官の仕事をサポートする秘書的な役割が大きく、知的で自分をしっかり持った彼女達には常に余裕があり、ルリにも優しく接してくれる。

時々宰相執務室で鉢合わせすることがある、グラディアトリアの若き皇帝ルドヴィークとは、ルリは同い年ということもあって、最近では気軽に声を掛けてもらえるようになった。

ルリにとって己の生い立ちの後ろめたく、それを指摘されたくないばかりに、今まではずっと下を向いて生きていた。

視野を狭めれば嫌なものは目に入ってこない。

優しい主人と姉侍女達だけの世界はぬるま湯のように心地よく、ずっとそうしていたいと思っていた。

けれど、一度開けてしまった世界はもう元には戻らない。

開けた視界の向こうに見つけてしまったクロヴィスという存在に向かい、ルリは閉じこもっていた自分の殻から這い出しはじめていた。

その日は、ルリは朝から浮き浮きしていた。

なぜなら、午後からまたレイスウェイク大公爵の可愛らしい奥方が、皇太后陛下の元を訪れる予定になっていたからだ。

しかも、急遽リュネブルク公爵家からも、先代当主夫妻であるアルヴィースとハニマリアが訪れることになり、レイスウェイク大公爵家とリュネブルク公爵家という親戚関係にある二つの貴族のお茶会に、恐れ多くもルリは同席することを許された。

お茶会は皇太后陛下が仕切ることになったのだが、彼女はルリに自分の侍女としてではなく、クロヴィスの恋人として席に着くように命じたのだ。

もちろん、身の丈に合わぬ場に顔を出すことへの緊張が緩むことはないが、クロヴィスがきつとそつなくフォローしてくれるに違いない。

それに、いくらかルリを安心させるのは、一緒にお茶会の席に着く予定のスマイレの存在だ。

彼女はきつと、今日も珍しいお菓子を作ってきてくれているだろうし、ルリも先日のフィナンシェが好評で、クロヴィスにもう一度食べたいと請われたこともあって、この日も朝早く起きて焼いておいた。

焼きたてで表面がカリっとしているのも美味しいが、時間が経ってバターが馴染んだものもまたうまいのだ。

妹がいたらこんなに可愛いのかしらと、ルリがいつも愛おしく思う少女は、喜んで食べてくれるだろうか。

午前中は通常通りの侍女の仕事をこなし、午後には皇太后エリザベスの見立てで侍女のお仕着せからドレスに着替えることになっていた。

ルリはそこまでしていただかなくてもと恐縮したが、エリザベスに「あら、今日のお茶会では、わたくしはあなたの母役ですよ。母とは、娘を飾り立てたくて仕方のないものなの」と押し切られたのだ。

お茶会は、皇太后陛下下の私室で行われることになっている。

ルリはとにかく、この日侍女の格好をして行う最後の仕事として、お茶会のテーブルを飾る花を取りに王城の庭に下りた。

懇意の庭師が昼食に向かう前に捕まえて特別豪華な花束を作ってもらい、それを抱えて浮き浮きと庭園を歩く。

しかし、そんな彼女を呼び止める者があった。

「ごめんなさい、ひとつ頼まれてくれなしかしら」

「はい、何でしょうか？」

それは、皇帝陛下ルドヴィークに仕える侍女の一人で、ルリも何度か顔を合わせたことのある人物だった。二つ三つ年上の彼女とは、あまり親しく話をする機会はなかったが、何か困っている様子にルリは足をとめた。

少し顔色が優れないようなのが心配だったが、相手は何故かルリとは目を合わそうとはせず、きよろきよろと辺りを見回してから小さな声で告げた。

何でも、午後の皇太后陛下下のお茶会には皇帝陛下も顔を出す予定らしく、そのための手土産の手配を彼女が担当したのだという。美味しいと評判の老舗のショコラを用意したのだが、ショコラは非常に熱さに弱く溶けやすいお菓子なので、今は王城の裏にある冷蔵貯蔵庫に保管してあるらしい。

それは、傷みややすい食材を保存するために冷温に保たれた地下室

で、ルリもお菓子作りに使う卵やミルクを調達しに、何度も足を運んだことのある場所だった。

「急ぎで、別の御用を仰せつかってしまったの。あなた、皇太后陛下の侍女でしよう？ 申し訳ないけれど、貯蔵庫に取りに行つてそのままお茶会に届けてもらえないかしら」

「あ、はい……私でよろしければ……」

ルリが頷くと、その侍女はほっとため息をつき、けれど何故か表情は浮かないままだった。

そして、相変わらずルリと目を合わせないままショコラの箱の置き場所を告げると、逃げるようにその場を立ち去ってしまった。

ルリは何となく腑に落ちないものを感じながらも、手に切り花を持っていたことを思い出し、早く用事を済ませて水にさしてやらねば萎れてしまうと慌て、足早に貯蔵庫のある場所に向かって歩き始めた。

それが意外に素早い動きであつたらしく、彼女に声を掛けそびれた者達がいた。

「ルリさんってば、意外にきびきび動くね」

「ルリは働きものだよ、スマレ様。そういうところ、クロヴィス様といっしょだ」

それは、実はすでに到着していたレイスウエイク大公爵夫人スマレと、先代リュネブルク公爵夫妻に連れられてきていたかの家の養子ロイズだった。

現在客人達は宰相執務室に集まっていて、スマレは何やら小難しい話を始めた一同から抜け出し、ロイズはその伴である。

先日捻ったスマレの足首も完治し、過保護の権化と化していたヴィオラントも、ようやく彼女が歩き回ることを許してくれた。

二人仲良く姉弟のように手を繋いで外に出ると、例の栗の木の袂に熟れた実が落ちているのを見つけた。

この日はちゃんと袋を用意していたスマレは、ロイズと食べられる木の実談義をしながらそれを拾っていたのだが、その時少し離れた庭の緑の中をルリが小走りで通り過ぎるのが見えたのだ。

飼い主を見つけた子犬のように盛大に尻尾を振って、二人は揃って彼女を追いかけたが、なかなか追いつけない。

仕方がないので、声を揃えて大声で呼ぼうかと相談し始めた時、スマレとロイズの目に不審な輩が映り込んだ。

「……あれ、絶対怪しいよね？　ロイズ」

「……うん、あやしい」

それは、シャツとズボンというどこにでもいる服装の連中だったが、行動が異様であった。

明らかに、ルリに気づかれぬように後を付けている。

しかも男ばかりが五人、うち一人はグラディアトリア騎士団の制服だ。

できるだけ日の当たらない場所に作られた冷蔵貯蔵庫に向かうルリの足は、自然と人の目の届きにくい王城の裏へと進んでいく。

即座に不穏なものを感じ取ったスマレは、怪しい連中に気づかれないようにロイズに耳打ちした。

「さっきのイガイガが落ちてた木の所、分かる？」

「うん、分かる」

「よし、じゃあ急いであそこまで戻って、二階に向かって叫びな。すぐ上がクロちゃんの執務室だから」

「なんてさけんだらいいの？」

そう首を傾げて問いかける五歳児に対し、スマレはアメジストの

ような瞳をキラリと鋭く光らせこう言った。

「ルリさん、超ピンチ——って」

大きく頷いたロイズは、元来た道を駆けて行った。

それを見送ったスマレは、いつになく真剣な顔をして視線をルリと男達に戻す。

そうして、懐を探ってある物を取り出すと、それをそっと目印に地面に落としながら、彼らに気づかれないように後を付いて歩き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7254y/>

瑠璃とお菓子

2012年1月3日22時29分発行